香川県埋蔵文化財調査年報

昭和57年度

1983.8

香川県教育委員会

目　　次

例　　言
昭和57年度埋蔵文化財保護行政・調査の概況……2
昭和57年度調査の概要
白鳥廃寺（第２次）……7
岩崎山５号墳……12
中尾古墳……16
川上古墳……20
丸井古墳……23
西土居古墳群……26
鶴尾神社４号墳……30
国分尼寺跡（第２次）……34
上瓶山窯跡群（第３次）……38
西村遺跡（第３次）……42
坂出市櫃石島遺跡分布図……46
大浦浜遺跡（Ⅰ）……47
大浦浜遺跡（Ⅱ）……51
ヤケヤマ遺跡……55
長崎通り遺跡……59
長崎古墳……63
初田遺跡……67
青ノ山宇多津５号墳……71
青ノ山８・９号墳……75
多度郡条里遺跡……79
王墓山古墳……83
昭和56年度調査の概要
雨滝城跡（第２次）……89
打越窯跡……93
昭和57年度の普及活動から……97

例　　言

1. 本書は，昭和57年度（1982年度）に香川県教育委員会が発掘調査を行なった遺跡の概要集である。
2. 遺跡の位置は図（Ｐ５）に示し，所在地・概要・調査担当者などについては一覧表（Ｐ３－４）に示した。
3. 本文頁は通し番号としたが，挿図・図版番号は遺跡ごとに付した。
4. 遺跡の配列は，原則として東から西の地域への順とした。
5. 香川県教育委員会事務局文化行政課職員が調査担当・執筆した遺跡は各市町の了解のもとに収録した。
6. 各遺跡（項目）の編集は執筆者が行ない，全体編集を真鍋昌宏・西岡達哉が担当した。
7. 本書に収録した遺跡は主として緊急調査の対象となったものであり，確認調査に関するものについては別途報告する。

昭和57年度埋蔵文化財調査概況

昭和57年度における埋蔵文化財の調査は，立ち合い調査を含め28件，新たに発見された遺跡は4件となっている。

そのうち，国庫補助を受けて実施した事業は，史跡・讃岐国分尼寺跡，前山古墳群の川上・丸井古墳，鶴尾神社4号墳，善通寺市の王墓山古墳がある。

国分尼寺跡の調査は現状変更に伴うもので県教委が主体となり寺域の南西隅3,000m²を対象に発掘した。それによると，従来寺域と想定されていた個所より35m内側に，寺域の西端を画する溝を確認した。溝は南北に走り，幅2m，深さ1m近くある立派なものであった。今回の調査により，寺域の東西はほぼ1町半（約164m）と確認された。溝の保存については，現在，協議中である。

川上，丸井古墳の調査は長尾町が事業主体となった。川上古墳は径15mほどの円墳であるが，竪穴式石室から甲冑，刀剣，矛，馬具，須恵器などが出土した。いずれも県下では一級の出土品として注目される。また，丸井古墳も，画文帯環状乳神獣鏡の出土や，バチ形の前方部前面の配石，壺形土器の出土などが話題となった。

鶴尾神社4号墳は，高松市西春日町にある前方後円墳であるが，56年度の調査で方格規矩四神鏡の破片が出土し，注目されていた。今年度はその二次調査であったが，墳丘構造や土器の出土などから石清尾古墳群成立に関する新たな資料が得られた。

王墓山古墳は，善通寺市善通寺町に所在する前方後円墳であるが宅地造成の申請が提出されたので、確認調査を実施することになった。横穴式石室内に石障を有し，金銅製の冠帽，銅鈴，馬具，多量の須恵器の出土，県下初の横穴式石室を主体部にもつ前方後円墳ということで重要な資料を得た。なお，保存について目下協議中である。

受託事業としては，瀬戸大橋架橋に伴う調査と，四国横断自動車道建設に伴う事前調査がある。瀬戸大橋関連の調査は今年が，最終年度にあたり，櫃石島と岩黒島で調査をした。櫃石島の長崎通り遺跡で古墳1基を確認した。岩黒島の初田遺跡では旧石器包蔵地を調査し、架橋の島4島すべてに旧石器の包蔵地が所在していたことになる。旧石器を中心とした本格的整理作業もいよいよ軌道に乗り，その成果が期待されている。

一方，四国横断自動車道建設に伴う発掘調査（日本道路公団の受託）は多度郡条里遺構の一部を試掘したが，今後，善通寺—豊浜間で17遺跡6万m²余り発掘することになっている。

保存整備のための確認調査も県，市町の主体事業として実施した。

県指定史跡・白鳥廃寺は，心礎周辺の基壇整備のための調査を行い，塔跡基壇の規模と構造を確認した。

青の山古墳群の宇多津5号，青の山8号・9号墳の発掘調査を実施し、青の山特有のL字状

石室をまた一基（8号墳）確認した。山頂部に所在する後期古墳群として貴重なものである。ここでは，周辺部も含め古墳公園として整備されることになっている。

圃場整備事業や道路工事等の土木工事に関連する調査として，まず中尾古墳がある。古代寺院の極楽寺跡と隣接する大型石室の古墳として地域の古代史に重要な関わりをもつもので，寒川町では移転復元して保存することになっている。また，三木町の西土居古墳群は県道工事中に発見され，箱式石棺3基，横穴式石室1基を調査し，後期古墳の資料を追加した。また岩崎山古墳群に5号墳が発見され，その内部主体である箱式石棺から，内行花文鏡，小玉等が出土し，岩崎山古墳群の位置づけに新資料を提供した。

ここ数年来継続的に実施している前方後円墳の測量調査も，磨臼山古墳，みたらい山古墳の二基について実施し，墳丘の図化をした。

一方，史跡，讃岐国分寺跡2万m²の土地が先行取得により公有化され，いよいよ，史跡公園整備をスタートすることになった。来年度以降，遺構の確認調査を実施しその成果にもとづき整備を進めて行く計画になっている。

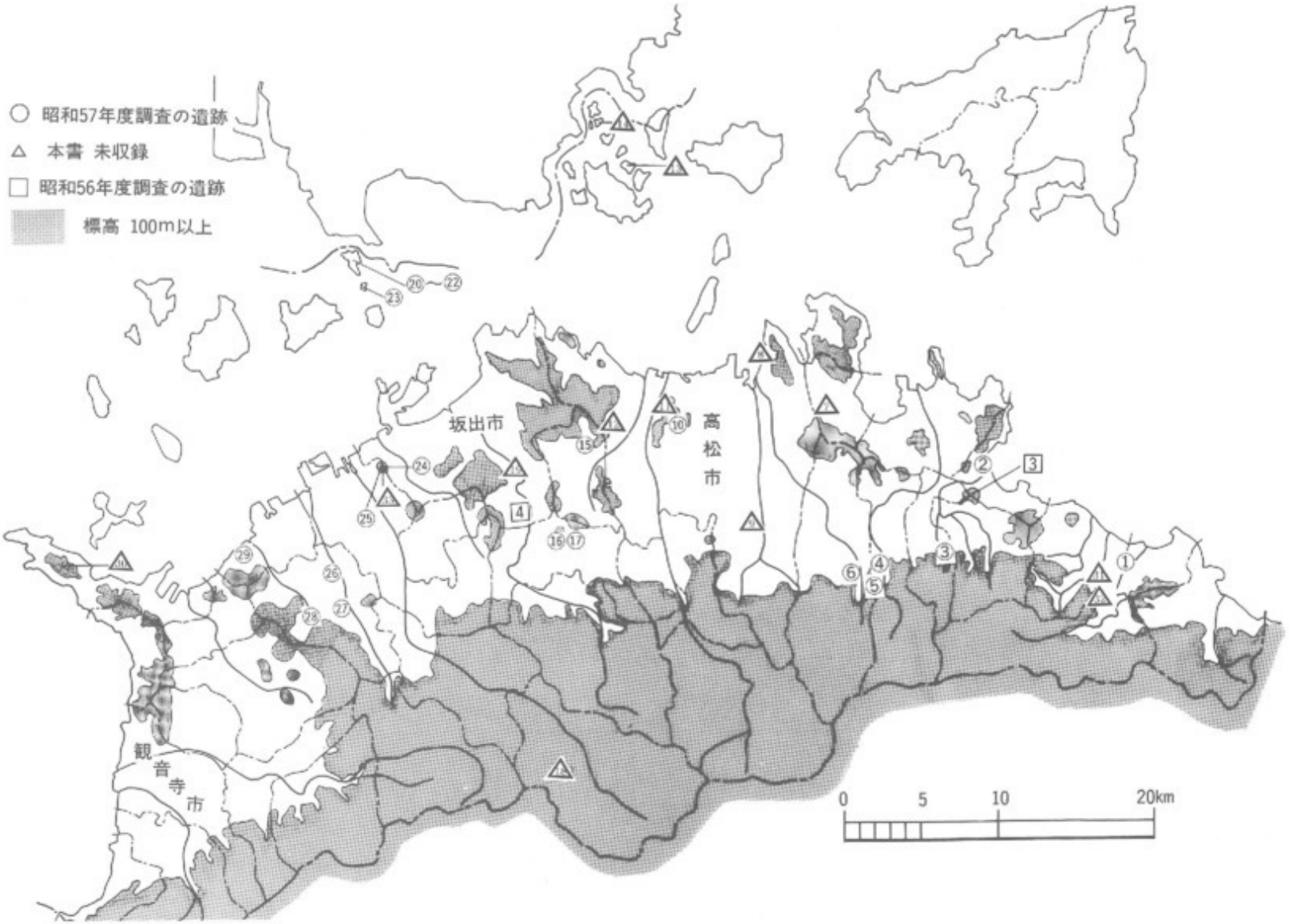
今年度は，鶴尾神社4号墳，丸井古墳，王墓山古墳と前方後円墳の発掘調査がおこなわれたが幸いにも，ほとんど地元市町教委，地権者などの理解が得られ〝保存〟に向かって協議が進められている。

（伊沢）

四国横断自動車道埋蔵文化財発掘風景

番号	名称	遺跡			調	
		所在地	種類	時期	原因	原因者
1	白鳥廃寺	大川郡白鳥町湊	古代寺院跡	古代	保存整備事業	
2	岩崎山5号墳	津田町津田	古墳	古墳時代	枯木，立木伐採の進入路工事	
3	中尾古墳	寒川町石田東	後期円墳	〃	圃場整備事業	寒川町
4	川上古墳	長尾町昭和字中代	円墳	〃	遺物発見	
5	丸井古墳	長尾町西字打越	〃	〃	〃	
6	西土居古墳群	三木町井戸西土居	円墳・石棺	〃	県道工事	県
7	上川東遺跡	牟礼町大字大町	弥生遺跡	弥生時代	土地造成	個人
8	浦生遺跡	高松市屋島西町	製塩	古墳時代	屋島現状変更（体育館建設）	高松市
9	光専寺山遺跡	高松市池田町字西山上	弥生・包含層	弥生時代	農地改良（個人）	個人
10	鶴尾神社4号墳	高松市西春日町	前方後円墳	古墳時代	緊急確認	
11	石清尾13号墳周辺遺跡	高松市西宝町	古墳	〃	緑地公園キャンプ場建設	高松市
12	平木1号墳	高松市鬼無町	〃	〃	確認調査	
13	鶴松鼻古墳群	直島町字家島	〃	〃	中国電力送電線鉄塔取り替え工事	中国電力
14	史跡，喜兵衛島製塩遺跡	直島町喜兵衛島	製塩	〃	バンガロー建設井戸掘削	個人
15	史跡国分尼寺跡	国分寺町新居	古代寺院	古代	宅地造成現状変更	
16	十瓶山窯跡群	綾南町陶	窯跡	〃	県有地整備	県
17	西村遺跡	綾南町陶字西村北	中世集落	古代～中世	倉庫建設	個人
18	中寺廃寺跡	琴南町造田字中字	中世山岳寺院	中世		
19	国府跡	坂出市府中町	官衙跡	古代	排水路工事	個人
20	大浦浜遺跡	坂出市櫃石	包蔵地	縄文時代古代・中世	瀬戸大橋架橋工事	本四公団
21	ヤケヤマ遺跡	〃	〃	旧石器	〃	〃
22	長崎通遺跡	〃	〃	旧石器・古墳	〃	〃
23	初田遺跡	坂出市岩黒	〃	〃	〃	〃
24	青の山字多津5号墳	宇多津町字青の山	円墳・横穴式石室	古墳時代	青の山山頂環境保全事業	宇多津町
25	青の山8号墳，9号墳	丸亀市土器町内間	〃	〃	〃	丸亀市
26	多度郡条里	善通寺市金蔵寺町	条里	古代	四国横断道建設	
27	磨臼山古墳	善通寺市生野町山相	前方後円墳	古墳時代	確認調査	
28	王墓山古墳	善通寺市善通寺町字大池東	〃	〃	宅地造成	個人
29	みたらい山古墳	多度津町白方	〃	〃	確認調査	
30	紫雲出山遺跡	詫間町大浜乙	弥生集落	弥生時代	休憩所の建設	詫間町観光協会

面積(m²)	発掘主体	負担者	対象	文化財保護法	担当者	時期
				査		
120	県教委	県	確認調査 保存整備	98条の2	伊沢・大山	58. 2. 4 58. 3. 8
30	津田町	町	〃 〃	〃	東原	58. 1. 24 58. 2. 9
100	寒川町	町	発掘調査 移転復元	57条の3	〃	57. 10. 12 57. 12. 4
150	長尾町	国・県・町	確認調査 保存整備	98条の2	大山	57. 8. 22 58. 1. 13
300	〃	〃	〃	〃	〃	〃
300	三木町	県	発掘調査	57条の3 〃 6	渡部	57. 10. 26 57. 12. 6
1,000	牟礼町		遺跡発見	57条の6	牟礼町	57. 11. 30 57. 12. 25
1,000	高松市	高松市	試掘	98条の2	高松市	57. 10. 14 57. 10. 22
1,500	〃	〃	〃	57条の2 98条の2	〃	57. 4. 23 57. 5. 4
1,500	〃	国・県・市	確認調査，保存	98条の2	渡部	57. 7. 19 57. 10. 8
500	〃	高松市	試掘	98条の2	高松市	57. 5. 17 57. 5. 20
20	香川大学	香川大学	学術調査	57条	香川大学丹羽	58. 3. 15 58. 3. 31
10	中国電力玉野営業所長小坂正也		立会	57条の3	直島町	
990	直島町	直島町	試掘	80条第1項	〃	57. 10. 26 57. 10. 28
3,000	県教委	国・県・町	確認調査溝保存	98条の2	大山・森本	57. 4. 22 57. 8. 11
100	企画調整課（県）	県	発掘調査	57条の3	田村・廣瀬	58. 1. 24 59. 3(予定)
600	綾南町	県・町	〃	57条の2	渡部	57. 5. 17 57. 6. 15
1,000	琴南町		遺跡発見，保存	57条の6		
200	個人(大協建設)		立会	57条の2	坂出市	57. 12. 15 58. 1. 15
4,800	県教委	本四公団	発掘調査	57条の3	秋山・廣瀬 林・藤好 安田・真鍋 野中・玉城 田村・坂口	57. 4. 1 58. 3. 31
4,700	〃	〃	〃	〃		
5,800	〃	〃	〃	〃		
5,300	〃	〃	〃	〃		
100	町	町	確認調査 保存整備	57条の5 98条の2	森本	57. 8. 4 57. 10. 10
200	市	市	〃 〃	〃 〃	東原	57. 5. 10 57. 7. 30
1,300	県教委	日本道路公団	発掘調査	57条の3	渡部・野中 中本	58. 1. 5 58. 3. 31
3,000	〃	県	測量調査	98条の2	真鍋・玉城 中本	57. 12. 13 57. 12. 27
500	善通寺市	国・県・町	確認調査	57条の2 98条の2	森本・大山 東原	57. 11. 15
3,000	県教委	県	測量調査	98条の2	安田・野中	57. 12. 13 57. 12. 25
100	町	町	立会	57条の3	詫間町	57. 11. 30 57. 12. 25


昭和57年度調査の遺跡
本書 未収録
昭和56年度調査の遺跡
標高 100m以上
坂出市
高松市
観音寺市
0
5
10
20km

白　鳥　廃　寺

1．はじめに

県指定史跡・白鳥廃寺は，昭和43年度に白鳥町教育委員会により確認調査を実施し，塔心礎や礎石群を検出している。

今回，塔跡周辺の整備事業に伴う確認調査を昭和58年2月4日から3月8日まで実施した。それによって，塔跡の規模をほぼ把握することができた。しかし，寺域をはじめまだまだ確認しなければならない課題が多く残っている。

第1図　白鳥廃寺位置図

2．遺　構

今回の調査目的は，塔跡の確認と農道予定地の遺構確認であったため，農道予定地に5ケ所発掘区（第1～5トレンチ）を設定し調査を行った。その結果，基壇基底部が残存していることが判明したため，発掘区を拡張(第6・7トレンチ）する一方，版築状況や心礎石の位置確認のため，心礎石の南に新たに発掘区（第8トレンチ）を設けた。

検出した遺構は，塔基壇，列石，近世以降のものと思われる暗渠排水路である。

①基壇

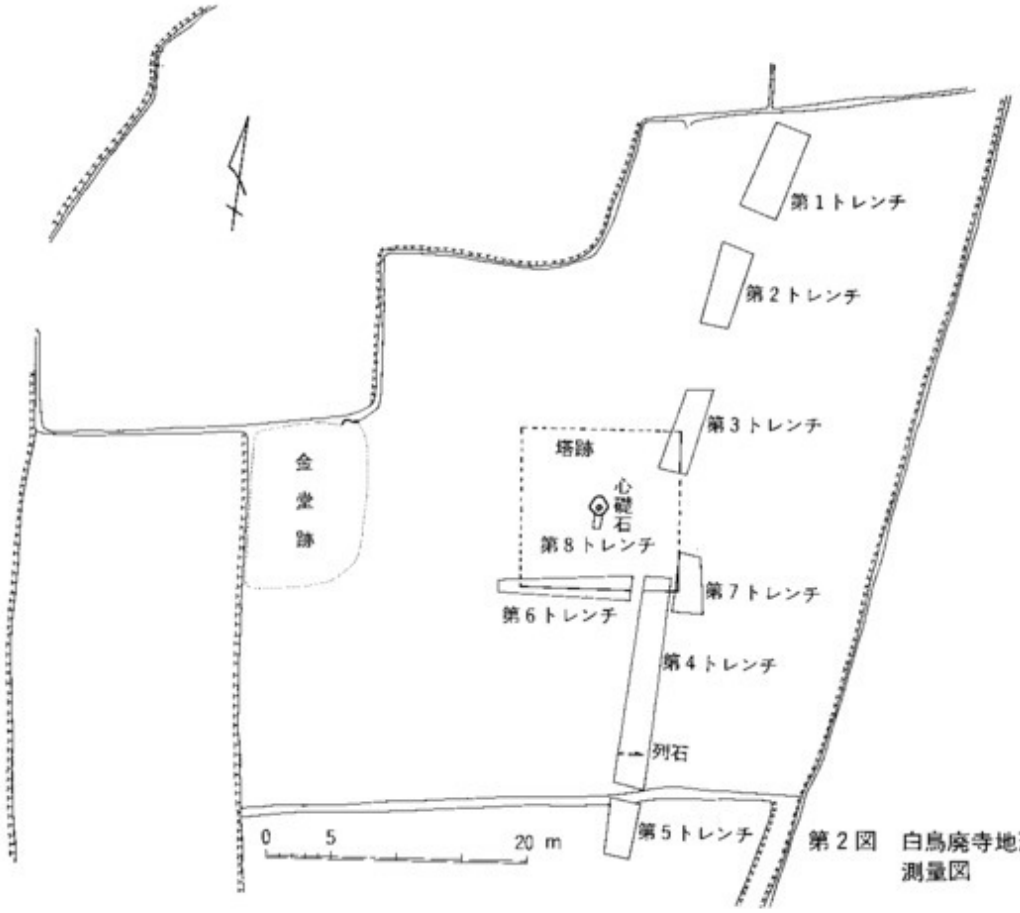
塔基壇は昭和43年に削平をうけ，高まりはほとんどなく，心礎石のみが地表にみえ，周囲に掘り出された礎石が置かれている状態であった。耕作土を除去すると，心礎石を中心に黄色土が広がり，約6m離れた地点に河原石と瓦片が集中していた。

心礎石横の版築状況は，地山と思われる青灰色粗砂層の上に，砂質土，砂，花崗土を5～10cmの厚さに交互につき固め，約40cm積み上げた後，心礎石の据えつけ坑を掘り，心礎石を埋めこんでいる。坑には栗石が多く入れられている。心礎石を据えた後さらに版築を行っている。版築が心礎石の上面まで行なわれたとすると，土壇の高さは1.2m前後であったと推定できる。

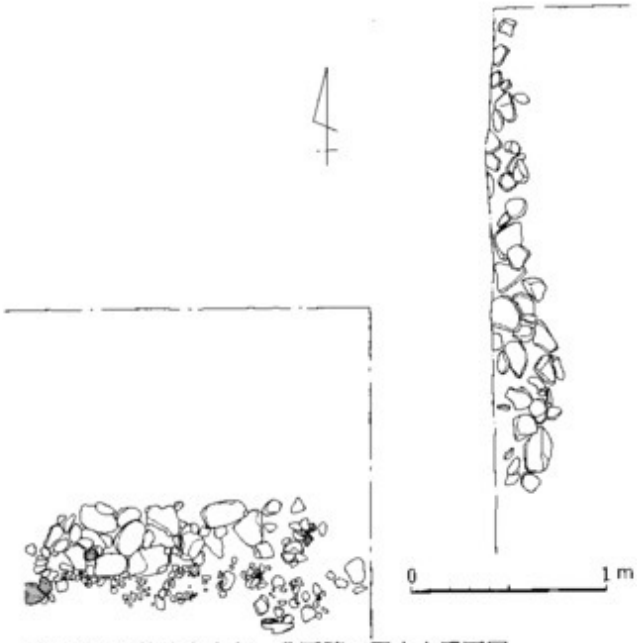
基壇化粧は乱石積みであったと推測できる。第4トレンチの箇所では，玉砂利の上に20cm大の砂岩質河原石が横長く並べられていた。1石以上石積みが残っている箇所は検出できなかった。第3・4・6・7トレンチの状況から，土壇の規模は一辺約12.3mの大きさで，塔基壇の大きさは方41尺前後と推定できる。

②列石

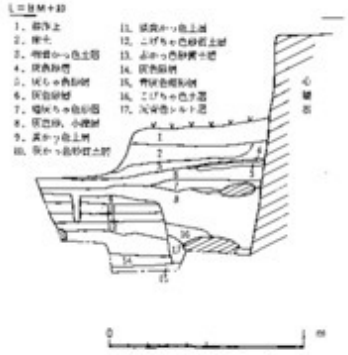
第4トレンチで，地表下約60cmで列石を検出した。心礎石より南へ18.8mの位置である。長



第2図　白鳥廃寺地形測量図



第3図　塔基壇南東角，乱石積・瓦出土平面図



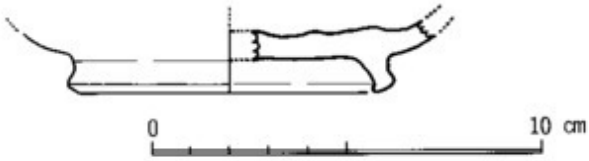
第4図　基壇版築状況（第8トレンチ）土層図

さ25cmぐらいの砂岩質河原石を横長く並べており，南側に面をもたせているようである。トレンチ幅２ｍしか検出できなかったが，東西方向に配置されている。列石の北側には瓦片が幅１ｍにわたり集中していた。

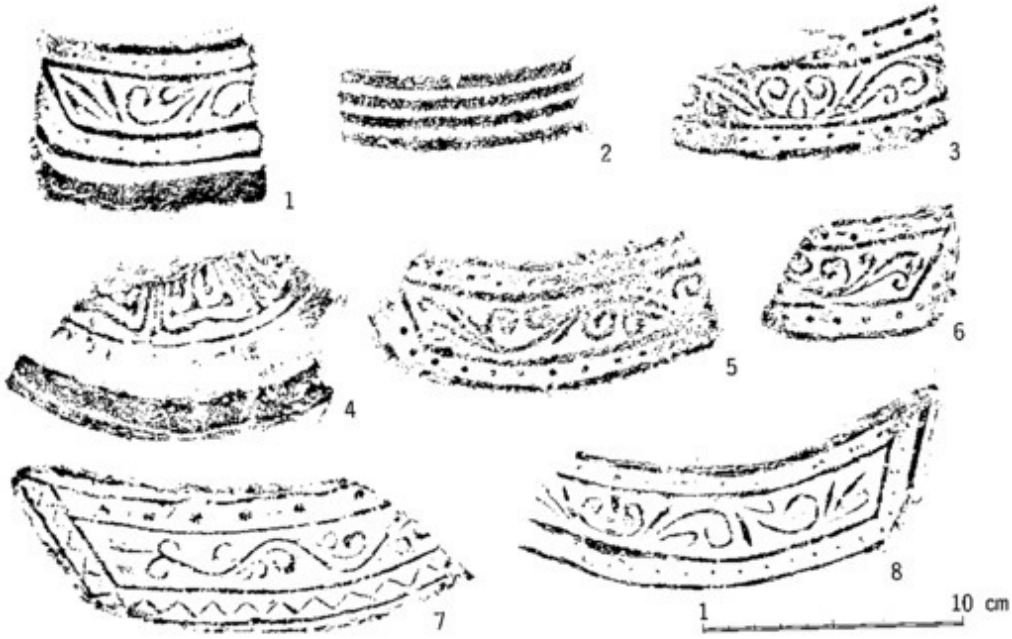
３．遺　物

今回の調査で出土した遺物は瓦・土師器，須恵器であるが，そのほとんどは瓦である。瓦片はコンテナ整理箱で約40箱出土し，その大半は平・丸瓦の破片である。現在整理作業を進めているため，ここでは瓦当文様の拓影図を掲げておく。第６図の４は八葉複弁蓮華文軒丸瓦で，白鳥廃寺からよく出土するものである。２は四重弧文軒平瓦で，白鳥廃寺出土の軒平瓦の中では最も古く位置づけられるものである。７は扁行唐草文軒平瓦で，藤原宮式のものである。その他のものは均正唐草文軒平瓦で，いわゆる平城宮式で，この寺で多く出土し，伽藍が整備された時期のものと考えられている。

須恵器，土師器類の出土はごくわずかで，ここでは基壇版築中から出土した須恵器を１点図化した。壺底部で，底径7.6cmで，八の字の高台が付けられている。接地部分は高台端部内面である。７世紀後半～８世紀前半のものであろう。



第５図　塔基壇版築中出土須恵器実測図



第６図　白鳥廃寺塔跡出土瓦拓影図

4．おわりに

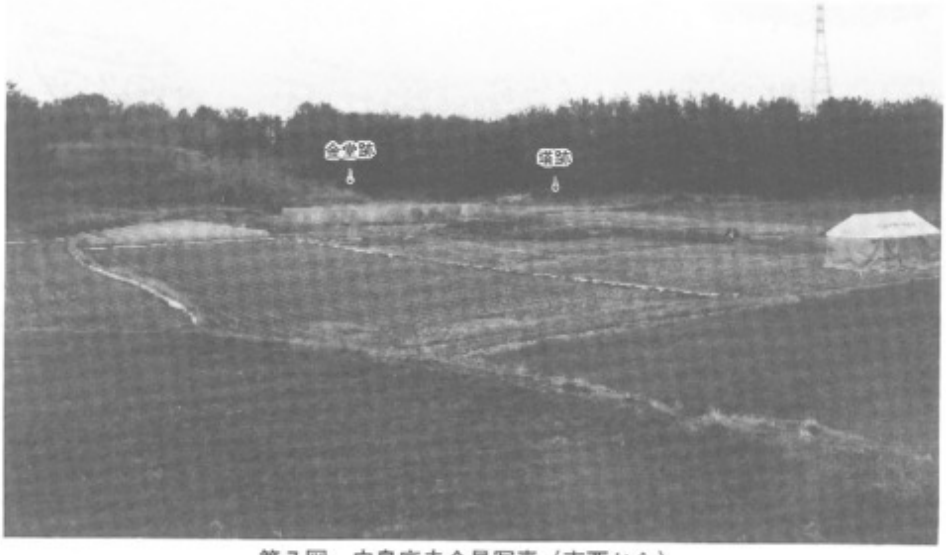
白鳥廃寺塔跡は昭和43年の第１次調査時はボーリング探査により，一辺約12mの方形で周囲に約50cmの雨落溝を有する構造が推測されていた。今回の調査の結果，規模についてはほぼ前回の推定どおりで，12.3mの計測値が得られた。但し，化粧がほとんど破壊されており，北東隅は乱石積みが認められないことから正確な規模を求めることは不可能で方41尺前後としておく。讃岐には27～35ケ所の古代寺院があるが，発掘調査がなされているのは，坂出市開法寺跡，丸亀市宝幢寺跡，国分寺町国分僧・尼寺跡などわずかである。このうち塔跡の規模・構造が確認されているのは開法寺跡のみで，この意味では新たに貴重な資料を得たことになる。

寺域については，昭和43年調査時ボーリング探査の結果，南北50m，東西60mの規模が想定されていた。今回の調査では心礎石より南18.8mの位置で列石を確認した。前回の推定ラインより北側である。この遺構が寺域を示す回廊や築地等の下部構造であるかは，将来の発掘調査によって再確認が必要である。

今回の調査では近世以降と思われる河原石や瓦片を用いた暗渠排水路を多く検出した。このことは，寺院廃絶後，瓦・石が二次転用されていることを示しており，ボーリング調査のみでは古代寺院の遺構の有無・年代を決めづらく，前回の調査での伽藍配置の想定は再考を要するだろう。今後の正式な調査を期待したい。

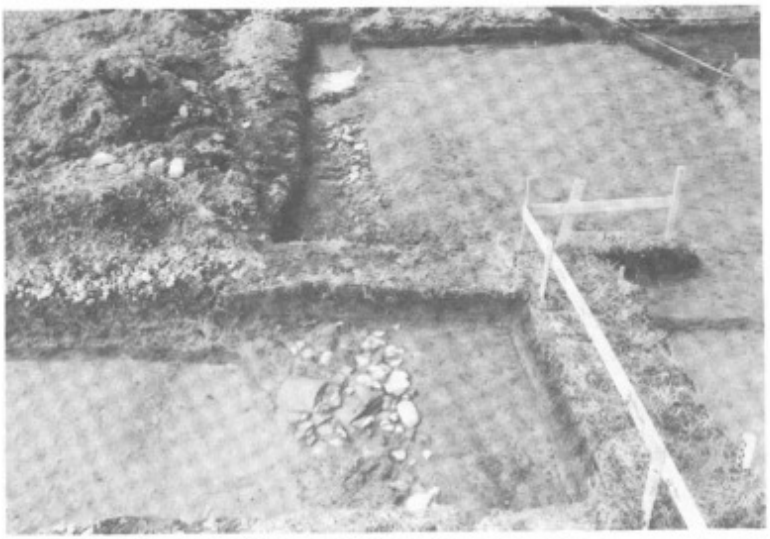
調査の結果，塔基壇が残存していることが明らかになったため，心礎石横を通過する予定であった農道は東方向へ設計変更され指定地外の塔基壇部分は，指定地を広げ，公有地化されることになった。また調査結果にもとづいて，整備方法も変更された。12m四方は約20cmの高さに土盛し，版築土壇を表わし，周囲は河原石を２～３段積み，乱石積みを表現し，礎石も模式的に配置し，塔の基礎施設がわかるように意図された。今後，郷土学習や文化財保護の一助になれば幸いである。

（伊沢，大山）



第７図　白鳥廃寺全景写真（南西から）

第 8 図　白鳥廃寺塔跡基壇南辺写真



第 9 図　白鳥廃寺塔跡基壇版築状況

第10図　白鳥廃寺塔跡南部列石写真

岩崎山５号墳

１．調査の経過

岩崎山５号墳は昭和57年９月26日，松喰虫の被害木を伐採するために，作業進入路を建設した際に発見された。古墳は重機により，箱式石棺の小口と側壁の一部が抉り取られ，石棺横断面が露呈していた。現状での保存は困難であると判断した津田町教育委員会は昭和58年１月24日から２月10日迄発掘調査を実施した。なお県教育委員会は技師を派遣し，その指導にあたった。

第１図

２．立地と環境

岩崎山古墳群は大川郡津田町津田に所在し，岩崎山から東へ派生した尾根筋に形成されている。この古墳群は４世紀から５世紀にかけての古墳が集中していることで著名である。特に５号墳の約30m東に立地する岩崎山４号墳は全国的にも有名である。４号墳はこれまで４回発掘調査が実施され，主体部の状況がほぼ確認されている。昭和26年度調査によると，棺身両端に石枕を造付けた長さ2.43mの刳抜式舟形石棺を有している。副葬品は，舶載平縁二神二獣鏡，車輪石，石釧，貝釧，玉類，鉄刀，鉄剣，銅鏃，鉄斧，鉄鎌など多彩で被葬者の権力度が偲ばれる。山頂の１号墳は円墳で組合せ箱式石棺２基を有し，ともに人骨を完全な形で残していた。副葬品は直刀，鉄剣，鎧，鉄斧，石製模造品，櫛など４号墳に劣らず豊富である。２号墳は１号墳より，やや下方にある小規模な円墳であり，３号墳も同様な円墳であったが，現在は土砂採取のため完全に消滅している。５号墳は３号墳と４号墳の中間斜面上に位置する。このように同一尾根上に５基の古墳が存在す

第２図

第３図

ることは津田町では，唯一であり特筆すべき点である。その他，津田湾沿岸には赤山古墳や鵜部山古墳，けぼ山古墳などの前方後円墳が海を意識して立地している。

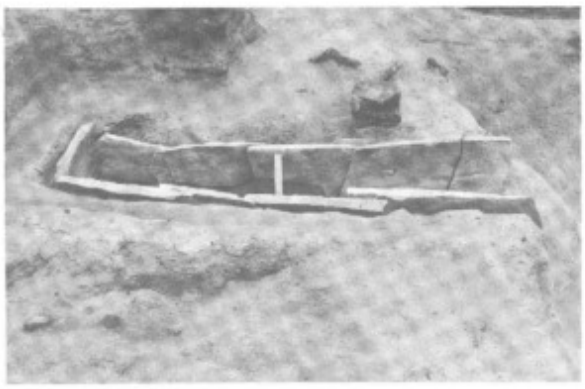
3．遺構について

埋葬施設は，厚さ２～５cmの安山岩板状石を用いた組合せ箱式石棺である。主軸方位は等高線に直交しN—81°—Wで，内法で，長さ190cm以上，幅20～40cm，高さ20cmを測る。堀り方はまず240×130cmの規模で地山を削平し，さらに200×60cmに堀り込む２段堀り込みである。長側壁はすべて端部を約15cm，重ね合せているのが特徴である。北側壁は松の根により全体に内側に移動しているが，ほぼ垂直に設置されている。それに対して，南側壁は，上部がやや外傾している。圧力によるものか，本来そのような型なのか検討する必要がある。小口は両長側壁を押えて外側にある。天井石（蓋石）は，板状石を６石，東から端部を重ねた後，高さをそろえるため２石がそえられている。石材間，石材—地山間には詰石は一切使用せず，粘土を補塡し強化している。床面は厚さ約10cmの粘土を敷きつめ，赤色顔料を塗布している。

4．遺物について

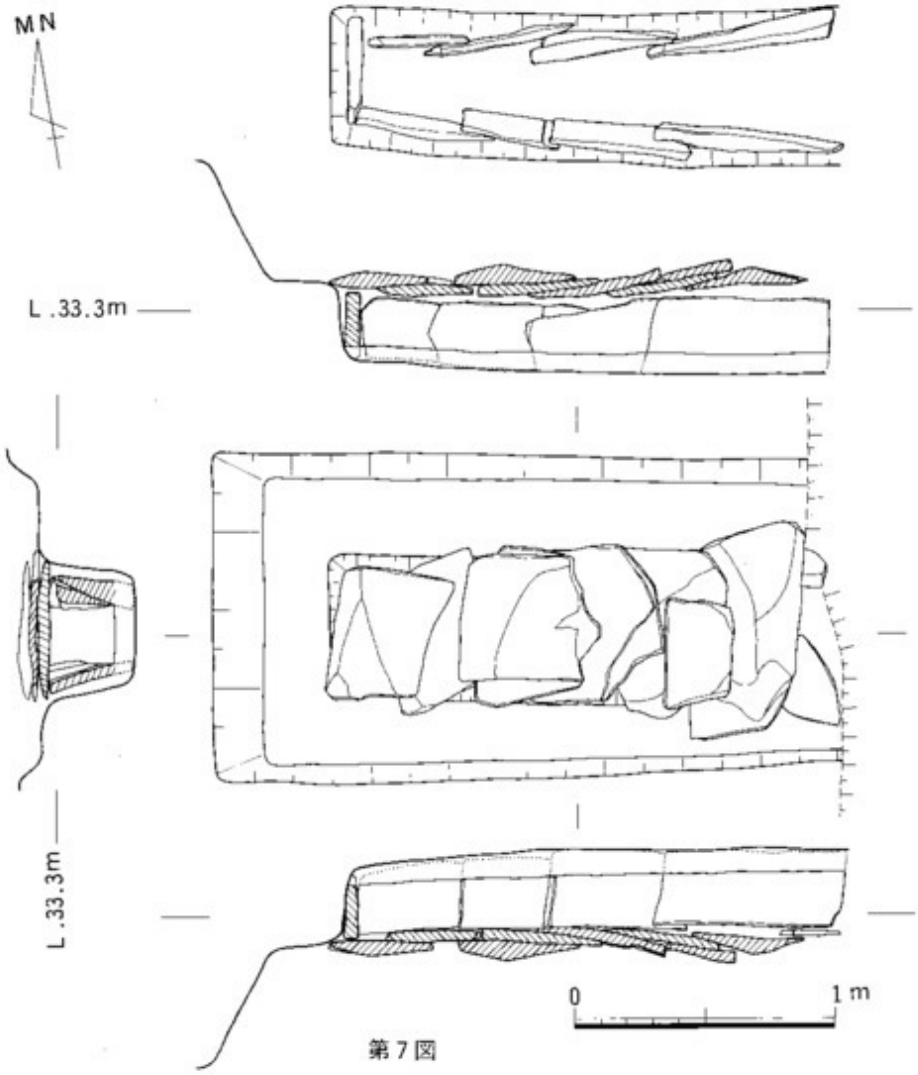
赤色顔料を塗布した石棺床面直上からは抉り取られた小口に近い所で,仿製内行花文鏡１面，勾玉１個，ガラス製小玉４個及び鉄刀子が出土した。その他，碧玉製管玉10個，ガラス玉34個が床面の埋土から出土した。

第４図



第５図

第６図



第7図

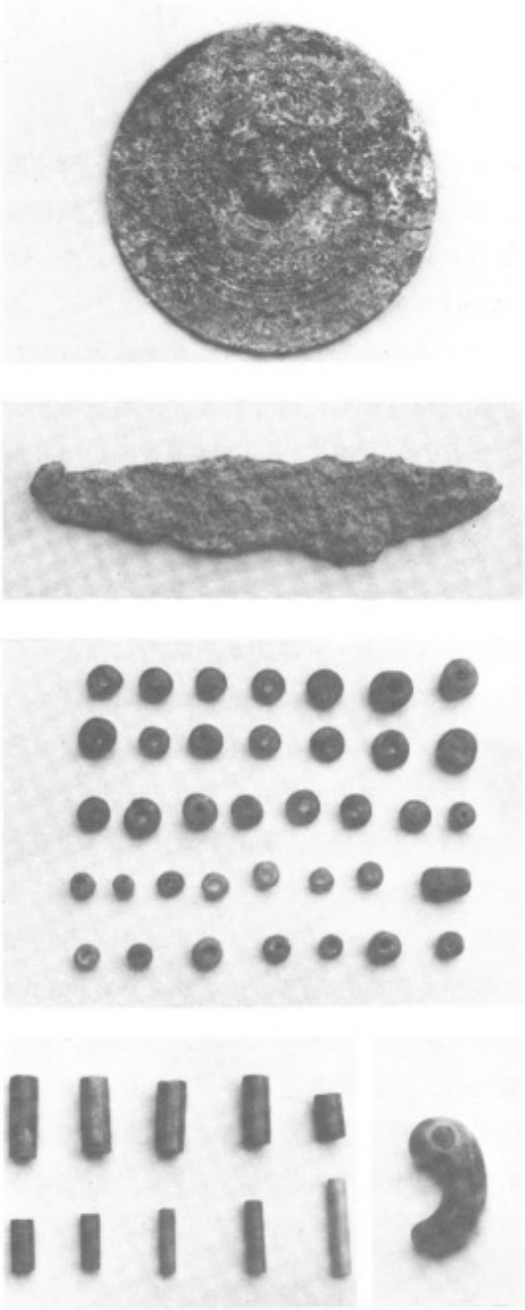
仿製内行花文鏡の直径は約11cmで，鏡の背面構成は中央から半球状の鈕，櫛歯文，内区の八花文，内外区の境に珠文と櫛歯文そして無文の外区平縁に至る。なお，鈕と内区に布目痕が若干確認できる。このような小形仿製内行花文鏡は岩崎山5号墳の北面約550mにある龍王山古墳からも出土している。その鏡は直径8.6cmでやや小形の六花文である。花文間にV字状の3状の凸線を配するなどの特徴を持ち，岩崎山5号墳の鏡とは若干異なる。

勾玉は半透明の淡黄緑色でおそらく翡翠製，ガラス玉は全てブルー系ガラスである。管玉は，濃緑色と淡灰緑色の碧玉で長さ（0.6〜1.3cm），径（0.15〜0.4cm）にばらつきがみられ不揃いである。径0.15cmで細いものが4個含まれている。

鉄刀子は刃部を側石側へ，先端を東へ向けて出土した。長さ8.0cm幅1.0cmを計る。

5．まとめ

津田町所在で確認されている古墳17基の埋葬施設を分類すると，組合せ箱式石棺７，竪穴式石室１，横穴式石室１，刳抜式石棺２，不明６で不明のうち３～４基が組合せ箱式石棺と思えるので，組合せ箱式石棺は10～11基となる。それは全体の約65％である。また，前方後円墳は５基あり，約30％を占める。副葬品に須恵器を伴う横穴式石室を持つ後期古墳が１基だけしか確認できていないことなどから津田湾地域の隆盛は，古墳時代前期にその一つのピークがあったと考えられる。岩崎山５号墳は，その隆盛時に築造された古墳のひとつであろうと思われる。（東原）



第８図

中　尾　古　墳

1．調査の経過

寒川町は国の補助を得て昭和57・58年度に加藤・中尾地区の暗渠排水工事と区画整備を主とする圃場整備事業を施工している。中尾古墳はその整備区域内に存在するため，事業に伴う事前調査を要した。発掘調査は昭和57年10月12日から12月4日まで，県教育委員会の指導のもと中尾古墳発掘調査団により実施された。

第1図

2．立地と環境

中尾古墳は，津田・鴨部両河川に挟まれた県境の檀特山・女体山から北方に派生した尾根北端に位置する。周辺には弥生時代から古墳時代，そして中世に至る遺跡が密に分布する。中尾古墳の北西には弥生時代の遺跡として，加藤・森広・布勢・石田高校校庭内遺跡が並んでいる。そして，稲作活動に伴い出現した支配者層の墳墓が雨滝山北西から西南の裾部に群として存在している。なかでも三角縁三神五獣鏡を出土した奥3号墳は，讃岐では古い時期の古墳として有名である。4世紀から5世紀には，古枝古墳，津田湾沿岸古墳群，そして四国一の規模を誇る富田茶臼山古墳（全長145mの前方後円墳）など多くの古墳が雨滝山周辺地域に分布している。古墳時代後期になると，相ノ山，極楽寺，寒神，石田神社，大末，亀島，宇佐八幡神社，前山の各古墳群が長尾街道南方の山裾に群集墳として築造されている。中尾古墳もこの時期に築造された古墳であるが，規模が全く異なる。寒川郡での寺院跡は，単弁八葉蓮華文軒丸瓦，重弧文軒平瓦を出土した極楽寺跡，さらに石井廃寺，願興寺跡が確認されている。こ

第2図

第3図

のように中尾古墳の周辺地域には遺跡が多く，かつての生活文化の高さを示唆している。

3．遺構について

中尾古墳は南に開口する横穴式石室を埋葬施設としている。石室は後世の石材採掘等により天井石，側壁，羨道部上半の大半が欠損している。鉄の楔がくい込んだ石材も残っていて巨石を上方より割り裂きながら採取したことを物語っている。平面プランは両袖形で，玄室と羨道部を区別する玄門の石材は縦向きに立てられている。玄室規模は奥壁幅2.8m，最大幅3.0mで袖石に近づくにつれ漸次，幅が狭められ，玄門側幅2.5mで終結する。袖石幅は1.2mで羨道部幅は1.9mを測る。石室の現存全長10m，玄室長5.2m，羨道長4.8mの規模である。築造時には全長10mを越えていたことは確実で，石材の大きさをも考慮するといわゆる巨石墳といえるのではないかと思われる。玄室の床面には20cm前後の平石と5～6cmの小礫が敷かれている。但し，全面には検出されず，中央部から奥壁にかけては盗掘時に除去されている。敷石の規則性はないが，ただセンターラインにやや大きい平石が9石並んでいる。排水溝の蓋石を兼ねているように思われる。羨道部には敷石はなく，地山をセンターラインに向かい緩やかに傾斜させて，排水溝を設定している。排水溝は玄門部で若干屈折し，現在の羨道端付近まで直線的に延びている。

4．遺物について

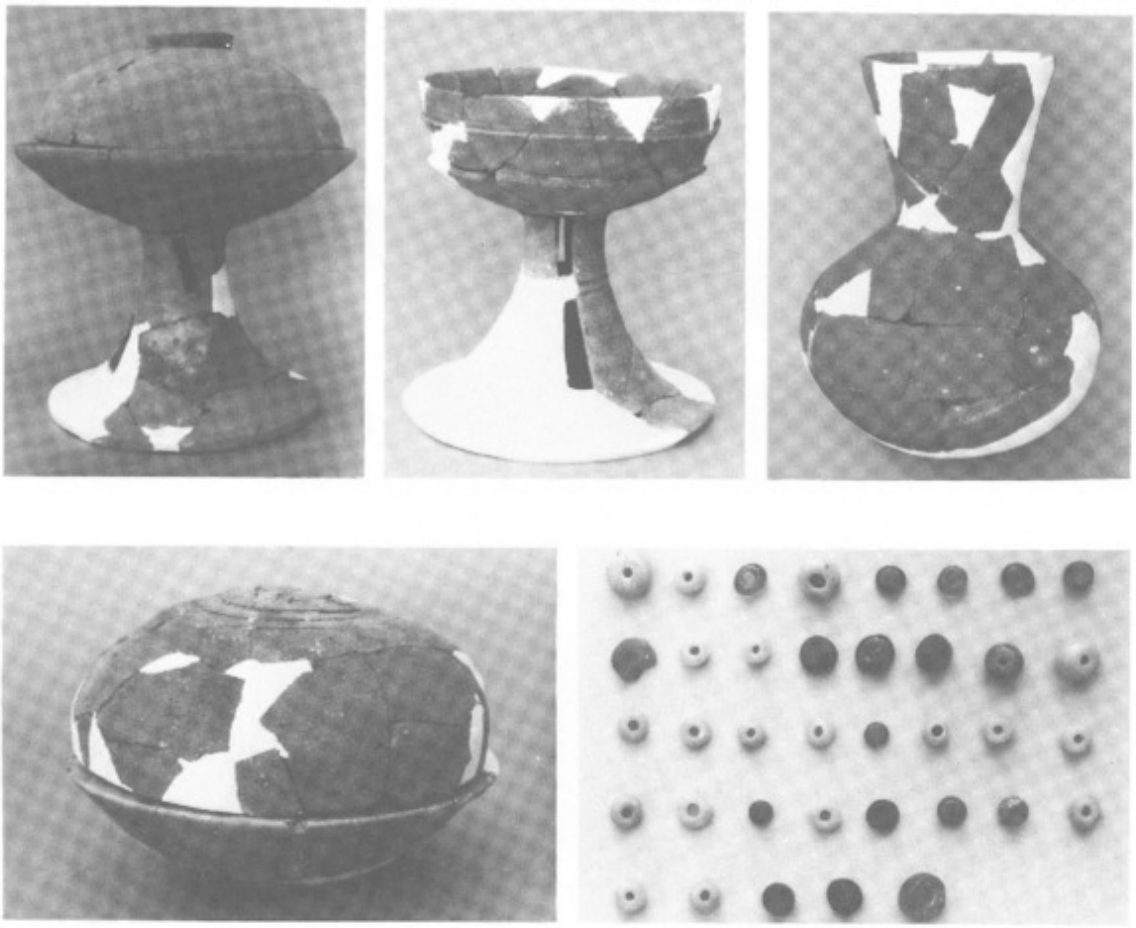
古墳時代の須恵器片（高杯，杯，甕，壺）鉄製品（刀など）ガラス小玉約30個，などに混入

第4図

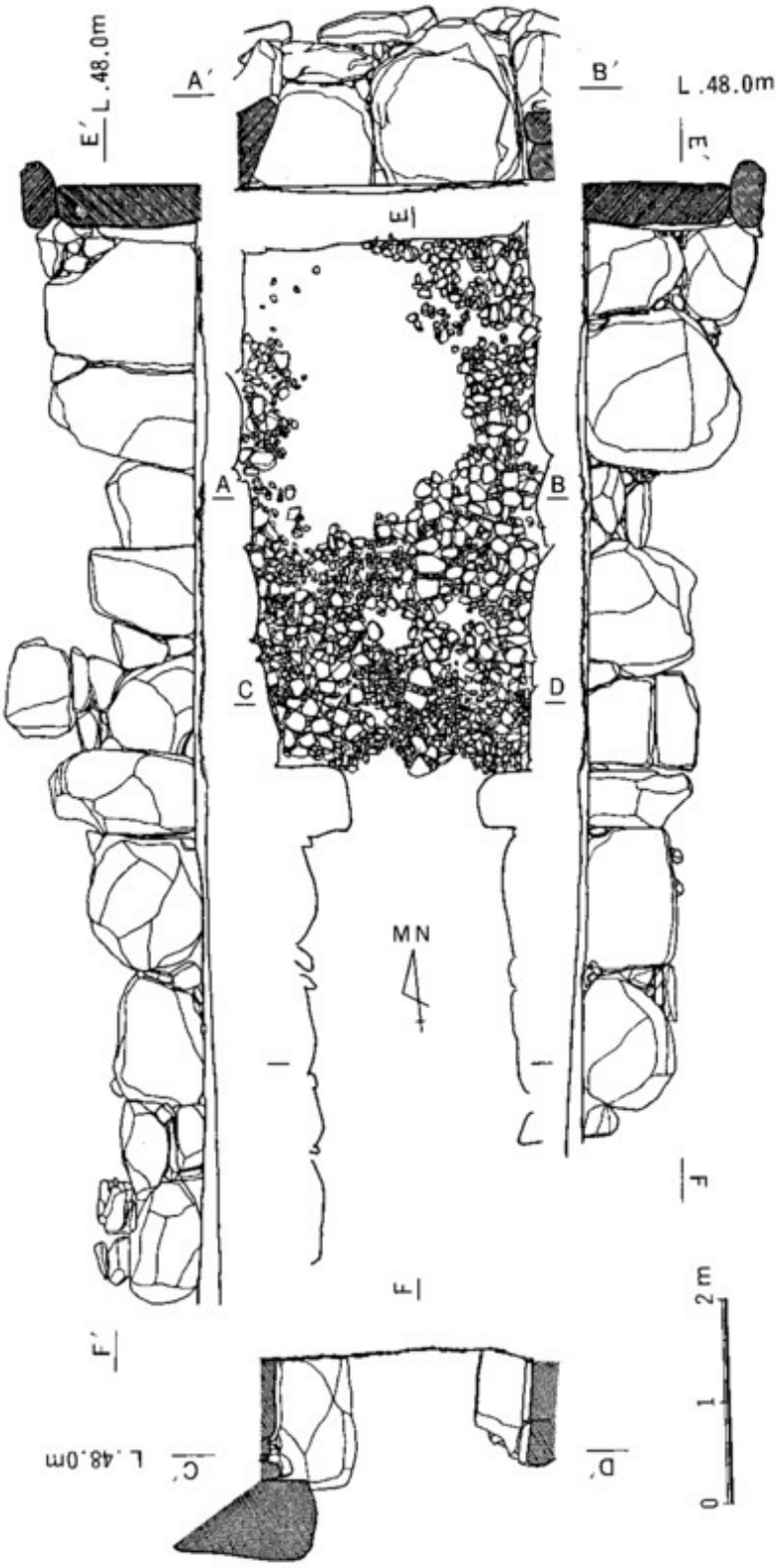
して中世の土鍋，土釜，土師質椀・皿などの遺物が石室内から出土している。床面敷石より約40cm上方に後世生活面があり，明らかに石室が本来の機能を失い何か転用されたことを意味している。県内には再利用された報告例はあまりないが，他県にはかなりある。例えば石室を墓として利用したもの，石室を祠あるいは堂に利用したもの，生活の場としたもの，遊び場に利用したものなどが報告されている。副葬品等の遺物は全て破片である。復原終了の須恵器の一部とガラス玉の写真を掲載する。

5．まとめ

古墳の築造時期は，須恵器の特徴などから6世紀後半であろう推定している。中尾古墳は規模から察して，寒川郡の盟主的な古墳，有力者の古墳であることは否めない。中尾古墳の出現により，この地域の有力者の古墳は雨滝山山麓の奥3号墳，古枝古墳（前期）から富田茶臼山古墳(中期)，後期の中尾古墳という系譜で捉えることもできる。さらに，この地域の繁栄，有力者の存在が極楽寺などの氏寺を建立せしめたものと思われる。古墳時代後期における豪族の存在を考古学的見地により確証させた中尾古墳の意義は大きい。（東原）



第5図



第6図　中尾古墳石室実測図

川　上　古　墳

1．はじめに

川上古墳は大川郡長尾町昭和字中代に所在する。町南西部の新川と鴨部川にはさまれた山塊には多くの古墳があり，前山古墳群と総称されている。この山塊先端の丘陵上に川上古墳は位置する。この古墳の東丘陵上にある稲荷山古墳は昭和26年に発掘調査されているが，その当時には川上古墳は古墳との認識があったようであるが，その後忘れられ，昭和55年秋，町教委による分布調査によって再確認された。これに前後する時期に，墳丘北側を通る農道の拡幅工事が計画されたため，町教委が墳頂部を試掘したところ，多量の須恵器が出土した。このため昭和57年度に国庫補助を得て，緊急確認調査を実施することになった。調査は県教委の指導のもと町教委が主体になり，昭和57年8月16日から同年9月27日まで実施された。

第1図　川上古墳位置図

2．遺　構

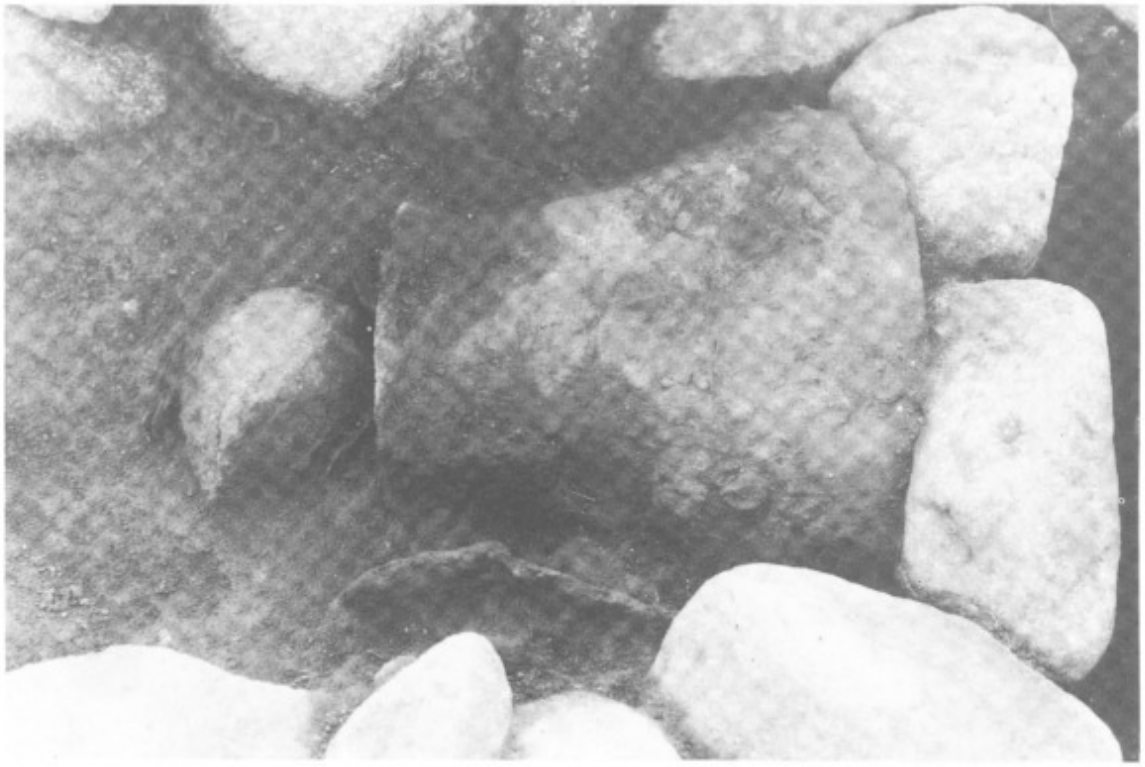
古墳の周囲は畑地化され，墳頂部は墓地として利用されているため，墳丘は改変されている可能性が高い。地形測量の結果，径20～22mの円墳と推定され，盛土は最も高いところで3mを計る。墳丘南北トレンチ調査によると，南が高く北が低い緩斜面に盛土によって墳丘を築いていることが判明した。外表施設としては葺石は認められず，円筒埴輪片が出土した。

内部主体は河原石積みの竪穴式石室である。30cmぐらいの花崗岩質河原石の小口積みで上部に行くに従って広がり，上面での計測値は長さ3.55m，西幅0.92m，東幅1.15mである。石室の深さは0.74mである。床面には四壁に沿ってさらに石が並べられ棺を形づくっているようである。このような構造は県内に類例をみない。床面の計測値は，長さ3.07m，西幅0.61m，東幅0.72mで，石室上面，床面とも西が狭くなっている。石室の主軸方位はN－78°－Wである。この石室は盗掘を被った痕跡がないにもかかわらず，石室蓋石が見あたらず，木蓋か無蓋だった可能性がつよい。

3．遺　物

川上古墳の遺物は，墳丘，石室上部，石室床面の3カ所から出土した。墳丘からは円筒埴輪，須恵器杯・甕が出土したが，いずれも破片で原位置を保っているものではない。石室上部からは土師器高杯5点，壺2点，須恵器杯11セット，甕2点，脚付有蓋壺2点，円筒形器台1点，

第２図　川上古墳石室



第３図　川上古墳甲冑出土状況

高杯形器台1点が出土している。これは昭和56年の町教委による試掘時に掘り出されたもので，正確な実測が行なわれていないため出土状況に不明な点が多いが，脚付有蓋壺や器台は壺部や杯部が破壊されていた状況が観察されている。石室床面の遺物は原位置を保っていた。出土遺物を西から順に列記していくと，西小口の列石に頸部を接して横矧板鋲留短甲が背面を上にして置かれていた。右胴脇に開閉装置がつき，背高46cm，胴幅38cmの大きさである。短甲内部には肩甲か膝当てと思われる鉄製品が入れられていた。短甲の裾部に接して衝角付冑が前額を北方向にして置かれていた。長さ26cm，高さ9cmで，両側に鏃がつく。短甲の北に長頸鏃が数十本束になっていた。短甲の南には鉸具3点，革金具3点があった。冑の南北にはそれぞれ東西方向に革製品の痕跡が認められた。石室中央のやや西南部に有茎柳葉形鉄鏃が2点あり，石室中央部で南壁に平行して直刀が鞘に納められたままで出土した。直刀の大きさは92.3cmである。北壁にそって剣が置かれていた。長さは65.8cmで，直刀・剣ともに切先は西向きである。東壁近くに，北から槍，中央に須恵器広口壺，南側に矛がおかれていた。切先は東方向である。剣の北，列石上にはのみ・やりがんなが置かれ，直刀の南の列石上には鉄斧2点，馬具が配置されていた。馬具は轡と鐙金具かと思われる破片である。轡は二連式のもので，銜身にf字鏡板がつく。

4．おわりに

本墳は出土した須恵器からみて5世紀後半の築造と考えられる。県内でこの時期の古墳調査例はいくつか知られており，今後五世紀史を研究する際貴重な資料になるだろう。本墳の特徴は石室構造と豊富な鉄器類の副葬にある。河原石を用いる例は前期の丸井古墳以来この地域の特色の一つであろう。石室内部の石列は県内でも類例がなく特異なものである。副葬品の鉄器類は床面に整然と配置されており，武器・武具・工具類で，農具がなくまた玉類もなかった。甲冑の出土例は県内で10例目であるが，最近調査された善通寺市王墓山古墳を除くと残りは，律令の行政区分の阿野郡と寒川郡に集中しており，その意味が注意される。なお詳しい報告が近々町教委から発刊される予定であるので参照されたい。調査後本墳は保存整備され，石室は修復され公開されている。（大山）

丸　井　古　墳

1．はじめに

丸井古墳は大川郡長尾町字打越2600に所在する。長尾町の南西部に位置し，新川と鴨部川にはさまれた山塊には多くの古墳があり，前山古墳群と総称されているが，丸井古墳もこの中の一つである。昭和55年秋長尾町教育委員会によって実施された遺跡分布調査の際，円墳と推定された。その後確認のため頂部を一部試掘したところ，多くの河原石や銅鏡が出土した。以上のような経緯から古墳と確認されたが，古墳の真横を遊歩道である「四国の道」が通過し，将来盗掘の恐れもでてきたため，県教委の指導のもと町教委が主体になり，昭和57年度国庫補助を得て緊急確認調査を実施することになった。発掘調査は昭和57年10月４日から開始され，昭和58年１月12日に終了した。

第１図　丸井古墳位置図

2．遺　構

前山古墳群のある山塊の最高所は標高162mであるが，この地点より北へ170m下った標高150mの尾根上に，丸井古墳は築かれている。この場所からは高松平野が一望のもとに見渡せる。墳丘は地山である花崗岩岩肌を削り整えたと思われ，盛土はまったく認められなかった。当初は円墳と思われていたが，地形測量および発掘調査の結果，前方後円墳であることが明らかになった。墳丘規模は以下のとおりである。全長29.8m，後円径12.8m，同高さ1.75m，前方部長17.2m，同幅7.3m，同高さ0.85mで，後円部は正円をなさず，西・北方向に長いいびつな楕円形をしている。前方部と後円部の比高は約50cmで前方部の方が高い。前方部は所謂撥形に開く。墳丘主軸方向は磁北に対して40°西偏している。

外表施設としては墳裾の列石があげられる。確認できた箇所は，前方部正面，前方部北東側，後円部東部，後円部南部である。前方部正面の列石を説明すると，南東から北西方向に延びてきた尾根が幅４m，深さ0.9mにわたって掘削されており，自然丘陵と墳丘が明確に区分されている。そしてカットされた墳丘前方部正面に沿って二列の石積みがなされている。カット面の地山に接してまず石が積まれ，中央も最も高いところで五石積み上げている。50cm離れて三石積み上げた石積みが並ぶ。

内部主体は後円部に設けられた二つの竪穴式石室である。二つの石室は並行しており主軸方

第2図　丸井古墳墳丘全景

位はほぼ東西である。南側の第一石室の墓壙の長さは550cm，幅260cm，深さ100cmである。石室は40×20cmぐらいの花崗岩河原石の小口積みで，内法は長さ450cm，幅73cm，高さ90cmに復原できる。石室床には幅48cmの粘土床が築かれている。北側の第2石室の墓壙は長さ530cm，幅180cm，深さ40cmである。石室はほとんど破壊されており，復原推定値は長さ415cm，幅80cm，高さ40cm以上である。第一石室と同様花崗岩質河原石の小口積みである。

両石室の排水施設は，細い溝が墓壙隅から墳丘外へ掘られていた。第2石室の排水溝をつくる際，第1石室の排水溝の礫を除去しており，埋土の切り合い関係からも，第2石室の排水溝が新しくつくられたことが判明した。

3．遺　物

出土遺物は少なく，まず前方部正面の列石横から土師器壺が転落した状態で一個体分出土した。前方部北東部の列石付近から土師器片が数点出土した。第1石室からは，盗掘坑から土師器壺・甕の破片が二十数点出土した。副葬品は粘土床中央部からガラス玉8個，管玉3個が出土した。また棺外の粘土床と壁との間から袋状鉄斧1点，鉄鏃3点が出土した。第2石室からは調査の契機となった環状乳画文帯神獣鏡以外には土師器片が数点出土したのみである。

4．おわりに

丸井古墳は標高150mの山間部に築かれており，高所に立地している。墳形は前方部がバチ形

第3図　丸井古墳第1石室

第4図　丸井古墳第2石室

に開き，古式の様相を呈している。出土した土師器類は県内でも類例がなく，正確な年代観を求めるのは今後の課題であるが，前方部出土の壺は胴部は肩が張り，平底の痕跡を明らかに残しており，古墳時代初期のものとみてよかろう。これらのことから丸井古墳は発生期の古墳との位置づけが可能であり、古墳出現を考える上で貴重な古墳である。

詳しくは，近々長尾町教育委員会より報告書が刊行されるので，参照されたい。なお本古墳は調査後保存整備され，第1石室は復原され，見学できるようになっている。

（大山）

西土居古墳群

1．はじめに

西土居古墳群は，昭和57年6月末，県道三木―多和線改修工事中に須恵器が出土したことによって発見された。長尾土木事務所は三木町教育委員会を通じて県教育委員会に遺跡の発見を通知し，必要な事務上の手続きが行われると共に，県土木課・県教委・三木町教委の三者で遺跡の取扱いを協議することになった。その結果，遺跡の保存は困難との結論に達し，三木町文化協会々長筒井元を団長とする西土居古墳群発掘調査団を地元で組織し，県土木課がこれに調査を委託することになった。

第1図　西土居古墳群の位置（1：25,000）

発掘調査は三木町文化協会細川幸雄が主にあたり，三木町教委と県教委がこれを指導した。調査は昭和57年10月26日から開始され，12月6日に終了した。1号墳はすでに完全に消滅していたが，工事区域内からさらに2基ないし3基の円墳（2号～4号墳）が発見され，発掘された。さらに，この調査に継続し，三木町教育委員会が独自に5号墳・6号墳の発掘調査を実施し，これによって西土居古墳群の全体が明らかにされた。

西土居古墳群は木田郡三木町字西土居に所在する。新川によって開かれた鹿庭の谷状地が高松平野に出る手前の西側丘陵上に立地する。北東に派生したこの丘陵には，調査によって6基の円墳が発見され，先端から奥に向って1号～6号墳と名づけられた。他に，壺棺と思われる弥生時代後期の土器が6号墳々丘と，さらに奥の尾根上で発見され，丘陵東麓では弥生時代後期前半頃の土器包含層も発見された。また，丘陵西側では，火を受けた瓦・土器の出土も知られ，付近には中世の石塔の一部と思われる石製品が畔道に半ば埋れて残されている。

2．遺　構

調査された古墳はすべて円墳である。1号墳は完全に破壊されていたが，他の古墳と同じ円墳であったと考えて良いであろう。工事中にあまり大きくない石が少量確認されているので，内部主体は2号墳と同じ箱式石棺であったと考えられる。各円墳は丘陵の基部側と先端側を溝状にカットし，内部に盛土して墳丘を築造している。立地する尾根が狭いためか，溝は丘陵両側には掘られていない。

2号墳は直径約10mを計り，0.5～1mの盛り土をもつ。花崗岩の割石を用いた箱式石棺を内部主体とするが，箱式石棺は盛り土中に構築され，墓壙は確認できなかった。頭部と思われる北東小口部は破壊され，現存で長さ約2.6mを計る。床面に特別な構造はみられないが，石棺長側壁に沿って，5～10cm大の礫が置かれていたことは注目される。棺金具の可能性のある鉄製品の出土から，石棺の中には木棺が納められていたと考えると，これらの礫は木棺と石棺の間隙に詰めたものとすることもできよう。

第2図　西土居古墳群の分布

（1：10,000）

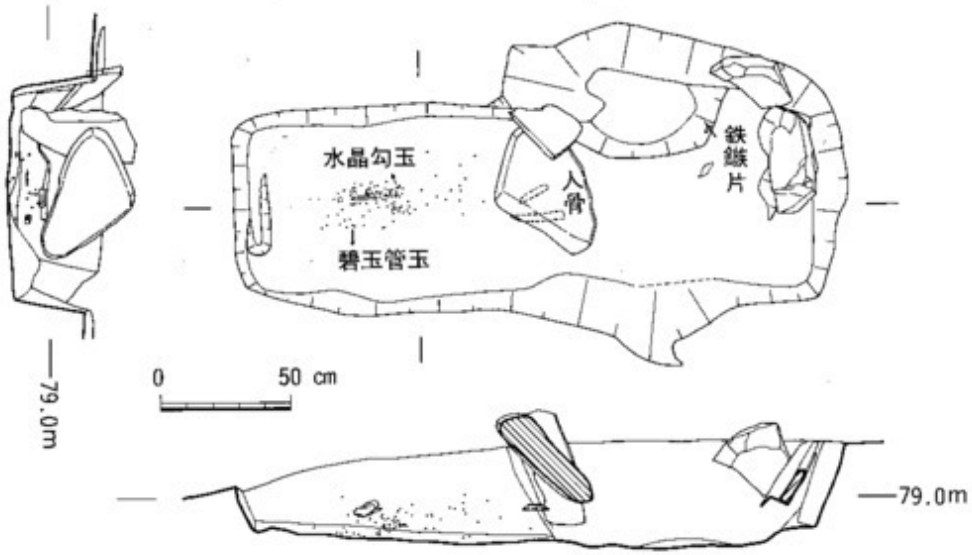
3号墳は，2号墳のやや上方の円墳状地形をなす尾根をいう。長さ1.6m，幅1.05m，深さ5～10cmの長方形に近い不定形の落ち込みが検出されたが，遺物はなく，盛土や溝は認められなかった。古墳ではない可能性も強い。

4号墳は現状で直径約8m，高さ0.6mの円墳である。2号墳と同じく尾根筋の二方を溝状にカットしているが，盛土は全く認められない。溝から須恵器大甕などが出土した。内部主体は箱式石棺であったが盗掘によって石材はすべて抜かれ，これを用いて堀り形の北西部に石囲いを作ってあった。石材は安山岩を主体とするが，磨滅を受けた板状の花崗岩もあった。なお，この石囲いの上部は地表に露出していたため，1号墳の破壊直後に盗掘され，ここから土師器壺が掘り出されている。

石棺の掘り形は長さ2.36m，幅約0.8m，深さ0.2～0.4mの規模をもつ。

5号墳・6号墳とも，墳丘の発掘は行わなかったが，2号・4号墳に似た規模の円墳である。5号墳は土壙墓を内部主体とするが，6号墳は床面に敷石をもつ小形の横穴式石室を内部主体とする。

第3図　西土居2号墳棺内遺物出状態図



第4図　西土居4号墳石棺及び遺物出土状態図

3．遺　物

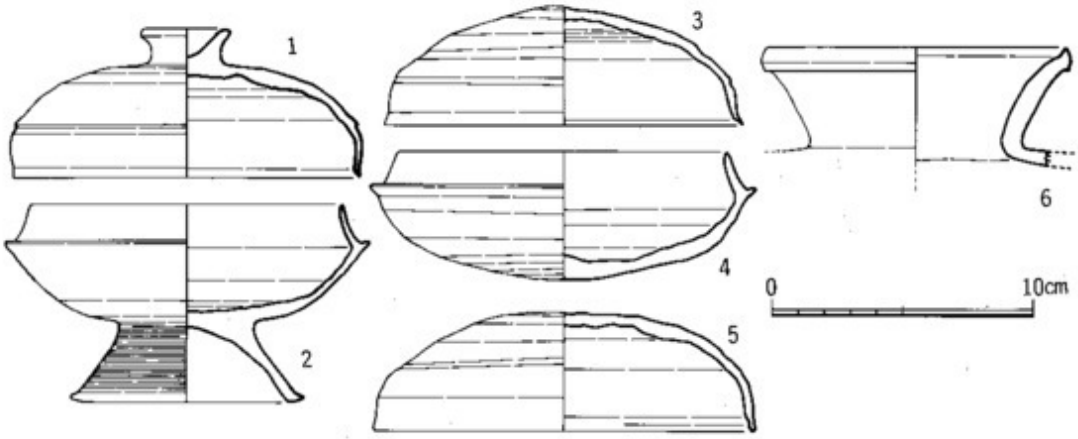
1号墳からは杯蓋4，杯身3，無蓋高杯1，高杯蓋2，高杯身2，短頸壺1が採集されている。杯蓋外面の体部と天井部の境には沈線及び沈線ぎみの段を持ち，口縁部内面には稜や沈線を持つので，6世紀中葉から，後半でも古い時期に比定することができる。

2号墳からは，碧玉管玉3，水晶切子玉1，水晶そろばん玉1，滑石臼玉1，ガラス玉5，鉄鏃7（広根6，尖根1），刀子2，鉄斧2，のみ1，棺金具（？）1，須恵器短頸壺1，杯蓋をかぶせた壺1が石棺内から出土したほか，須恵器甕，石鏃が溝から検出された。玉類は石棺中央部から北東側にかけて出土し，須恵器は足部と思われる南西小口部分で出土した。石棺中央部からは鉄器のほか，人骨の小片も検出された。須恵器は6世紀後半代に比定できる。

4号墳の石棺掘り形の埋土から，鉄鏃3片，水晶勾玉1，碧玉管玉1，ガラス玉125，土師器壺，須恵器片，人骨片が出土した。特に南東小口付近には玉類が集中し，下顎骨も認められたので，こちらが被葬者の頭位であったことがわかる。周溝からは6世紀末前後の大甕などの須恵器が出土した。

5号墳からは須恵器片と，弥生土器かと思われる小片を少量出土したが，これに伴うかどうかはわからない。

6号墳からは須恵器杯・提瓶・鉄器を出土した。杯は6世紀末～7世紀初頭のものである。なお，墳丘から壺棺と思われる弥生時代後期の壺も検出した。



第5図　西土居古墳群出土須恵器（1～4：1号墳，5：2号墳，6：4号墳）

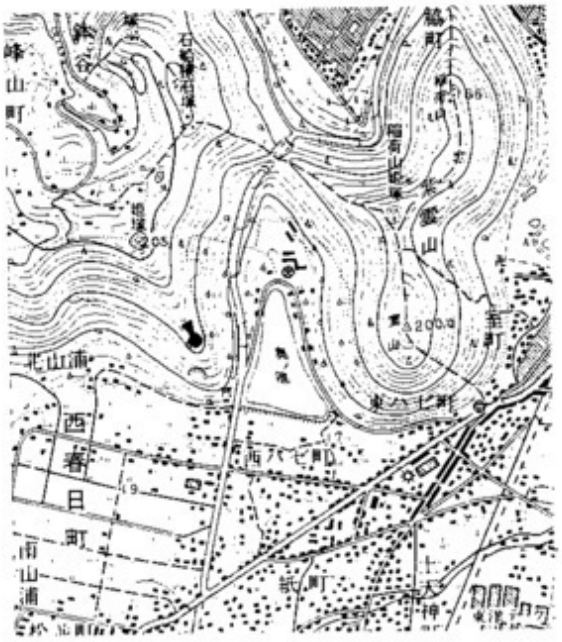
4．おわりに

西土居古墳群の6基のうち3号墳は古墳でない可能性も強く，5号墳の時期は限定できなかった。しかし，全体としてみれば，6世紀中葉頃から遅くとも7世紀初頭にかけて，付近の特定有力家父長家族が，丘陵先端から奥に向って順次築造した群集墳であるといえる。ところで，県下では6世紀後半になると群集墳の埋葬主体として横穴式石室が普遍化するが，西土居古墳群ではなお箱式石棺を用いており，このことは，横穴式石室の受容をめぐる地域的様相の一例として注目される。なお，詳細は報告書を参照されたい。　（渡部）

鶴尾神社4号墳

1．はじめに

鶴尾神社4号墳は，多数の積石塚が所在することで有名な石清尾山に立地する積石塚の前方後円墳である。摺鉢谷の南東部尾根上にある姫塚古墳から，南東に延びる尾根上に4基の円墳と共に立地する。しかし，最下位の5号墳（円墳）は採石工事によってすでに消滅し，4号墳も昭和55年，後円部の一部が破壊されるに至った。このため，高松市教育委員会は昭和56年2・3月に石室の清掃と一部の実測を行った。この調査によって，石室内部に落込んだ礫・板石の中から，多数の土師器と共に，「伝世鏡」として知られる伝石清尾山出土の獣帯方格規矩(註1)四神鏡の欠損部分が出土した。



第1図　鶴尾神社4号墳の位置（1：25,000）

こうしたことから，香川県教育委員会の指導のもと，高松市教育委員会主体で昭和57年7月19日から10月6日まで，国庫補助事業として緊急確認調査を実施した。

2．遺　構

鶴尾神社4号墳は後円部を丘陵の先端側にして立地する。丘陵は安山岩の岩盤である。前方部西側には大きな露岩を残し，墳裾がさえぎられるなど，自然地形を大きく残している。

調査によって，前方部先端及び墳丘西側では墳裾が確認できたが，東側ではほとんど確認できなかった。また，後円部には明らかに墳丘外と思われる部分にまで塊石による段築が及び，特色ある構造を示している。

墳裾は，前方部先端及び先端に近い側面部では大きい塊石を列石状に並べ，くびれ部付近では板石の小口を揃えて3～4段に積上げる。後円部ではやや小さめの塊石を乱石積みとし，上面にバラス状の砕石を敷いた段が数段確認できた。後円部の上部の段築はくびれ部から始まり，後円部をまわるが，下部の段築はくびれ部付近では消滅している。

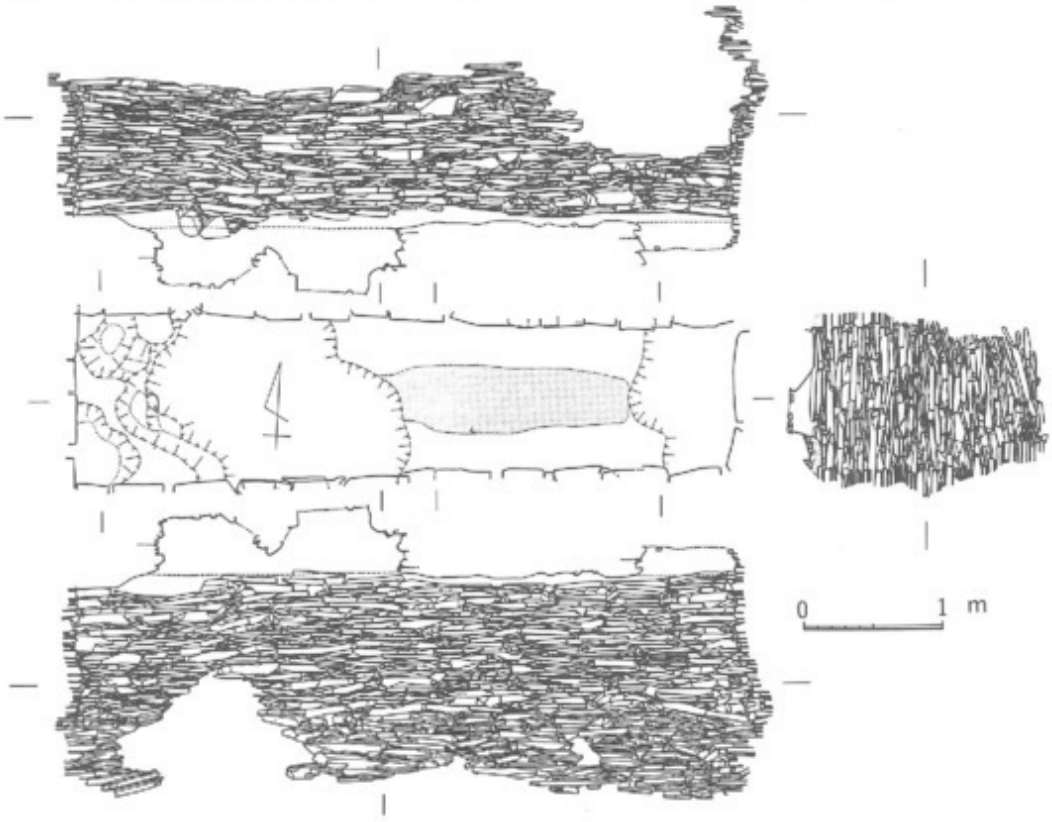
これらの段のうち，どれを墳裾とするかで墳丘規模は異なるが，西側くびれ部から始まる段をとれば，全長41.5m，後円部の直径20.2mとなる。また，その上段の，前方部からゆるやかに続くものをとれば，全長40m，後円部の直径18.7m（主軸上）となる。前方部は長さ21.3mで，端部の幅10.6m，くびれ部の幅7.1mである。前方部は，端から約15mところが最も狭く，幅4.5mで，その付近からバチ状に開く。前方部のコーナーは，側面及び前面の墳裾を直線状に

伸ばした形を推定したが，丸味をおび，幅が狭くなるかもしれない。なお，後円部墳丘外最下段の直径は約25.3mであり，これに前方部の長さを加えた46.6mは，これまで鶴尾神社4号墳の全長と考えられていた47mに近い。

内部主体は長大な竪穴式石室である。これまで，石室は後円部の先端寄りに位置し，前方部寄りにも別の石室が存在するのではないかと考えられてきた。しかし，推定復元された墳丘からみれば，石室は後円部のほぼ中央であることがわかった。後円部は，先端が低くなる尾根上に立地しているため，後円部墳頂の平担面が前方部側に寄ったため，このように考えられたのであろう。ただ，埋葬主体が本石室だけである確証はなく，今後さらに発見される可能性は残されている。

竪穴式石室は墳丘主軸に斜行し，ほぼ東西（MN—93.5°—W）に構築されている。長さは約4.7m，幅は東小口付近で1.01m，西小口付近で1.23mを計る。このことから，遺体は西枕であったと考えられる。側壁は東側小口壁と，南側長側壁の東部が最も保存が良く，高さは約1.6mを計る。

側壁はすべて板状安山岩で構築されている。石材は内面での長さ20～60cm，厚さ5cm前後で，壁面下部にやや大きな石材を用いる傾向があるが顕著ではない。各壁とも，床面から50～60cmの高さまでは石材の内面を揃えて垂直に積上げ，コーナーは直角に組合せる。しかし，それよ



第2図　鶴尾神社4号墳の竪穴式石室

り上部は持送り，コーナー部分には両壁にまたがって隅丸状に石材を配置する。コーナーは，上部ほど隅丸状の構造をとる。

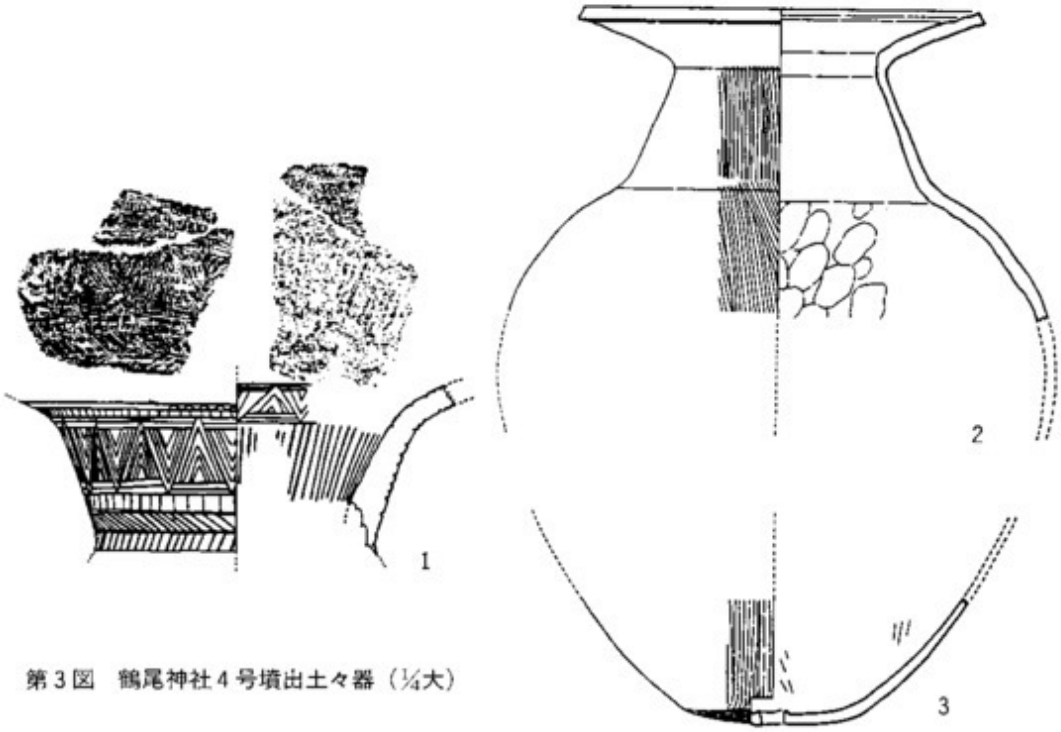
天井部はすでになくなっていたが，調査によっても石材は全く見出すことができなかった。したがって，側壁はいわゆる合掌形か，それに近い構造であったと思われる。その場合，石室の高さは1.8m以上はあったものと考えることができる。

床面は粘土敷きの構造で，側壁にそった部分が高く，横断面でみれば，中央部が6cmほど凹み，その部分には朱が認められた。床面を穿った盗掘穴の壁面によれば，石室は，墳丘をなす塊石の上にやや小さな塊石を敷いて上面を平らにし，さらに粘土を敷いた上に構築している。その後粘土床を構築し，側壁最下段の2～3石をかくしている。

3．遺　物

石室内から，石清尾山出土と伝えられ，「伝世鏡」とされてきた獣帯方格規矩四神鏡の欠損部分が出土したほか，石室内や，後円部墳頂の石室周辺，墳裾部から多量の土器が出土した。いずれも原位置を保ったものはなく，石室内から出土した土器も本来石室に副葬されていたという確証は得られなかった。

獣帯方格規矩四神鏡は，約1/4大の破片で，内区に白虎と思われる獣形の頭部と霊獣，外区に獣帯文などを持ち，鏡背面に向って左側の割れ口に沿って，方格上と斜行櫛歯文上に二孔が穿たれている。銘文は「之為鏡清」と読め，これによって銘文は「漢有善銅出丹陽取之為鏡清如明左龍右虎備三」の20字が復元された。



第3図　鶴尾神社4号墳出土々器（¼大）

文様は，一段高くなった外区に接する斜行櫛歯文以外は不明瞭で，特に内区が著しい。ただ，内区でも，二重線であらわされた「T・L・V」の内側や，四葉座乳の基部，銘文文字の外側（斜行櫛歯文側）などは比較的明瞭であり，この部分が磨滅しにくいだけに，手磨れ，あるいは研磨によるものである可能性が大きいものと思われる。

多量に出土した土器には畿内の土器の特徴を持つものがみられないこと，多様な文様を持つものがあること（第3図1）を特徴とする。2・3は墳裾部に立て並べられていたと考えられる土器で，類例は岡山県雄町遺跡(註2)・百間川遺跡(註3)・兵庫県川島遺跡(註4)などにある。これらの例からみて，鶴尾神社4号墳出土の土器は畿内の布留式以前に遡る可能性が強く，したがって鶴尾神社4号墳は我国最古式の前方後円墳と考えることができる。

なお，鶴尾神社4号墳の詳細は，高松市教育委員会から刊行された報告書を参照されたい。

（渡部）

（註）1．梅原末治『讃岐高松石清尾山石塚の研究』『京都帝国大学考古学研究室報告』12　1933

2．正岡睦夫ほか「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告―山陽新幹線建設に伴う調査―』1972

3．下澤公明ほか『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査』　III　1982

4．石野博信ほか『川島・立岡遺跡』　1971

第4図　鶴尾神社4号墳　竪穴式石室西側小口壁

讃岐国分尼寺跡

1．はじめに

讃岐国分尼寺跡は綾歌郡国分寺町新居の法華寺を中心とする位置と推定され，昭和３年国史跡に指定されている。現在法華寺境内に石が19個あり，これが金堂の礎石と考えられ，この金堂跡を中心に150～180m四方が指定範囲となっている。

昭和55年７月，指定地北東隅に近い箇所で初めて発掘調査が行なわれたが，遺構はなく，中世以降の包含層を検出したにとどまった。

今回の調査は尼寺跡の発掘調査としては２度目で，史跡指定地南西隅の畑地の現状変更に伴うものである。調査対象面積は3025m²で，県教育委員会が主体となり国庫補助を得て調査を実施した。発掘は昭和57年４月26日から開始し，同年８月10日終了した。発掘面積は約800m²である。

第１図　讃岐国分尼寺跡位置図

2．遺　構

今回の調査で検出した遺構は，溝・建物址・土坑・ピットである。

この中で最も重要な遺構は溝である。調査地区の東端で検出した。地山を堀り込んでおり，上幅２m，底幅0.9m，深さ0.9mの大きさで，真北方向に走っている。溝中から須恵器，土師器，塼，瓦，石鏃などが出土した。これらの遺物からみて，この溝は10世紀頃に埋没しはじめたと推定される。

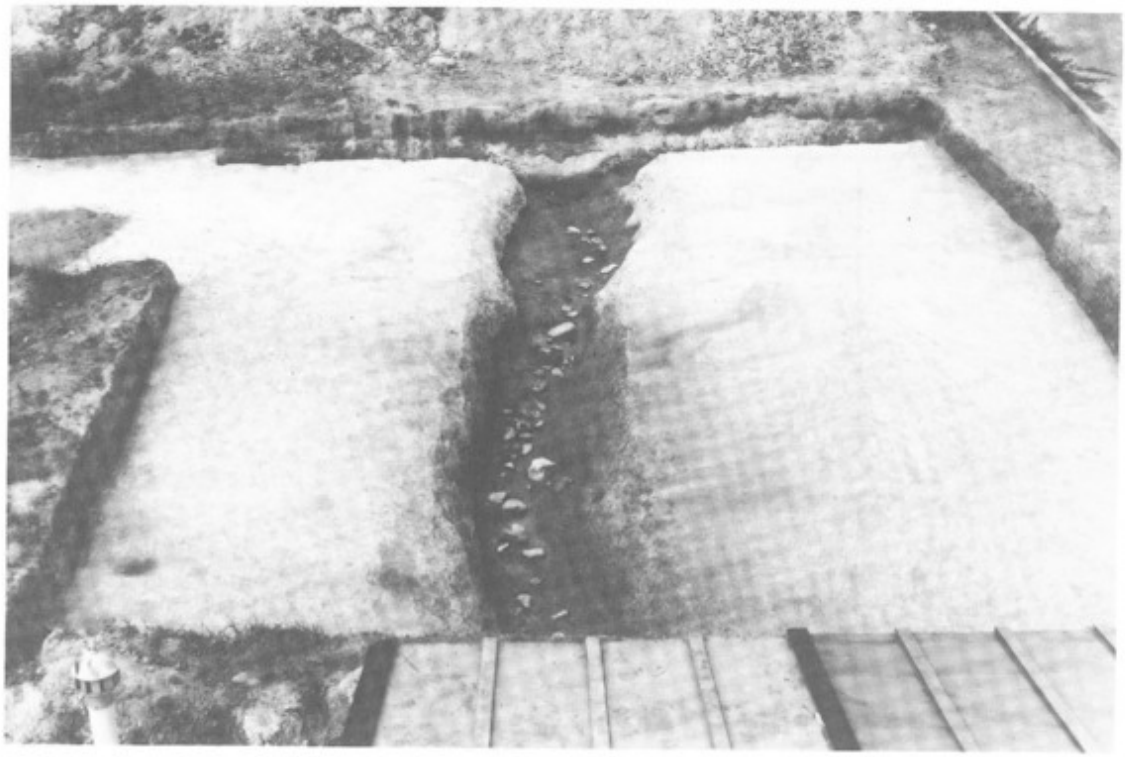
この溝の西20mの地点で，掘立柱建物址と土坑が検出された。建物址は２×３間の大きさである。この建物址の南東５mの位置に浅い土坑がある。長軸130m，短軸70mの楕円形で，深さは10～18mである。須恵器，土師器，瓦片が出土した。建物址と土坑はほぼ同時期で９世紀頃のものである。

溝と建物址にはさまれた地点からピットが多数検出された。約130個あり，径14～20cm，深さ10～40cmで，柱穴や杭穴と思われるが，組み合せは判然としなかった。ピット群の中に炉跡と推定される土坑があった。径80～90cm深さ30cmの大きい土坑と，径30cm，深さ10cmの小さい土坑から構成されており，大きい土坑には黒茶色土が堆積し，鉄クズが出土し，小さい土坑は内壁・底が赤く焼けている。小鍛治に利用されたものかもしれない。

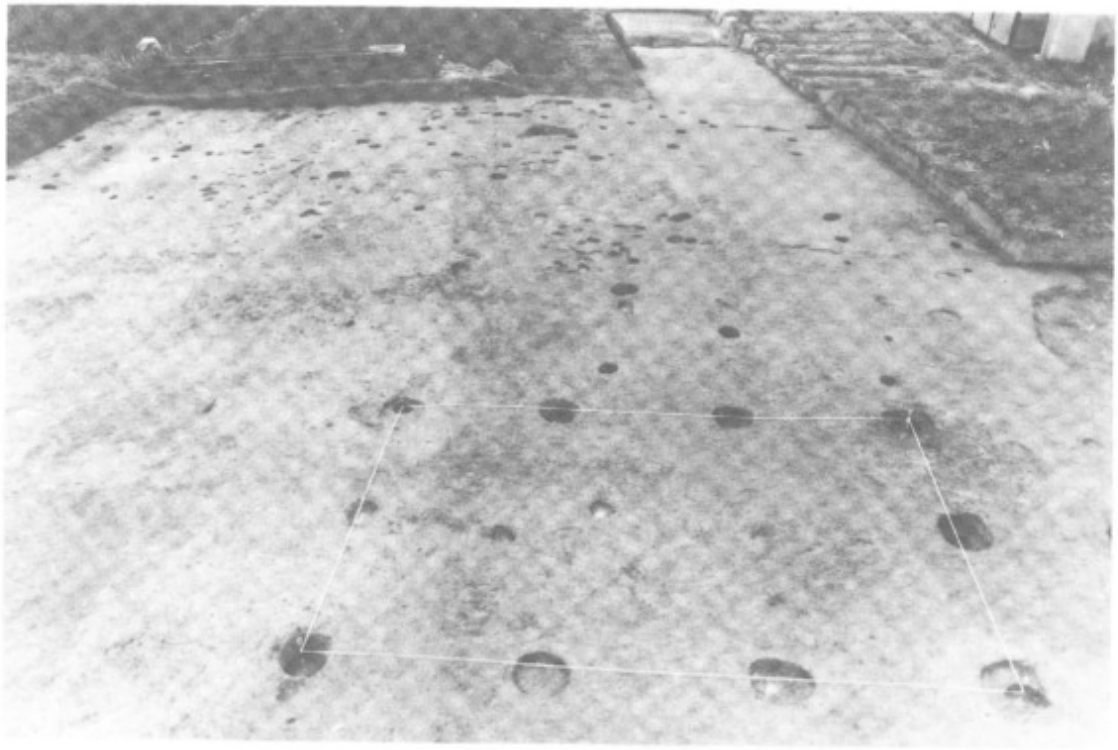
ピット群と炉跡は出土した土器類からみて古代末～中世にかけてのものと思われる。

N:S
SB01
SK01
SK02
0
4
m
1 耕作土
2 表土
3 黒灰色土
4 青かっ色粘質ローム土（地山）
5 灰褐色粘質土（地山）
6 灰色土
7 明灰ちゃ色土
8 灰褐かっ色粘質ローム土
9 灰白ちゃ色小粘質ローム土
10 灰褐かっ色粘質ローム土
11 暗灰ちゃ色粘質土
12 暗灰ちゃ色粘質土（小礫が多い）
13 砂層
14 灰褐かっ色粘質ローム土（地山）
15 黒かっ色粘質ローム土（〃）
16 黄緑色粘質土（〃）
17 灰褐色粘質土（〃）
18 灰黄褐色粘質ローム土（〃）
0
1 m

第2図



国分尼寺跡溝



国分尼寺跡遺構群

3．遺　物

今回の調査で出土した遺物は，須恵器（杯・甕・瓶・高杯），土師器（杯・椀・皿・甕・土鍋）軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦，平瓦，塼，灰釉陶器，瓦質土器，輸入磁器，鉄釘，石鏃などである。発掘面積の割に出土量は少なく，破片が多いが，溝と建物址横の土坑から比較的完形に近いものが出土した。

軒丸瓦は，複弁八葉蓮華文と，細弁十六葉蓮華文軒丸瓦片が2点出土した。ともにこの尼寺跡に多いものである。軒平瓦は均正唐草文軒平瓦と思われる破片が1点出土した。灰釉陶器が3点出土している。いずれも細片であるが，椀と思われる口縁部2点と底部1点である。灰色微密で硬質の胎土に淡い緑色の釉薬がかかっている。東海産であろう。

4．おわりに

讃岐国分尼寺跡は僧寺に比べ調査例が少なく，法華寺に保管されている古瓦と，境内の礎石群が知られているのみで，寺域は漠然と1町四方と推定されており，これ以上の具体的な調査・研究はなされていなかった。今回の調査は対象面積が広く，対象地区が史跡指定地南西隅に該当するため，寺域を画す遺構の検出が期待された。調査結果は前述したとおりで，溝が最も重要な遺構となった。溝は，古代官衙や寺院跡の主軸線に多い，真北方向に走っており，出土遺物から10世紀以前に掘削されていることが判明した。尼寺の主要伽藍が寺域の中央にくる配置であったと仮定すると，金堂址と推定される礎石群と溝との距離は平均86mで，この数値は1町半の半数に近い。つまり，尼寺の寺域は東西幅1町半で，今回検出した溝は寺域の西を画す溝の可能性が強いのである。

調査区の南端で南を画す遺構が検出されなかったが，正方形の寺域だとこの地点で遺構が検出されるはずであり，長方形の寺域の可能性もうかび上ってきた。今後，これらの確認も課題の1つとなった。

今回の調査を足がかりに，今後尼寺跡について調査，研究，保護の手がさしのべられることを期待したい。なお，詳細は調査概報が刊行されているのでそれを参照されたい。　（大山）

すべっと２・４号窯

１．調査の契機

十瓶山，火ノ山を中心とする地域には山林に近い状態で香川県有地があり，その再利用にともなう事前調査として本調査を実施した。企画部企画調整課が調査主体となり，文化行政課が現地指導を行った。昭和57年度調査として，すべっと２号窯の本体と灰原，同４号窯の本体を調査し，昭和58年１月24日より同年３月25日までの期間を要した。また，昭和58年度調査を現在，継続実施している。

第１図

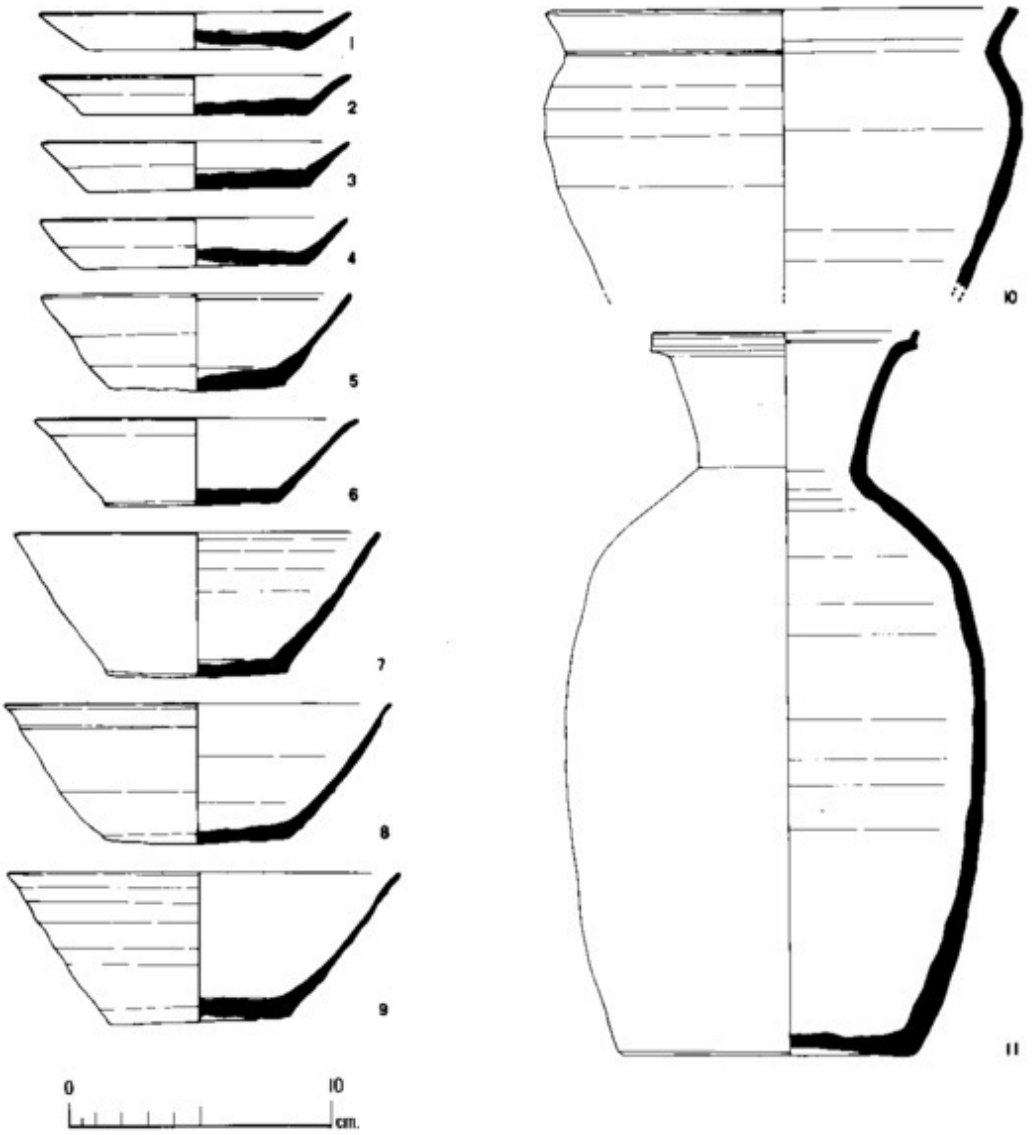
２．位置と環境

すべっと２・４号窯は綾歌郡綾南町陶字すべっとに所在する。標高216mの十瓶山北東麓に２号窯が，また十瓶山の北東に位置する標高247mの火ノ山から派生した尾根裾に４号窯が位置し，さらに十瓶山，火ノ山がつくり出したこの谷地形には県指定史跡すべっと１号窯（昭和42年調査・窖窯）や同３号窯（昭和53年調査・窖窯）などが知られている。この，十瓶山，火ノ山の山麓や隣接する北条池を中心とする地域には古くから瓦窯，須恵器窯が知られており，陶窯跡群や十瓶山窯跡群と呼ばれている。実態は必ずしも明確ではないが，瓦窯約30基，須恵器窯約70基が分布しており，操業期間はおおむね７世紀前半頃より13世紀頃までと考えられる。なお，十瓶山南麓よりつづく台地上で西村遺跡が調査され，古代末より中世前半を中心とする生活遺跡の存在が明らかになり，同調査中に瓦窯１基と須恵器窯２基が検出され，この地域における窯業遺構の数はさらに増加するものと思われる。

３．調査の概要

すべっと２号窯

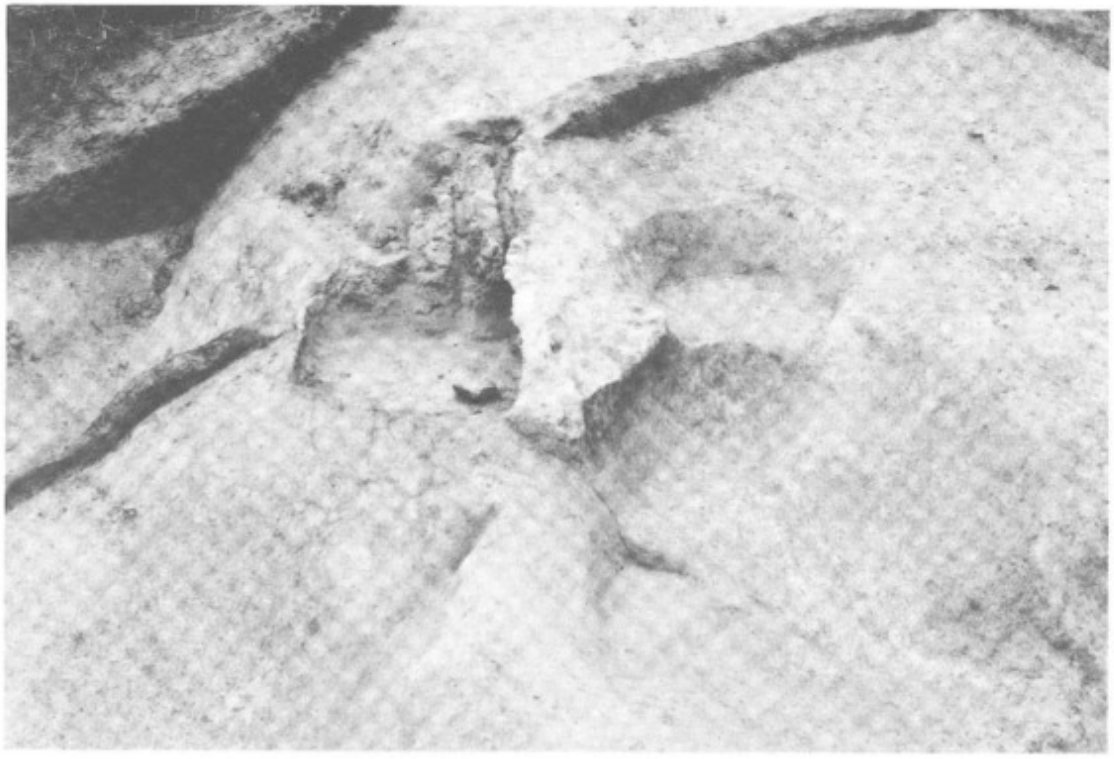
十瓶山北東麓に派生した尾根の斜面には，調査着手前より窯壁の一部が露呈しており，窯の存在が考えられていたが，今回表土下約10センチで窯体を検出した。窯体は磁北から68度西に偏した主軸方向で南北約1.40m・東西約2.68mの平面規模をもつ平窯であったが，焼成室の西半部が後世の開墾のために破壊されていた。東側壁は比較的良好に遺存していたが天井部はすでに崩壊していた。また，焼成室内部には３条のロストルが遺存した。焼成室は約1.25×1.15mの規模が残存しており，床面はやや窪んだ状況を呈している。検出した状態では焚口より下方は急勾配で尾根を下っている。焼成室は遺存している東側壁の立ちあがりから復原するなら



第２図　すべっと２号窯出土遺物（⅓）

ば，それほど高い天井をもっていなかったと思われる。床面および側壁部の断面観察からみれば，修復の痕跡は認められない。焼成室内より須恵器杯・皿の細片が，また燃焼室内より須恵器皿細片と同壺が出土している。

２号窯の南東約１ｍで2.7×2.0ｍ，深さ約0.6ｍの土坑を一基検出した。須恵器杯・同皿・同鉢，さらに焼成が不良で瓦質を呈する皿が灰を混じえながら大量に含まれており，その大半が焼けひずんだ不完全なかたちの土器であった。今回窯の下方の調査もあわせて実施したが，明確な灰原が検出できなかった。位置関係よりみて，この土坑が灰原のような機能をもっていた



第3図　　1　すべっと2号窯と土坑

2　すべっと2号窯

と考えられる。

すべっと4号窯

2号窯の北東約150mの尾根南傾斜面に位置する。山道によって窯体が中央で分断されており，その崖面に窯壁の一部が露呈していた。窖窯であり焼成室は天井部を欠失していたが，床面が遺存している。残存主軸長約8m，最大幅約1.5mをはかる。この焼成室は検出した窯体の奥壁より約3.2m下方で一度勾配をかえ，上方で約25度，下方で約35度の傾斜角度をもつ。また，傾斜角度をかえる地点には灰層が厚く堆積している状況が認められた。平面形もこの地点でやや屈曲しており，これらのことより本窯が2度以上にわたって，そのかたちをかえて使用された可能性がうかがえる。本来下方にあった焼成室は削平されたと思われ検出でかなかった。本窯の下方にある谷部には灰層が認められ，灰原の遺存が考えられる。窯内部より須恵器甕，窯体周辺より須恵器甕・鉢，黒色土器を検出している。

第4図　すべっと4号窯

4．結　び

今回の調査によって，須恵器の小型品を中心に製作していたと思われる平窯一基と，須恵器の大型品を中心に製作していたと思われる無段の窖窯一基を確認した。平窯のすべっと2号窯は広範囲に広がる灰原をともなわず，土坑を用いることによって処理していると思われる。同様な例は昭和54年～同56年にかけて実施した西村遺跡の調査例でも考えられたことであるが，今回明確な例を検出したと言えよう。すべっと2号窯の操業時期は今後詳細な検討を必要とするが，十瓶山をはさんで本窯の南側に位置する西村遺跡からは，すべっと2号窯より出土する須恵器の小型品はほとんど出土しておらず，また西村遺跡で呼称した「瓦質土器」に先行すると思われる土器片がすべっと2号窯灰原（土坑）より出土することから10世紀以前と考えておきたい。すべっと4号窯の調査は現在継続中であり，終了をまって報告したい。　（廣瀬）

西　村　遺　跡

1．はじめに

綾南町西村遺跡は，昭和53年度の県道府中―琴南線建設工事に伴う発掘調査で発見(注1)され，国道32号線綾南バイパス建設工事にともない，翌54年度から56年度まで調査(注2)された。

第1図　西村遺跡の位置（1：25,000）

遺跡は，陶窯跡群中に所在し，十瓶山の南，北條池の東に位置する。調査によって，平安時代後期から鎌倉時代に及ぶ掘立柱建物跡・墓・窯跡などが検出され，当時の村落や陶窯跡群を考えるうえで重要な資料を提供している。特に，西村1号窯跡出土の瓦は，京都府鳥羽離宮跡出土の瓦と同文であり，これによって当時の中央との物資の流通や，伴出の須恵器の年代比定に重要な手がかりを与えるものであった。

西村遺跡は，中央に道路が貫通したことによって，開発に伴う調査の増加が予想された。そのため，香川県教育委員会と綾南町教育委員会は今後の遺跡の取扱いに万全を期すべく協議が行われた。

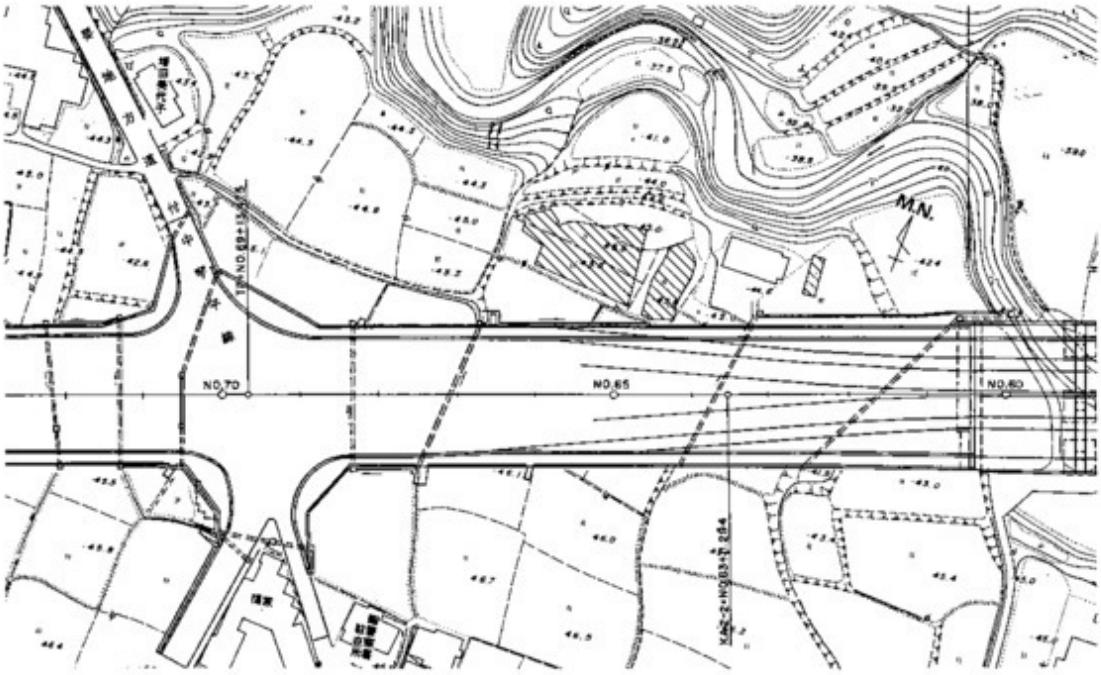
今回の調査は，倉庫建設に伴うもので，県教委の指導のもと町教委が主体となり，昭和57年5月17日から6月14日まで実施された。調査の結果，調査予定地区の西側に遺構が集中し，中央部から東側では検出されなかった。遺構は地山に掘込まれており，地表下20～30cmと非常に浅い。

2．遺　構

今回の調査で検出された遺構は掘立柱建物跡6棟をはじめ，多数のピット・土壙5・溝・灰や焼土を含む掘込みなどがある。

6棟の掘立柱建物のうち，ＳＢ8202以外はほぼ東西に方向を揃えて検出された。そのうち，ＳＢ8204～ＳＢ8206は同じ場所で，ＳＢ8203は一部が重複し，ＳＢ8201はやや東に離れている。ＳＢ8201は3.4×1.6mと最も小さく，付属的な建物であったと思われる。なお，ＳＢ8202は4.5×4.3m，ＳＢ8203は4.12×3.86m，ＳＢ8204は5.3×3.7m，ＳＢ8205は11.0×4.26m，ＳＢ8206は10.76×4.2mの規模を持つ。

灰・焼土を含む掘込みは，ＳＢ8205，ＳＢ8206の西端に一部重複して検出された。長さ2.8m以上，幅約1m，深さ15cm前後の長方形を呈し，中央に幅約8cm，深さ数cmの浅い溝が走る。



第２図　西村遺跡トレンチ配置図（斜線部，１／2,000）

建物に伴う炉の可能性も考えることができる。

土壙のうち，ＳＫ8202～ＳＫ8204は直径1.1～1.4m，深さ0.4mを計る。ＳＫ8202から木片が出土し，ＳＫ8203の底には厚さ５cm程度の灰層と，その上に２個の河原石が検出された。墓であるかもしれない。

３．遺　物

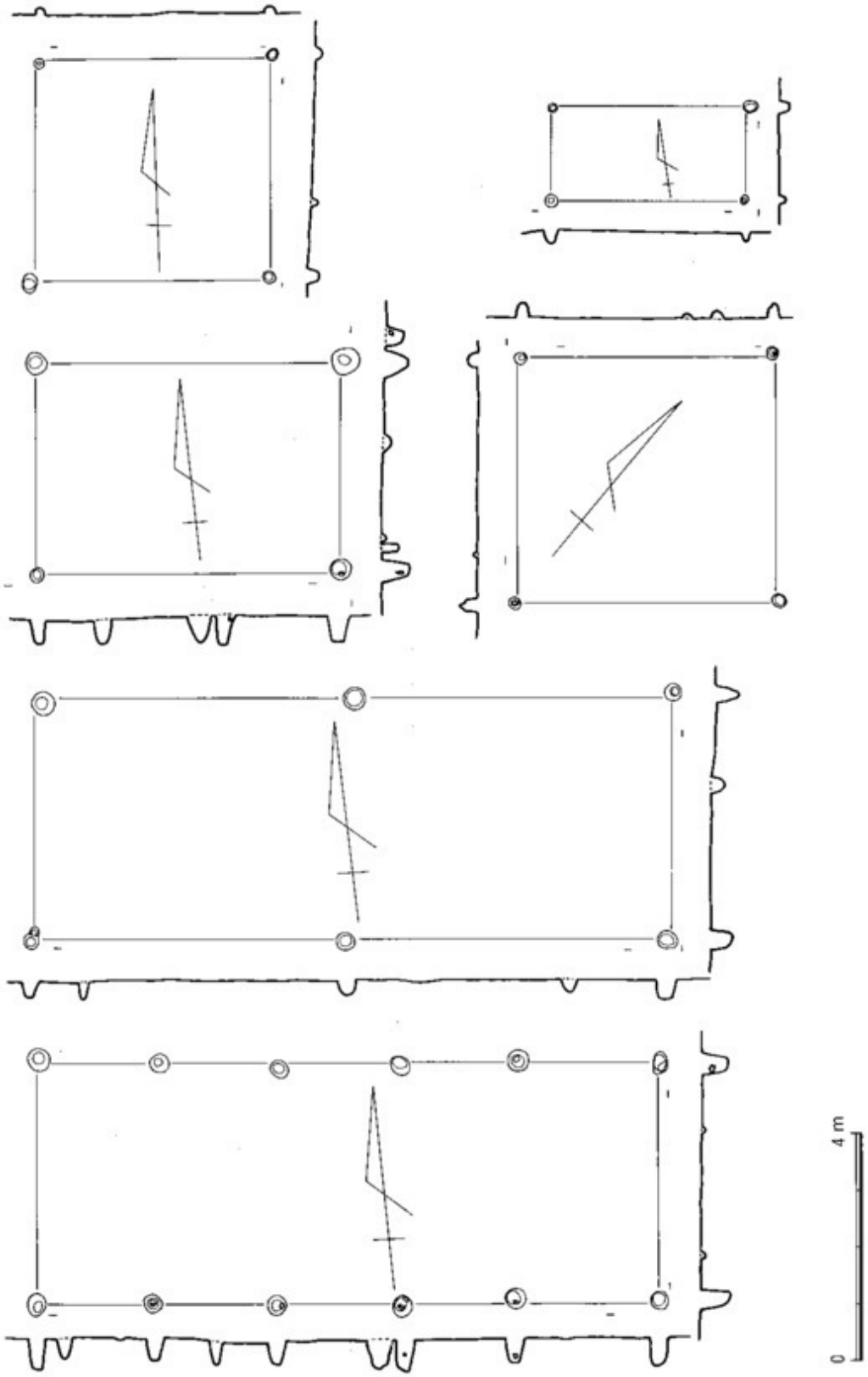
堆積土層や遺構面，遺構埋土からごく少量の遺物が出土した。いずれも小破片で，須恵器・土師質土器・瓦質土器などがある。中世のものであるが，小破片のため，詳しい時期は明らかにしがたい。

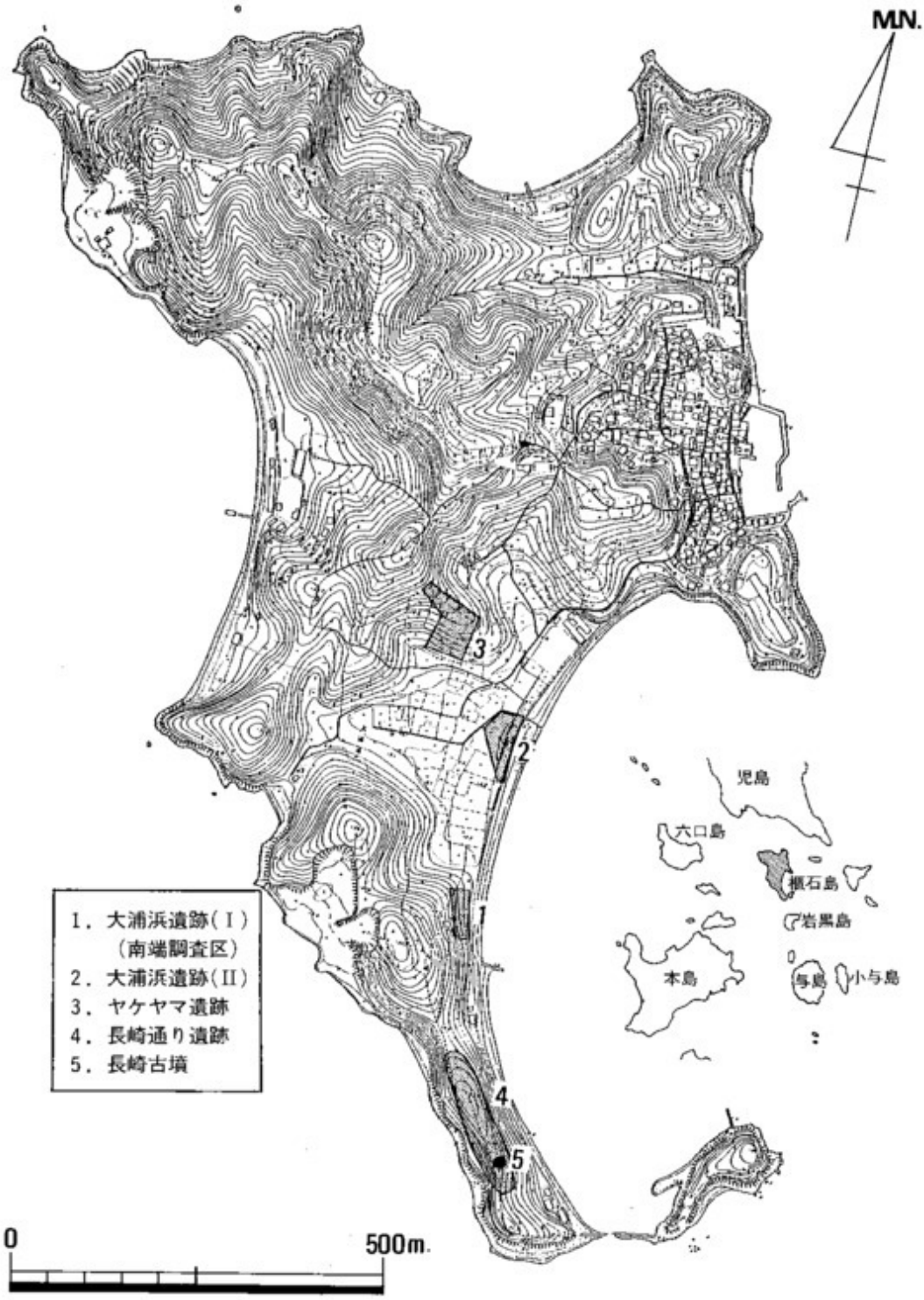
４．おわりに

今回の調査は，国道32号線綾南バイパス建設工事に伴う発掘調査が終了した後で，初めての本格的な発掘調査であった。遺構の密度はうすいものの中世と考えられる住居区が発掘され，こうした調査を継続することによって，西村遺跡を面として把えることができるという見通しが得られた。中世讃岐の村落に対する考古学的調査は，西村遺跡の調査で開始されたばかりであり，今後の調査の継続に期待したい。　（渡部）

(註) １．秋山忠「西村遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報』　昭和53年度　1979
２．香川県教育委員会『西村遺跡』　Ⅰ～Ⅲ　1980～1982

0
4 m


4 m
0



横石島地形図及び遺跡分布図

大浦浜遺跡(Ⅰ)大浦浜南端調査区

1．はじめに

瀬戸大橋架橋に伴う埋蔵文化財発掘の事前調査が昭和55年5月より大浦浜で開始された。昭和55年度約7,000m²・56年度7,600m²が調査対象となった。この結果大浦浜遺跡は，製塩活動の場だけでなく縄文時代から中世前半代に至るまでの長い期間に渡って人々が活動した場所であるということが判明した。さらに昭和56年度の調査において，大浦浜遺跡の南端で古代末から中世初頭にかけての遺構・遺物を発見・出土した。それにより大浦浜遺跡の範囲がさらに南に広がる可能性が高くなった。この成果を踏まえて遺跡の南限を確認するための調査を，昭和57年度に実施することになった。

調査は4月13日より開始し，9月30日に終了した。調査の方法は，トレンチによる発掘方法を当初採用したが，途中後述する石組み遺構が検出されたため，掘削重機を導入して調査区を大幅に拡張した。拡張区画を含め，発掘した面積は約610m²となる。

2．遺　構

大浦浜は櫃石島の南東部に広がる砂浜である。この大浦浜の南端部よりさらに40mほど南に進んだ砂浜に，本年度調査区が位置する。この大浦浜遺跡南端調査区は，「たては」と呼ばれる丘陵が迫り，その東に幅10～20mほどの隘少な砂浜が伸びている。その砂浜の先には岩礁があり，「たては」が海に向かって突き出し，砂浜はそこで途切れている。

第1図　発　掘　風　景

土層は7つに分けられる。出土遺物から判断して第1・2層は近世以降，第3・4・5層は古代末から中世前半代にかけて堆積したものと思われる。第6層は湧水の著しい粗砂層で，磨滅した尖底タイプの製塩土器を若干含む。第7層は，輸入磁器・中世の土師器・瓦質土器などが出土しておらず，遺物は古代末までの時期と比定できるものばかりで，古代末までに堆積が終了した土層と言えよう。

検出された遺構は石組み遺構の三基である。遺構は北より南に向かってＳＺ8201，ＳＺ8203，ＳＺ8202と呼称した。三基は近接して築かれている。周辺には付属施設と思われる遺構は検出できなかった。さて遺構の性格であるが，現状では建造物の下部と考えられる。時期については中世前半代と思われる。

第2図　石組み遺構（右よりＳＺ01，03，02）

①　ＳＺ8201石組み遺構

内法南北168cm・同東西134cm，外法南北284cm・同東西244cmをはかる。方形に二列の石を配置して基底部をつくり，その上に石を積み上げている。高さは現状で30～40cmをはかるが，本来はさらに高いものであったと思われる。

②　ＳＺ8202石組み遺構

南北196cm・東西143cmをはかり，南北石列は約40cmの間隔をもって二列に配置されている。

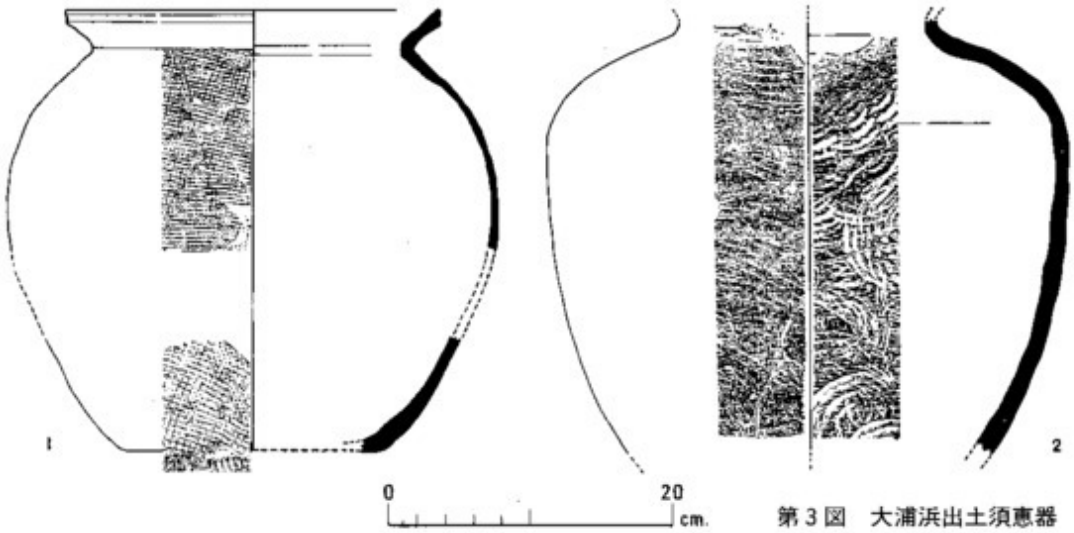
③　ＳＺ8203石組み遺構

方形の石組み南辺を検出した。一部分に二段目の石が遺存していたが，そのほかは崩壊している。石列は現状で約240cmをはかる。

3．遺　物

①　須恵器

大半が小破片で，磨滅している。出土した層は，第3・4・5・7層であり、破片数は下層になるにつれて増加している。出土した破片の器種は，壺・甕がもっとも多く，その他に杯・高杯・平瓶が目立つ。



第3図　大浦浜出土須恵器

② 土師器・黒色土器・瓦質土器

第3層から第7層にわたって出土している。破片ばかりで，完形品は1点もなかった。しかも磨滅が著しく，調整は判然としない。黒色土器・瓦質土器は第7層からは出土していない。

③ 製塩土器

調査区より出土した製塩土器は大半が尖底をもつタイプである。古墳時代後期の製塩土器は尖底を持つタイプと同じ包含層から出土しており，流れ込みなどによる後世の堆積であろう。

口縁部の形態を3タイプに分類し，比較してみると，端部が内彎するタイプが9割以上出土している。昨年度の概報で分類した3つのタイプのうち，今年度調査区においては1—Bタイプが各層ともに主流を占めている。これは大浦浜遺跡の第3層の主流を占めた製塩土器と共通している。大浦浜遺跡の尖底をもつタイプは9世紀代に比定できるので，第3層から第5層までに出土している尖底の製塩土器は流れ込みの可能性が強い。

4．まとめ

大浦浜南端調査区における本年度の成果は以下の通りとなる。

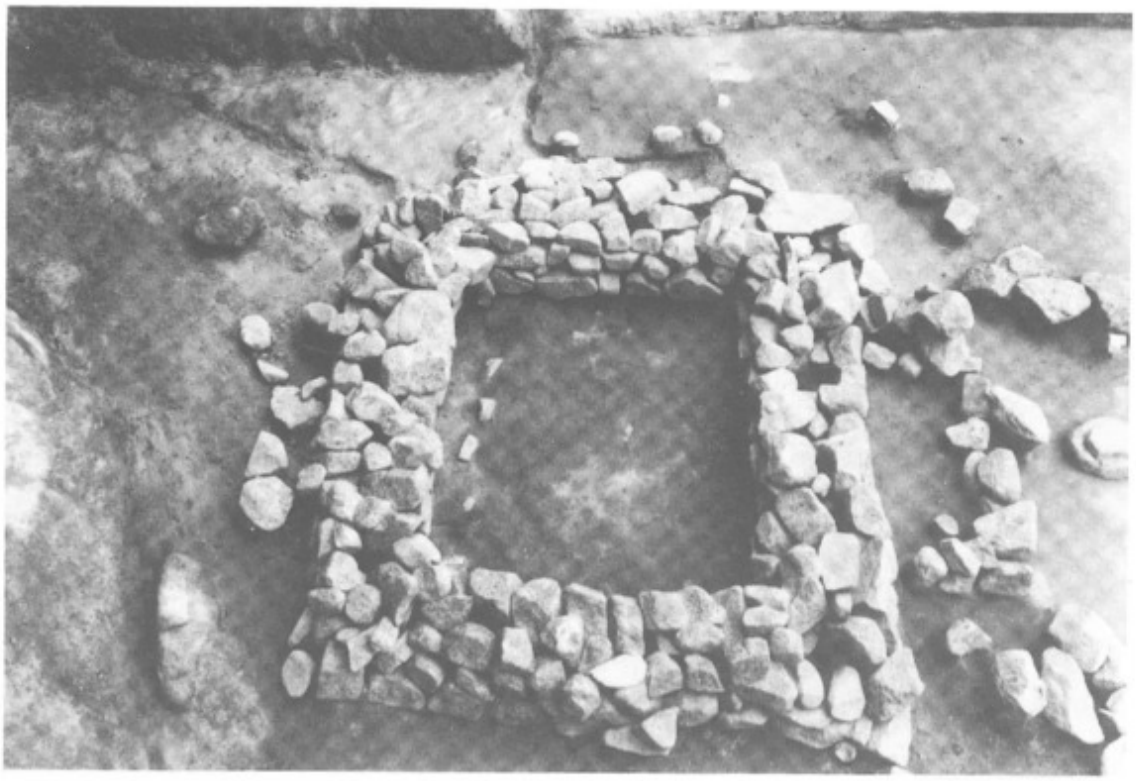
(1)大浦浜遺跡の南限が確認できた。

(2)鎌倉時代前半と思われる石組み遺構が三基確認できた。

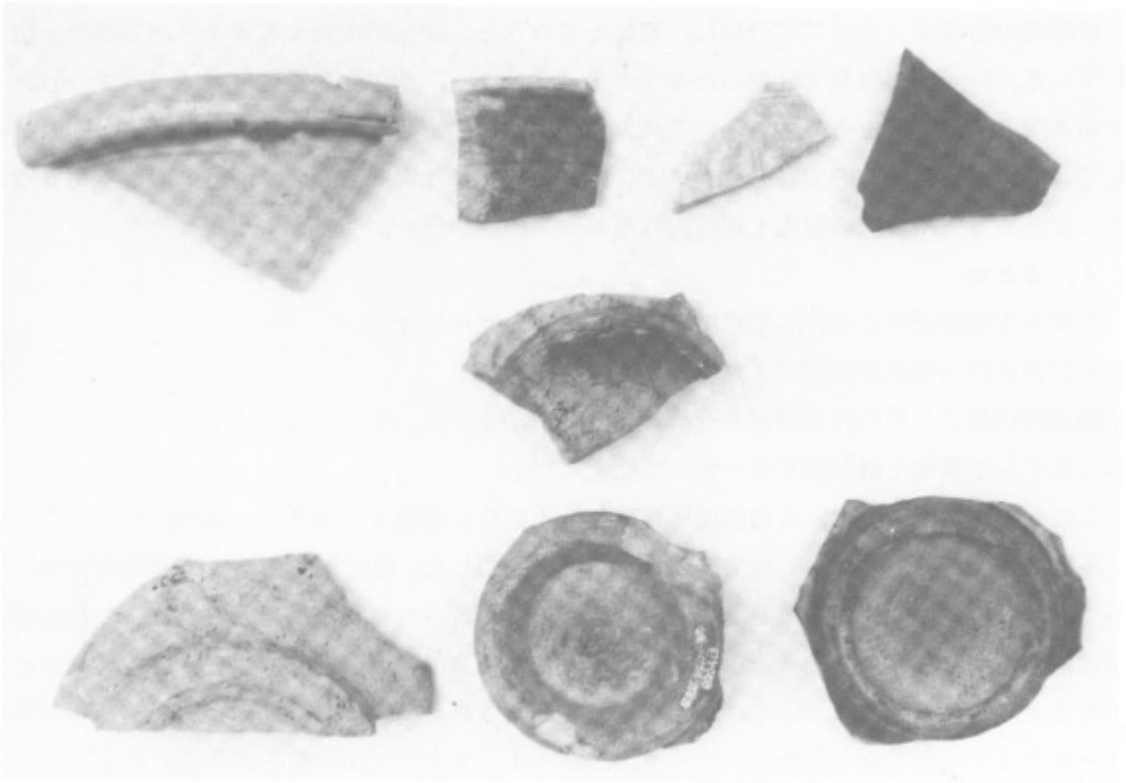
(3)尖底をもつ製塩土器が昨年度に続いて出土した。

このうち(1)については，大浦浜遺跡は昨年度予想した南限より南さらに20m伸びていた。また南限は「たては」の麓と一致するということが判明した。(2)に関して，この遺構の性格については今後の検討に待つ比重が高い。しかし昨年度報告された湧水溜めと称される集石遺構とほぼ同じ時期のものと考えられる点からみて，改めて2つの遺構群と関連づけて検討する必要があると思われる。(3)については昨年度概報で報告された口縁が，外反し金雲母の含有が多い3—Aタイプがほとんど出土しておらず，むしろI—bタイプが主流を占めているということが判明した。

（安田）



第４図　ＳＺ8201石組み遺構



第５図　大浦浜遺跡出土輸入磁器

大浦浜遺跡（II）

1．はじめに

今回の調査は，本州四国連絡橋公団の作業ヤード造成に伴う事前調査として実施された。瀬戸大橋建設に伴う本調査は，昭和57年9月18日の櫃石島長崎通り遺跡の調査終了をもって終わっているが，今回は付帯関連事業に係わる調査としておこなわれた。

昭和58年1月17日（月）に開始し，約1300m²を実掘した。昨年度の調査により予想されていた製塩土器包含層と縄文土器包含層を確認し，検出した粘土土坑7基に保存措置を構じて，3月23日（水）に終了した。

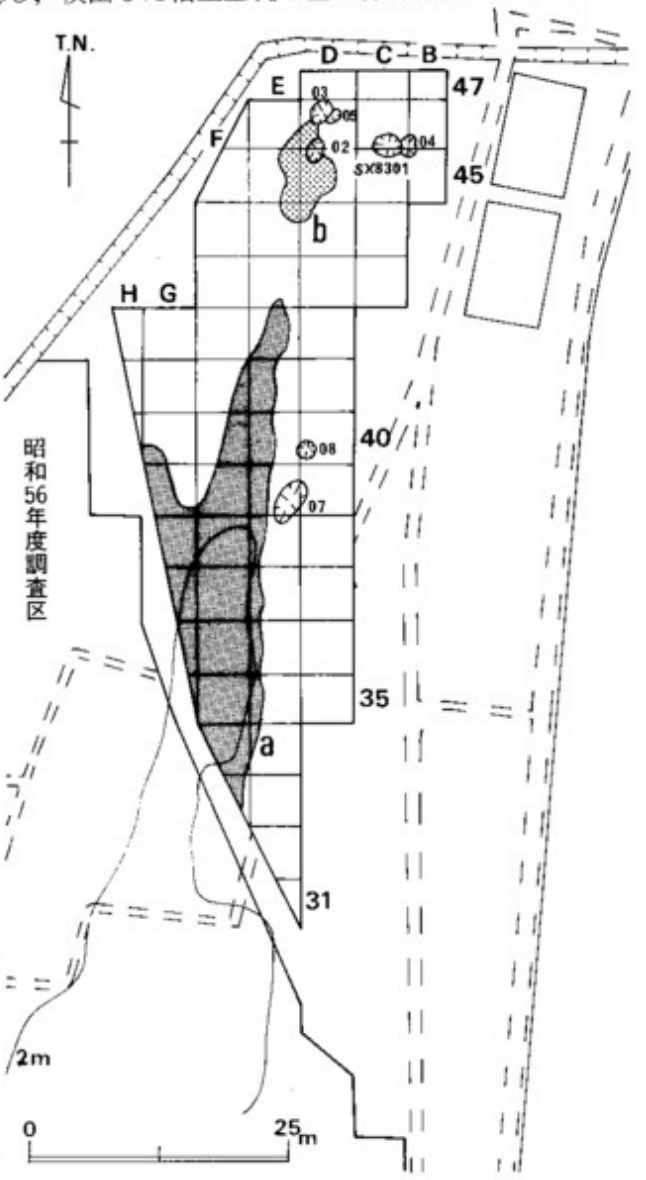
なお，調査区画の設定にあたっては，昨年度までの区画設定方法（第V平面座標系原点を基準点に定め第V系の方眼方向に合わせて区画を設定）(註1)を用いた。したがって，東西でA～H列，南北では27～47列を含むこととなった。各グリッドは北西隅の杭番号で表示されている。

2．遺　構

本調査区は，櫃石島大浦浜遺跡のなかの東部にあたり，旧海岸線から20～30mのところに位置する。標高2m前後の砂地で，畑に利用されているが，地表にさえ製塩土器の破片が散乱しているところがみられる。

耕作土（第1・2層）を除去すると，地表下20～30cmに製塩土器の包含層が，標高2mのラインを包むように広がっていた(第1図のa)。北部には無文の製塩土器が出土する包含層（第1図のb）が確認された。また，6世期後半のものと思われる須恵器が多く共伴している。

次に，古式土師器の包含層（第4層）がみられた。地点によっては須恵器も多く出土しており，最終末の古式土師器と



第1図　大浦浜遺跡（II）概要図

考えられる。古式土師器では高杯・壺がみられ，須恵器では杯身・蓋が多い。この杯身はたちあがり部分が高く5世紀中葉のものと思われる。

第5層に湧水層が，第6層に泥砂層があり，第7層には，縄文土器の包含層があった。この層は二つに分かれるが，どちらの層からも縄文時代後期前半のものと考えられる縄文土器が出土している。

C・D—45・46区で5基（第3図），D—39・40区で2基の粘土土坑が検出された。粘土土坑のなかには焼け石が入っているものが3基あり，55年度から調査で発掘されている16基の粘土土坑(註2)と同様に製塩に関係する遺構であると考えられる。長軸1.5～4m，短軸1.2～2mの長円形を示し，青灰色の粘土でできているのが4基（SX8301・02・03・07），黄色のものが1基（04），黒色のものが2基（05・08）である。いずれも地表下20～30cmで検出されており，前述の北部製塩土器包含層を破壊してつくられているものもあった。また，瓦器椀・土師器椀・黒色土器椀の破片が埋土から出土しており，これらの粘土土坑は古代末～中世前半のものであろうと思われる。

3．遺　物

古式土師器，須恵器がかなりの量出土しているが，古墳時代後期の製塩土器の出土量が圧倒的に多い。南部の包含層からは表面にタタキ目のあるものが，北部の包含層からは無文のものが出土するという特徴がみられる。

また、祭祀関係の遺物として舟形土製品・ミニチュア土器が，その他では，滑石製勾玉・同模造品・土玉・鉄鏃などが出土している。

4．おわりに

今回の調査の成果として次の諸点があげられるであろう。

① 昨年度までの本調査で確認されていた製塩土器包含層の平面的な広がり(註3)を完結させ，把握できた。

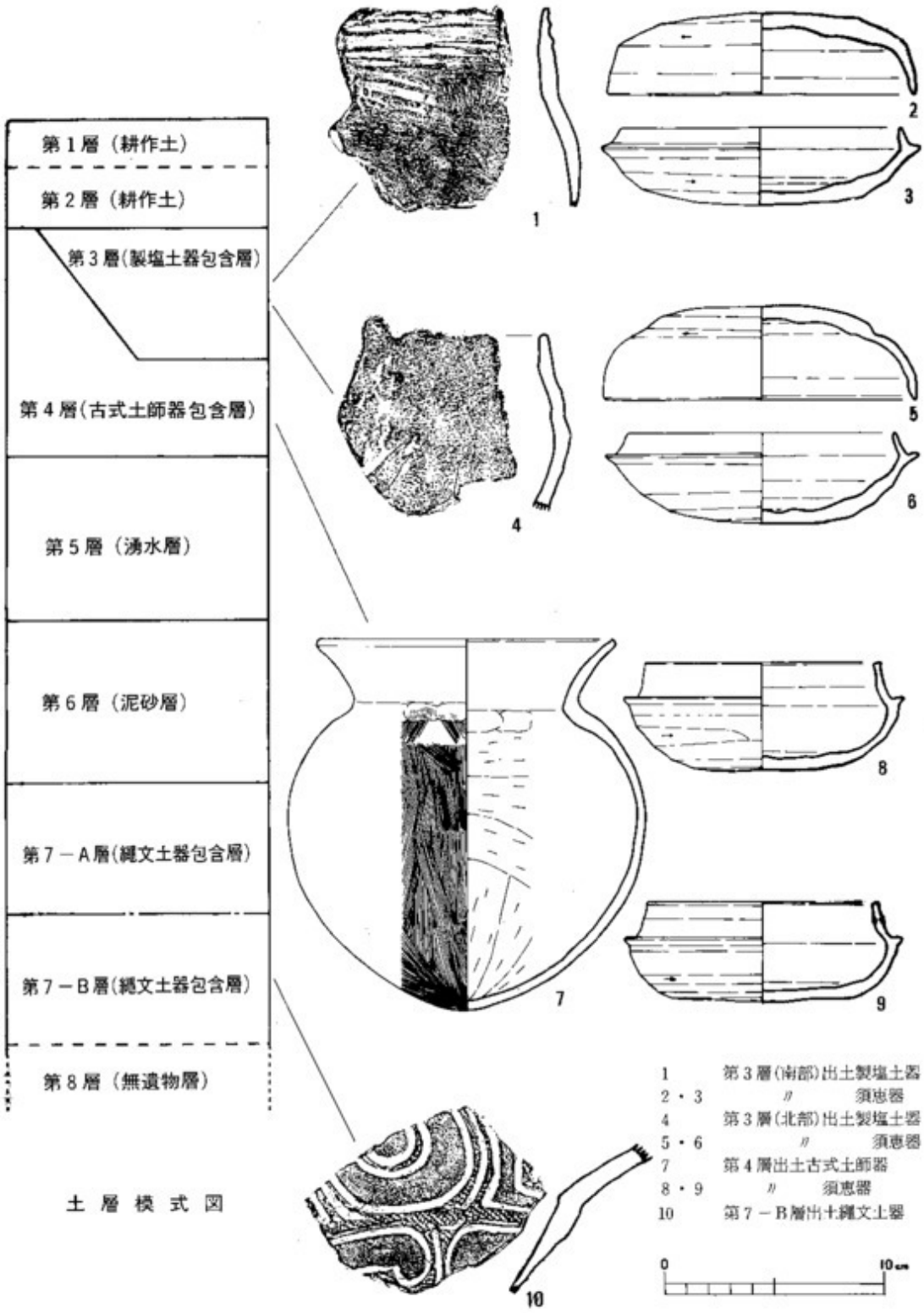
② 縄文土器の包含層を4本の東西トレンチ（36・41・44・47列）のいずれにおいても確認した。

③ 古式土師器包含層（須恵器を含む）から比較的良好な遺物を抽出し得た。

④ 粘土土坑7基を検出して，大浦浜の製塩活動の解明に1つの資料を提供できた。

なお，粘土土坑7基については，その重要性を考え，保存に向けて検討した結果，幸い地権者の十分な了解も得られ，木枠囲いで埋め戻す保存措置を構じた。　（林）

(註) 1・2・3「大浦浜遺跡」香川県教育委員会『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報』1982．3



第2図　土層序と遺物出土状況図

第3図　製塩土器包含層の広がり

第4図　粘土土坑（SX8301～05）

ヤ ケ ヤ マ 遺 跡

1．調査の経過

瀬戸大橋架橋にともなう埋蔵文化財の予備調査が昭和51年10月より，ヤケヤマ遺跡において実施された。その結果丘陵の尾根平坦部に旧石器の散布が認められ，また南麓平坦部では中世の遺物・落ち込み状遺構が確認され，周辺に遺構が残存している可能性が高いと考えられた。

香川県教育委員会はこの成果をふまえて昭和57年４月26日より６月４日まで調査をおこなった。調査対象面積は4700m²，うち発掘面積は622m²である。

2．調査の概要

ヤケヤマ遺跡は櫃石島のほぼ中央部に位置しており，花見山から派生した山塊の一つで標高15～22mの丘陵である。

調査地区は，地形より尾根平坦部・南斜面部・南麓平坦部に分けて区画設定した。調査は，予備調査の結果から，次の２点に重点をおいて実施した。

① 尾根平坦部に散布する旧石器の出土状態を把握すること。

② 南麓平坦部での遺構の有無を確認すること。

第１図　ヤケヤマ遺跡作業風景

3．土層と遺物の出土状況

今回の発掘調査の土層序は，各調査地区により若干異なるが基本的には第1層表土層，第2層茶褐色砂質土層，第3層茶褐色花崗岩バイラン土層（地山層）の3層に区分できる。ただ南斜面部のR—56・57区及び南麓平坦部は，大浦浜やヤケヤマ東麓地区に向かって急激な傾斜で落ちているため土層は若干異なるが，基本的には上記の3層と考えても妥当と思われる。

遺物は，主に第1・2層より出土している。ただ旧石器時代から現代に至る幅の広い時代の遺物が同一層より混在して出土しているため土層は攪乱している可能性が強い。

4．遺構について

尾根平坦部・南斜面部の調査区では，遺構と認められるものはなかった。南麓平坦部は予備調査で落ち込み状遺構を確認したトレンチを今回さらに拡張して調査したが，大浦浜やヤケヤマ東麓に向かって地形が傾斜していることによる落ち込みであり，人為的な意図をもって作られた遺構とは考えられなかった。

また，N—56区で土坑を検出した。埋土に焼土塊・灰を含んでいるのでこの土坑で火が使用されたと考えられるが，性格については不明である。

5．主な遺物

出土した遺物は，旧石器時代の遺物をはじめとし近・現代の陶器までを含む。主たる遺物はナイフ形石器・横長剝片・同石核，縦長剝片・同石核，細石刃，尖頭器，チョッピング・トゥール，スクレイパー，二次調整ある剝片，石鏃，縄文土器，土師器，須恵器，瓦器椀，輸入磁器，土錘，円板状土製品，近・現代陶磁器などの石器・土器類である。

旧石器の遺物は，尾根平坦部に総点数の90％以上が集中して出土している。その石材はサヌカイトが大半を占めており，他にハリ質安山岩，チャートが若干出土している。

他の遺跡と比較すると遺物は少ないが，横長剝片・縦長剝片ともに占める比率が高く，他遺跡の性格と関連させて考えると興味深いものがある。

土器類の大半が細片で，第1層から検出されている。

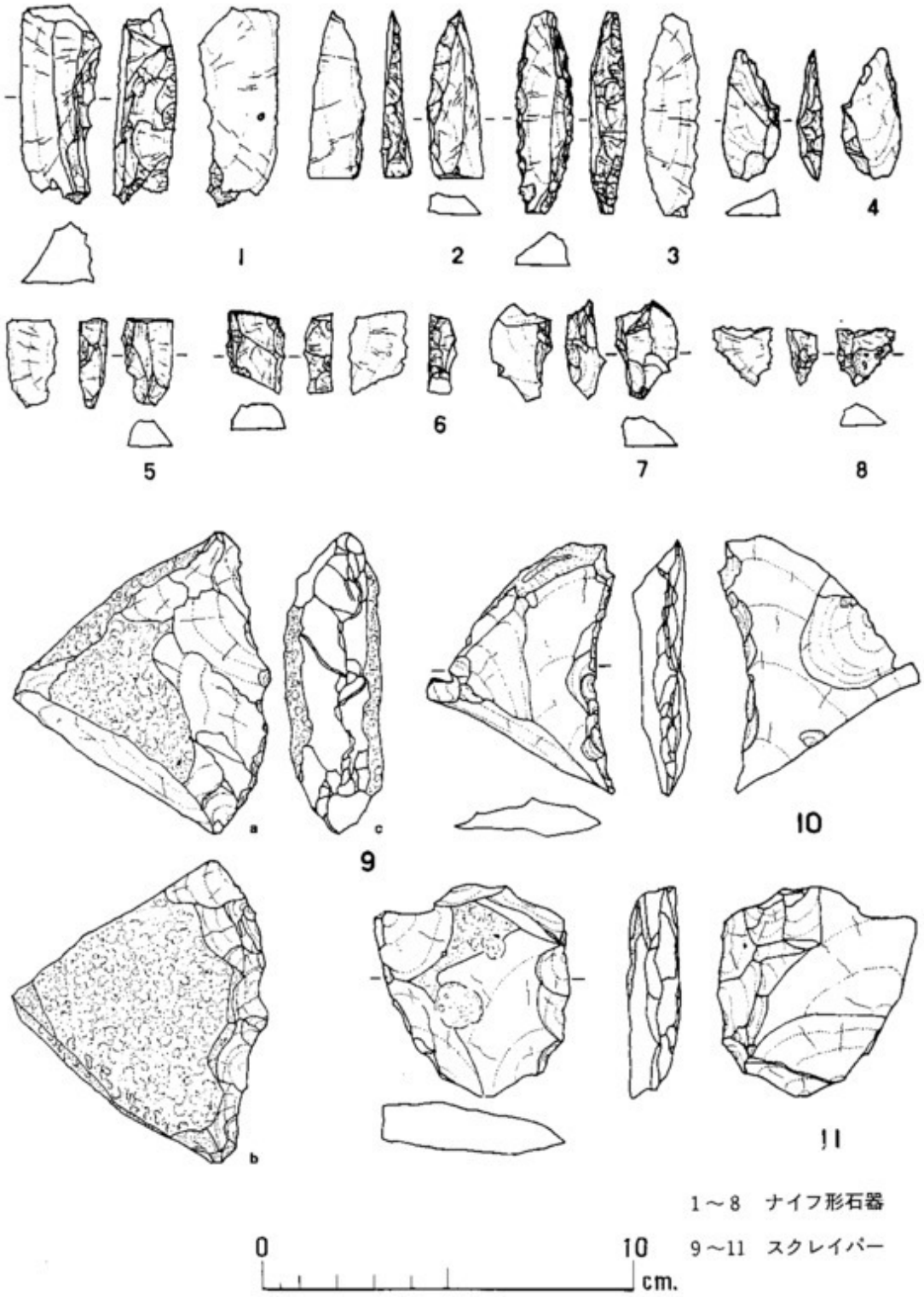
6．おわりに

本遺跡の特徴をまとめると次の2点となる。

① 旧石器の遺物は尾根平坦部に90％以上出土しているという点から散布する範囲がこの地区に限られること。

② 遺構が期待された南麓平坦部からは，土坑が1基検出されたが性格が不明である。なお，他に目立った遺構は確認できず，予備調査の際検出した落ち込みも，人為的な遺構とは考えられない。

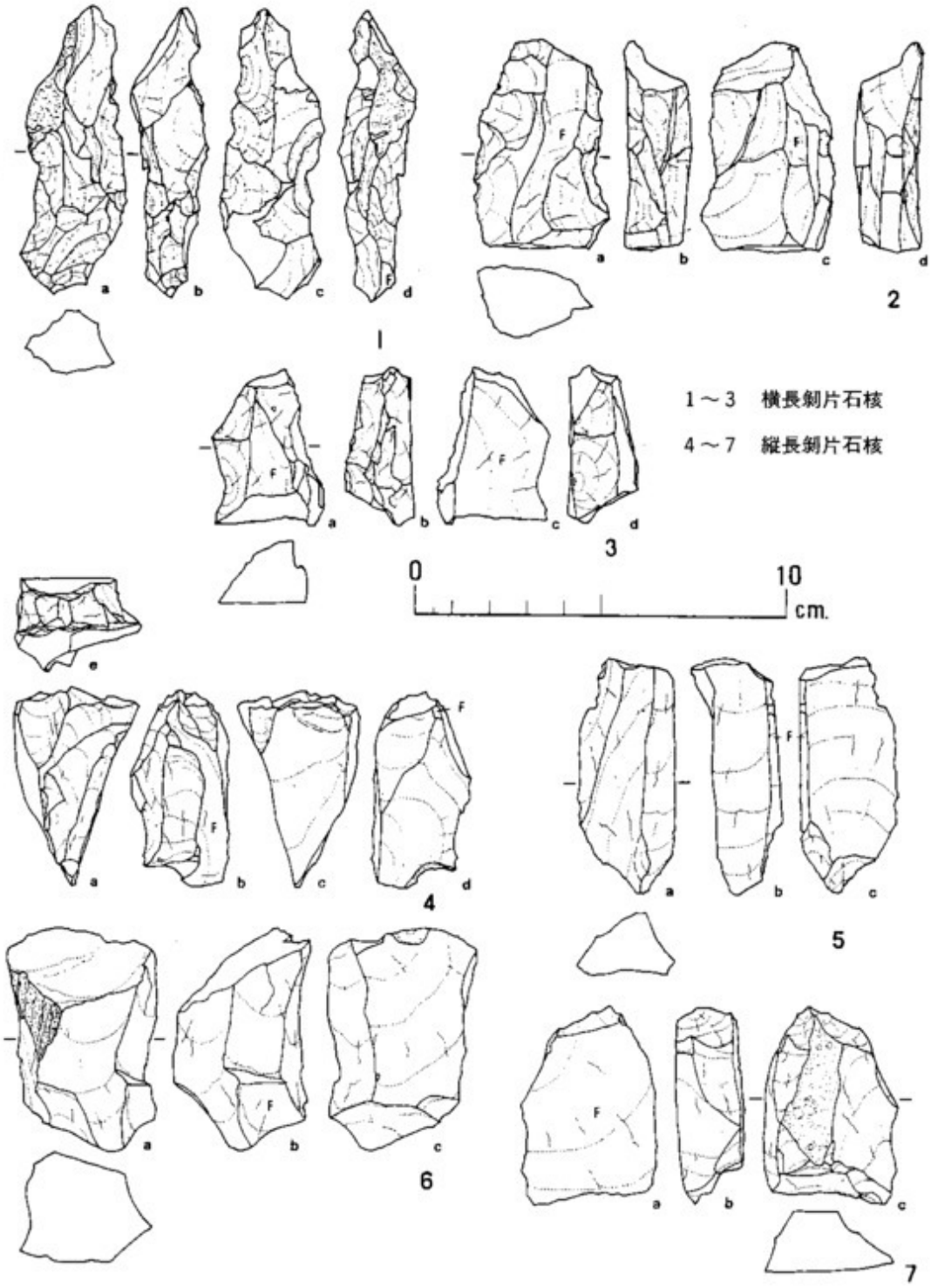
（田村）



1～8　ナイフ形石器

9～11　スクレイパー

第2図　ヤケヤマ遺跡出土遺物実測図



第3図　ヤケヤマ遺跡出土石器

長崎通り遺跡

1．立地と調査の方法

長崎通り遺跡は，櫃石島南端に嘴状にのびる尾根の頂部に立地する。尾根筋（標高20～25m）の両側は，急崖をなして海岸に至る。尾根上には，「櫃岩」と呼ばれる巨岩や「島内十七番札所」があり，島民の信仰を受けている。この付近は，以前から旧石器散布地として知られており，昭和52年の予備調査では，標高24～25mの高台付近が遺物集中箇所として注目された。今回の調査は，5月28日から9月17日まで行われた。調査は，尾根筋にそって主軸線をもうけ，5×5mのグリッドを南から北へ連らね，途中の「高台地区」は，東西方向にふくらませる形にグリッドを新たに設定して全面発掘を行った。なお，本調査区域に連続する「櫃岩周辺地区」と「南東斜面部地区」にもグリッドを設定した。発掘は，層位ごとに順次掘り下げ，第1層は検土にかけ，第2層以下は逐次，遺物を取り上げていくという方法で行った。従って，遺物出土地点の平面的位置・レベルの実測等を行うという方法は採っていない。

第1図

2．土層と遺物出土状況

土層は，土壌の種類によって3層に分類される。第1層は，腐植土で，この層から全石器の約1/4が出土した。第2層は，花崗岩のマサが風化をうけて土壌化した層である。全石器の約3/4が出土した。第3層は，いわゆる地山で遺物を含まない。第2層のうち，古墳の石室築造や作物栽培によって攪乱が明らかな部分がある。一方，岩脈や岩塊の存在から高台地区などには，攪乱は及んでいないと判断されている。

平面的には，高台地区での遺物集中が確認され（20m²当りの石器出土点数が，高台地区は51.1個，他地区は19.0個となる），さらに，同地区の中でも大きく2箇所に密集地区があることが明らかにされた。また，石器の種類ごとの集中地区をみると，微妙に地区が相異している。横長剥片を例として，その密集地区ごとの垂直的な遺物出土状況を観察すると，すべての地区で第2層中位からその地区の出土石器の90％以上が出土している。この結果は，密集地区である高台地区に攪乱が及んでいないことを前提とするならば，それは，旧石器時代においてなされた集中状態の反映した姿であるとも推測されている。

3．出土遺物

調査面積1070m²から2056点の石器が出土した。石器の種類ごとの出土点数は，表Ⅰのとおりである。

ナイフ形石器は，黒曜石製のものが2点，それ以外はサヌカイト製で，また，横長剝片を素材とするものがほとんどである。従来，刃部に調整加工がみられるものを一括して1型式としていたが，今回は，刃部への調整加工の有無にかかわらず，いわゆる「切り出し状のナイフ」を意識して成形されているものを1つの型式として一括し，6型式に分類した。典型的な「国府型ナイフ形石器」は，相対的に少ない。これは，横長剝片・同石核の分類で瀬戸内技法を示すものが，少ないという結果と相応するようである。

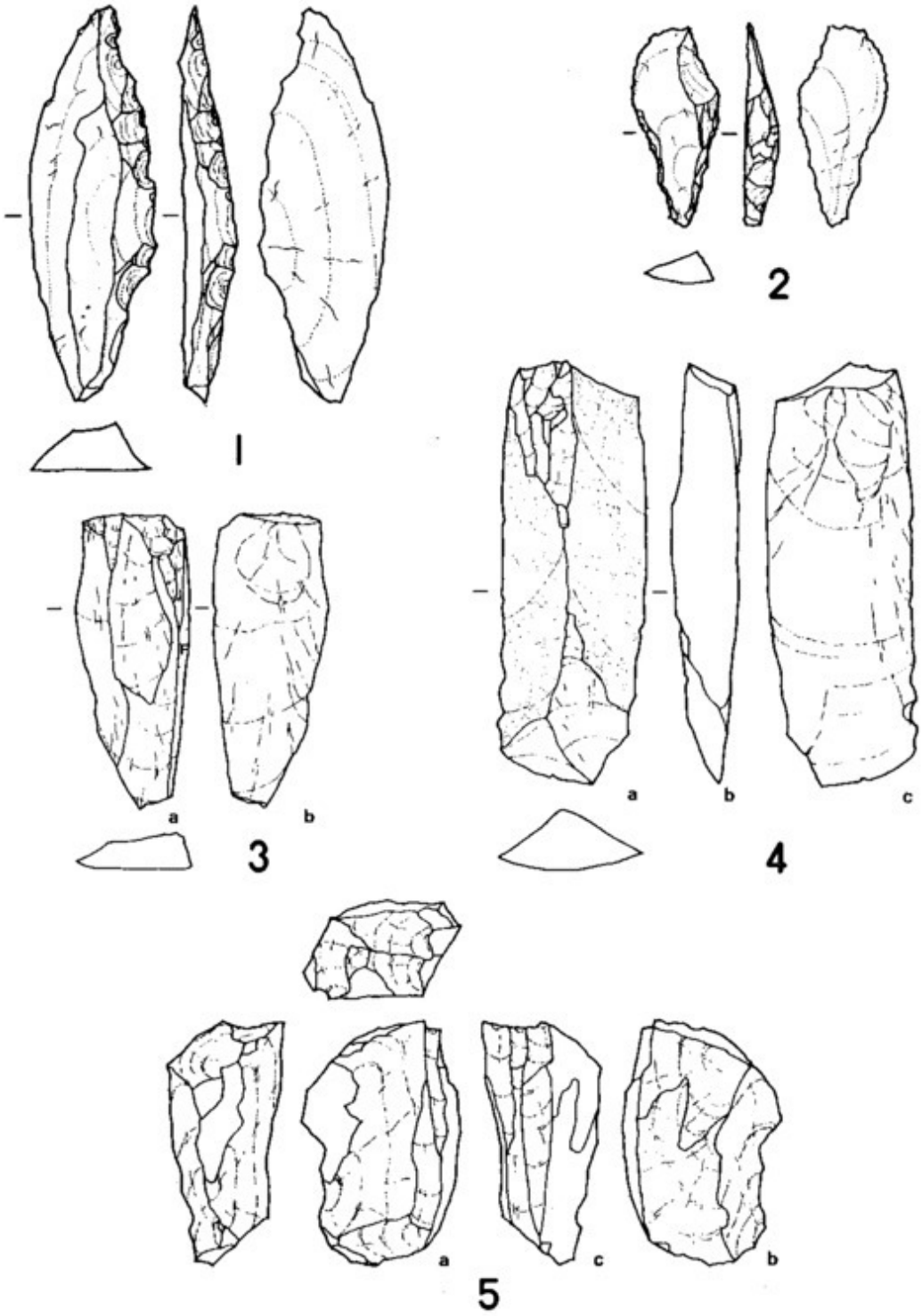
縦長剝片・同石核は，ともに風化が強い白色のサヌカイト製のものが圧倒的に多い。縦長剝片は，長幅比とフラットな面の在り方から2種に分けられる。一つは，相対的に幅広で，1ないし2のフラットな面が主要剝離面と鋭角に接している場合，二つは，相対的に縦長で，2のフラットな面が等間隔に向い合う位置にある場合である。さらに剝離技術の面から，前者は不定形な石核に対してその鈍角をつくる2面を剝片の側面としてそのまま利用する方法により，後者は板状石核の小口面を剝離する方法により得られたものというように分類している。

細石刃・同核ともにハリ質安山岩製のものが大半を占めている。出土数は，相対的に少量である。しかし，縦長剝片・同石核とともに出土している点は，旧石器時代終末期の遺跡と考えられている大浦遺跡と類似している。一方，細石刃・同核の少なさは，大浦遺跡との時期差を示唆しているものと考えられる。

種類	小計
ナイフ形石器	45(2.2)
舟底形石器	1(0.1)
尖頭器	26(1.3)
スクレイパー	22(1.1)
石鏃	4(0.2)
ドリル	1(0.1)
叩き石	5(0.2)
横長剝片石核	115(5.6)
横長剝片	649(31.6)
縦長剝片石核	31(1.5)
縦長剝片	130(6.3)
二次調整剝片	7(0.3)
チップ	829(40.3)
細石刃核	13(0.6)
細石刃	13(0.6)
細石刃核未製品	8(0.4)
ヒリ質安山岩剝片	113(5.5)
黒曜剝片	2(0.1)
異石材	42(2.0)
計	2,056

表1，種類別出土点数

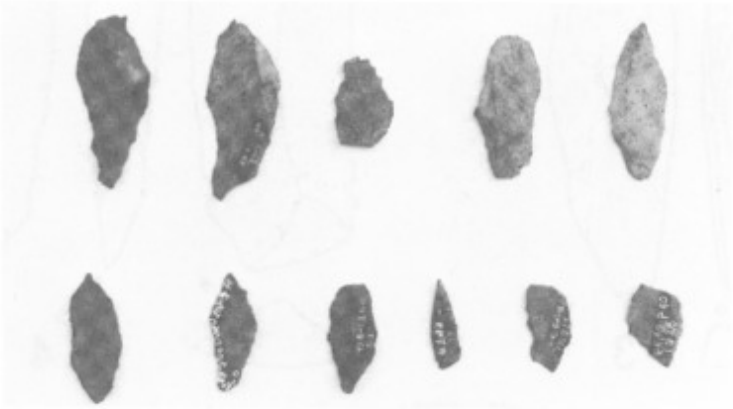
出土石器総数は，同島の花見山遺跡の約1/10，大浦遺跡の約1/5で非常に少ない。このことは，この2遺跡のように規模の大きいキャンプ地として位置づけることは困難である。しかし，段階を経るにしたがい，キャンプ地が移動していることを前提にするならば，細石刃・同核の出土状態から，その時期の位置づけも可能ではないかと考えられる。 (林)



1は「国府型ナイフ形石器」(1/3), 2は「切り出し状のナイフ形石器」(1/3), 3・4は縦長剥片 (1/3), 5は細石刃核 (1/1) である。

第2図

ナイフ型石器①類（背面）



ナイフ型石器⑤類（背面）

縦長剝片（腹面）

第３図

長　崎　古　墳

1．調査の経過

瀬戸大橋架橋に伴う事前調査として実施された。調査地区は長崎通り遺跡に隣接するところで，地表面には古墳の隆起が認められていなかったが古墳の石室用材と思われる石が散乱することから古墳の存在が推定されていた。

2．立地と環境

長崎古墳は坂出市櫃石島字長崎通りに所在する。櫃石島の南に伸びる標高約25mの平坦な尾根上に旧石器散布地として知られる長崎通り遺跡が立地している。この尾根筋中心より若かに東に移る緩傾斜面上に本古墳は位置している。東方には，箱式石棺を埋葬施設とする古墳群のある歩渡島が近接している。

3．遺跡の概要

第1層から第3層は近世までの攪乱層である。第4層で古墳周溝と石室掘り方を検出した。

墳丘は周辺部を含めて近世までの開墾によって地下げ，削平されたと思われ，その隆起を認めることができなかった。墳丘西半部はすでに基底部まで削平されている。尾根傾斜面にかかる墳丘東半部は緩傾斜を呈する地山に黒褐色砂質土・黄褐色砂粒が盛り土されているが，その状態には規則性がみられない。周溝は古墳西側を画する半円形を呈するもので幅約80～180cmである。断面はゆるやかなU字型を呈しており，地山を掘り込んで設けられている。

埋葬施設は横穴式石室を内部主体としており，石室内には箱式石棺が遺存していた。石室主軸はS—29°30′—Eであり，ほぼ東南方向に開口している。石室は玄室長292×162cm，羨道は長さ104cm，幅は遺存している部分で幅88cmである。また玄門附近の羨道部に不規則な状態ではあるが閉塞石と考えられる石積みが認められた。石室用材は花崗岩系のものである。石室構築のための掘り方は地山に掘り込まれており，東西288cm，南北480cmを測る。玄室基底石をすえるために掘り方直下に幅30cm程度の溝を「コの字」形にめぐらしている。基底石は厚さ20cmほどの石材を立てて用い，二段目より上段は平積みしている。

石棺は遺存状況が良好でないが，現存する石室東半部の石棺は両長側壁石と床面南半部が検出されており，長184cm×53cmである。石室中心線よりやや東方で石室主軸と平行して検出された2枚の立石は石棺の長側石と考えられ，これに直交する状態で長側石北端に近接して東西に伸びる石列が認められている。これより2枚の立石を長側石として共有し，西半部にも石棺があったと考えられ，東半部の石棺と同様にもう一方に長側石があったものなのか，共有する長側石と短側石で埋葬施設をつくりだしたものかのいずれかであると思われる。

4．遺物について

遺物は石室内と周溝内でそれぞれ検出している。

石棺内南部の床面に接して土師器杯1，耳環1を検出している。土玉，水晶玉を石室内北半部で検出しており，散乱した状態ではあるがこの周辺にあったものと思われる。

羨道に向って西側の周溝内より土師器・須恵器を集中した状態で検出した。須恵器は，陶邑

石室内出土		周溝内出土	
金環	3	須恵器 杯蓋	14
碧玉製管玉	1	杯身	11
琥珀製平玉	1	高杯	1
丸玉	1	短頸壺	1
水晶製切子玉	2	䍦	1
算盤玉	1	横瓶	1
丸玉	1	壺	2
埋木製棗玉	6	土師器 壺	1
土製丸玉	65＋2	甑	1
鉄鏃	5		
刀子	2		
鉄釘あるいは鉸具	2		
土師器杯	1		

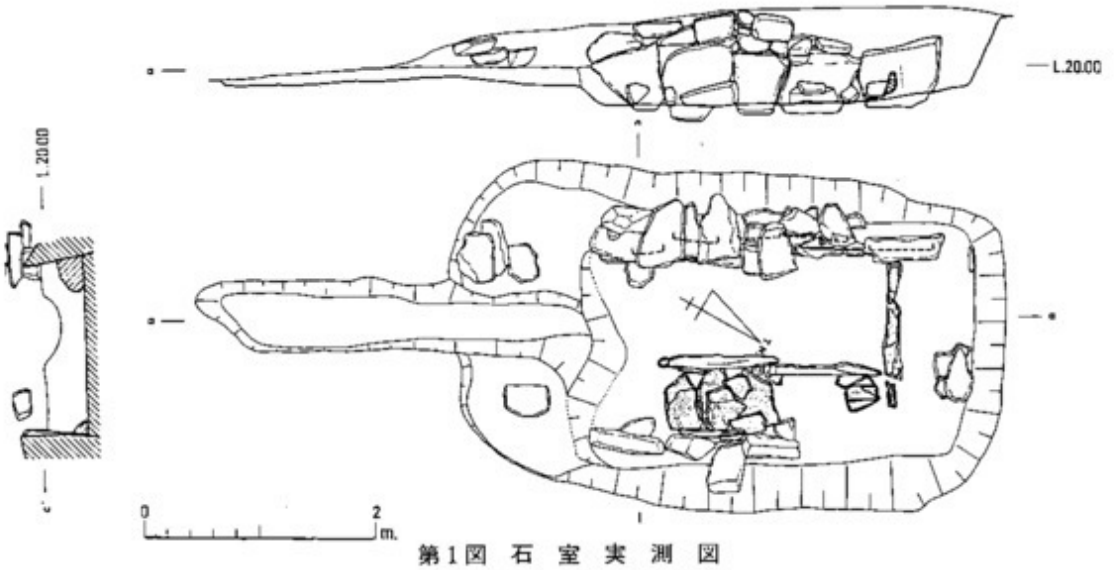
出土遺物一覧表

編年のII—3型式からII—4型式に併行するとおもわれる。

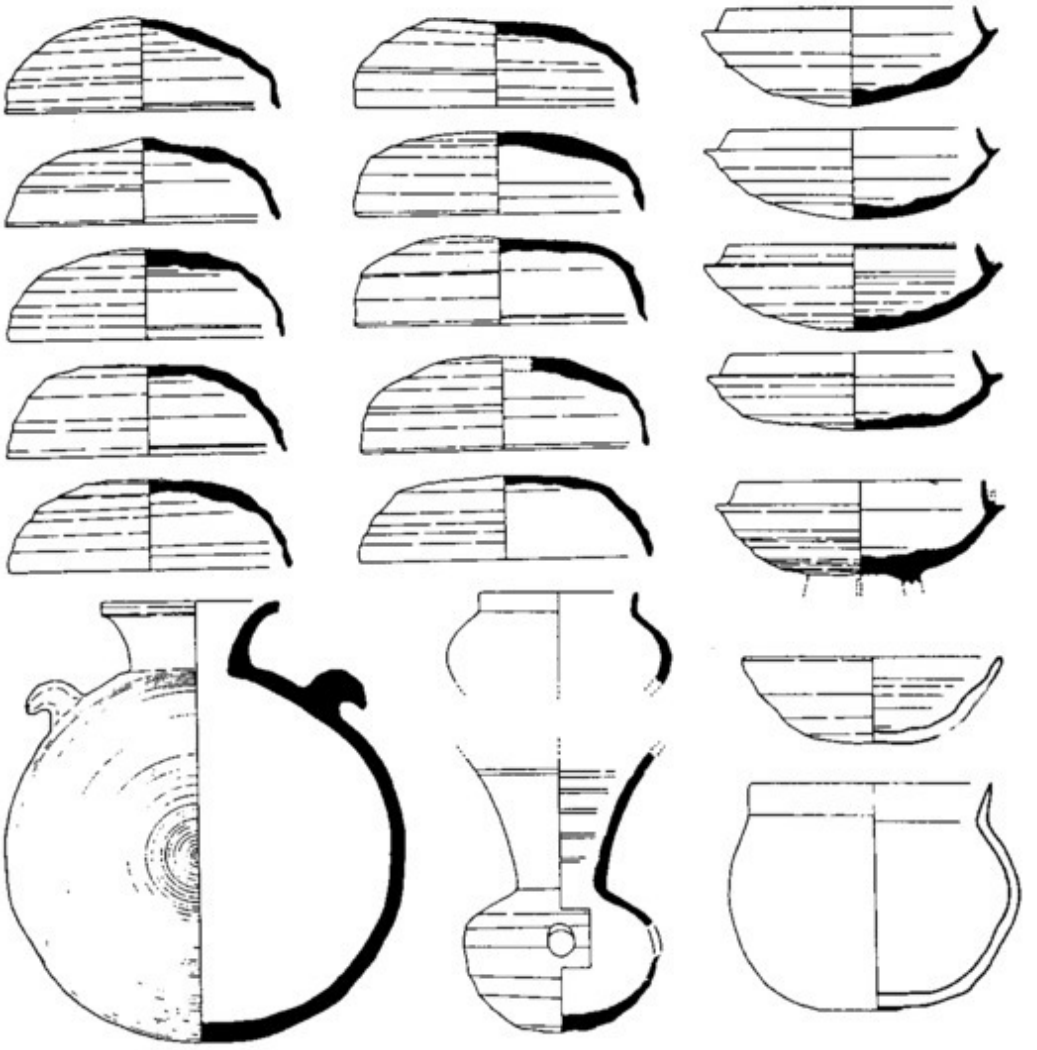
5．小結

長崎古墳は，周溝をもつ径約8mの円墳である。横穴式石室を内部主体としており，玄室内には一棺以上の箱式石棺をもっている。玄室は羨道より約0.2m下部につくられており，長約2.92m，羨道長約1.04mを測り，羨道は極めて短いものである。

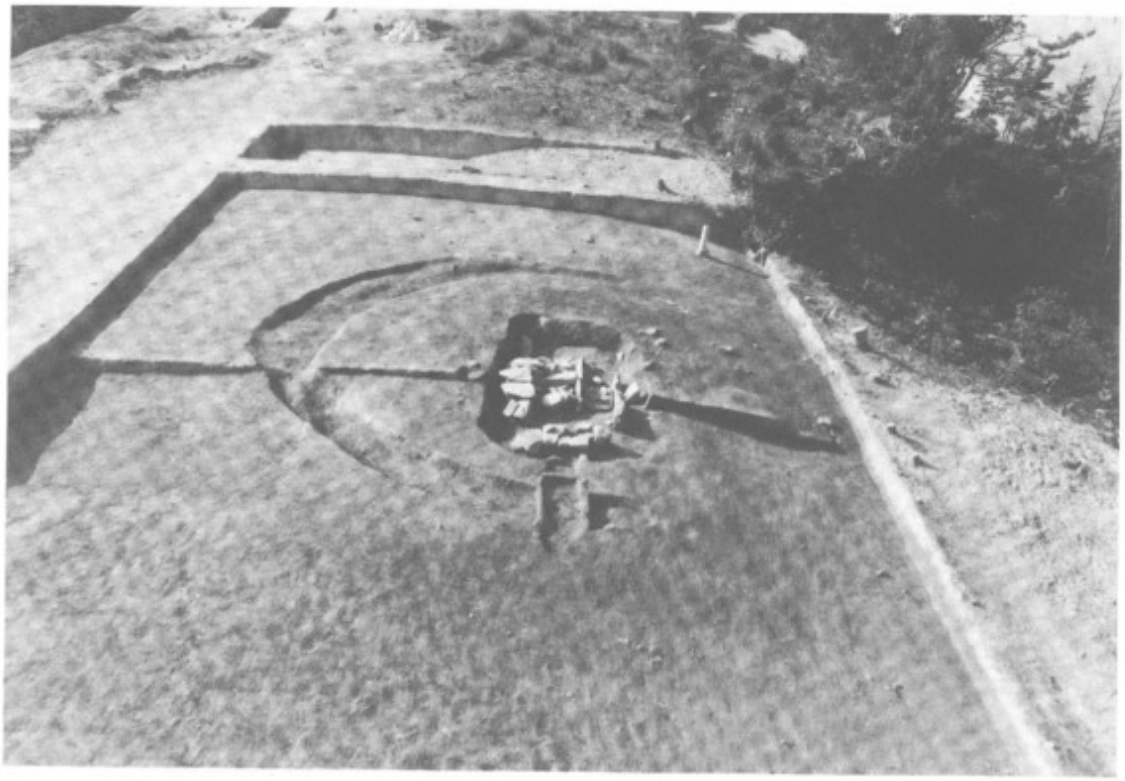
本古墳の築造年代は，埋葬施設，遺物等から，6世紀中葉頃と考えられる。　　（坂口）



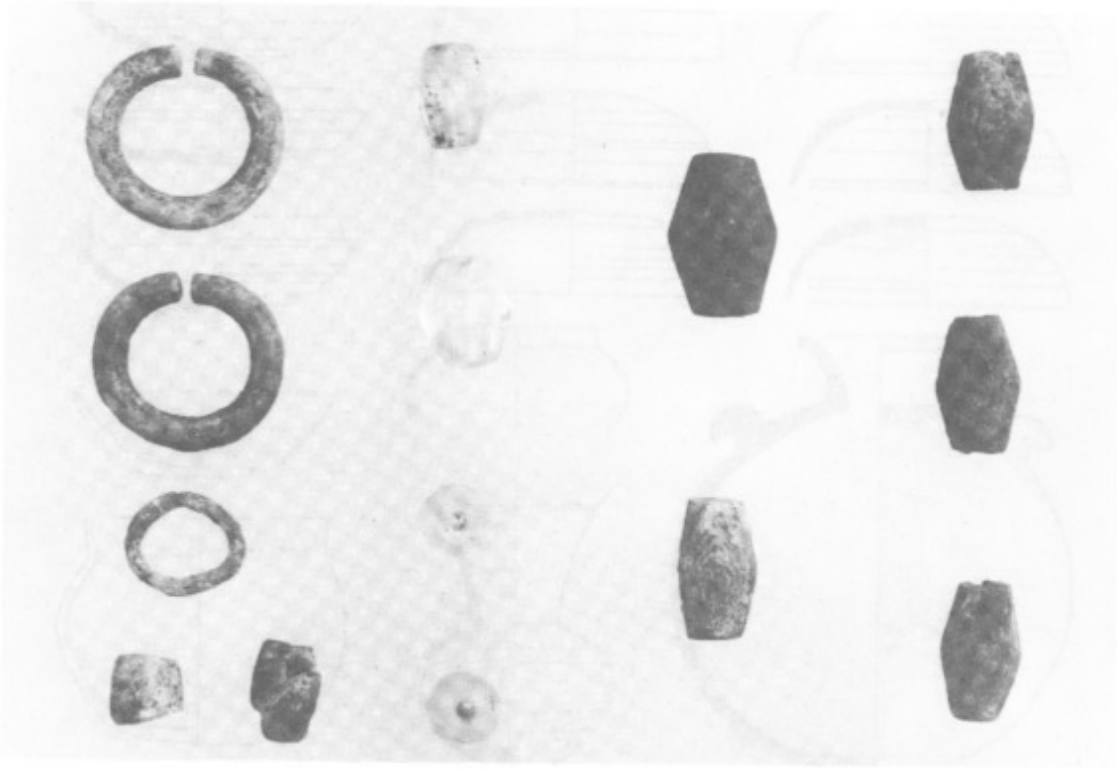
第1図 石 室 実 測 図



第2図 土 器 実 測 図



第3図　長崎古墳全景



第4図　装　身　具

初　田　遺　跡

1．調査の経過

岩黒島は坂出市沖約10kmに位置し，塩飽諸島に属する。昭和52年度に初田神社の西南部を中心に２ｍ×２ｍのトレンチを10箇所設定して計40m²の予備調査を実施した結果，旧石器時代の遺物の散布地と確認された。今回の調査は瀬戸大橋本工事対象地域・瀬戸大橋に対する進入路である昇降道部分・工事予定地内の初田神社移転予定地を合わせて最終的には5036m²が調査対象面積となり，実質発掘面積は678m²であった。これは調査対象面積の約13.5％にあたるものである。

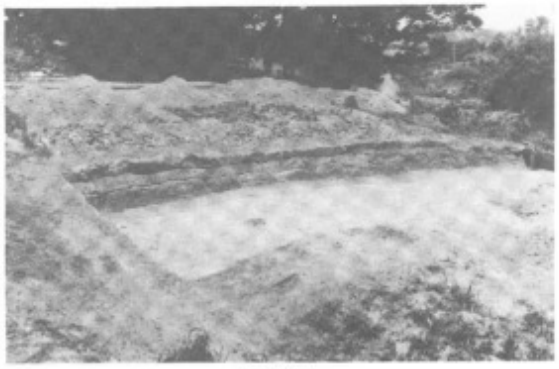
2．調査の概要

備讃瀬戸の島々に立地する旧石器時代の遺跡は，他の島々でも確認されている様に丘陵の尾根筋を中心としている。このことより今回の岩黒島の調査においても尾根筋を中心に調査区を設定した。調査区は最高所でも海抜29ｍをはかる尾根筋に３地区を分割し，初田神社の南部をＡ地区，北部をＢ地区とし，初田神社の東部にあたる神社移転予定地とそこからの北側斜面部を合わせてＣ地区とした。４ｍ×４ｍを一単位として調査を実施した結果，実質発掘面積はＡ地区（380m²）・Ｂ地区（184m²）・Ｃ地区（114m²）であった。

3．土層について

備讃瀬戸の島々は基盤が花崗岩で形成されており，その丘陵尾根筋に立地する旧石器時代の遺跡では，花崗岩の風化バイラン土層中に遺物は含まれる。岩黒島初田遺跡も基本的には他の

第２図



第３図

島々の旧石器時代の遺跡と同様である。初田遺跡A地区では与島・羽佐島と共通した花崗岩が基盤となっており，B地区では尾根筋を中心に暗褐色を呈する粘質土層が地山層として広がっている。A地区の東部に位置するC地区の第1トレンチでは，灰白色を呈する土層が地山層となっており，第2・第3トレンチでは灰緑色を呈する土層が認められる。各地点によりその様相には差が生じている。

4．遺物の出土状況

「土層について」で触れた様に，各地区には異なった基盤層が分布しており，遺物包含層にも差が認められる。遺物が比較的まとまって出土したA地区は花崗岩の風化パイラン土層から遺物が出土している。しかしA地区で最も遺物の出土が期待された尾根筋は後世の削平が著しく，包含層は消失していた。B地区・C地区は遺物の散布も希薄であり，畑地化する際に削平を受けている。

5．主たる遺物

初田遺跡から出土した遺物は総数600点程である。主な旧石器時代の遺物はナイフ形石器・翼状剥片・横長剥片石核・縦長剥片・舟底形石器・細石刃・細石刃核などである。

① ナイフ形石器　国府型ナイフの条件を充たすものから断面が三角形を呈する大形と小形のもの・切り出し形を呈するものなどである。これらの大半はサヌカイト質で横長剥片を素材としたものである。

② 翼状剥片　底面の幅が先端と基部で異なる翼状剥片であり，主要剥離面の打点と主要なネガティブ面の打点が近接するものである。

③ 横長剥片石核　サヌカイトを素材とするもので，石核調整部と作業面が剥離角や剥離痕の形状から明確に分かれるものである。

④ 縦長剥片　いずれもサヌカイトを素材としたものであるが，白色に風化したものとややキメの荒いものとに分かれる。断面が三角形のものと台形状のものとがある。

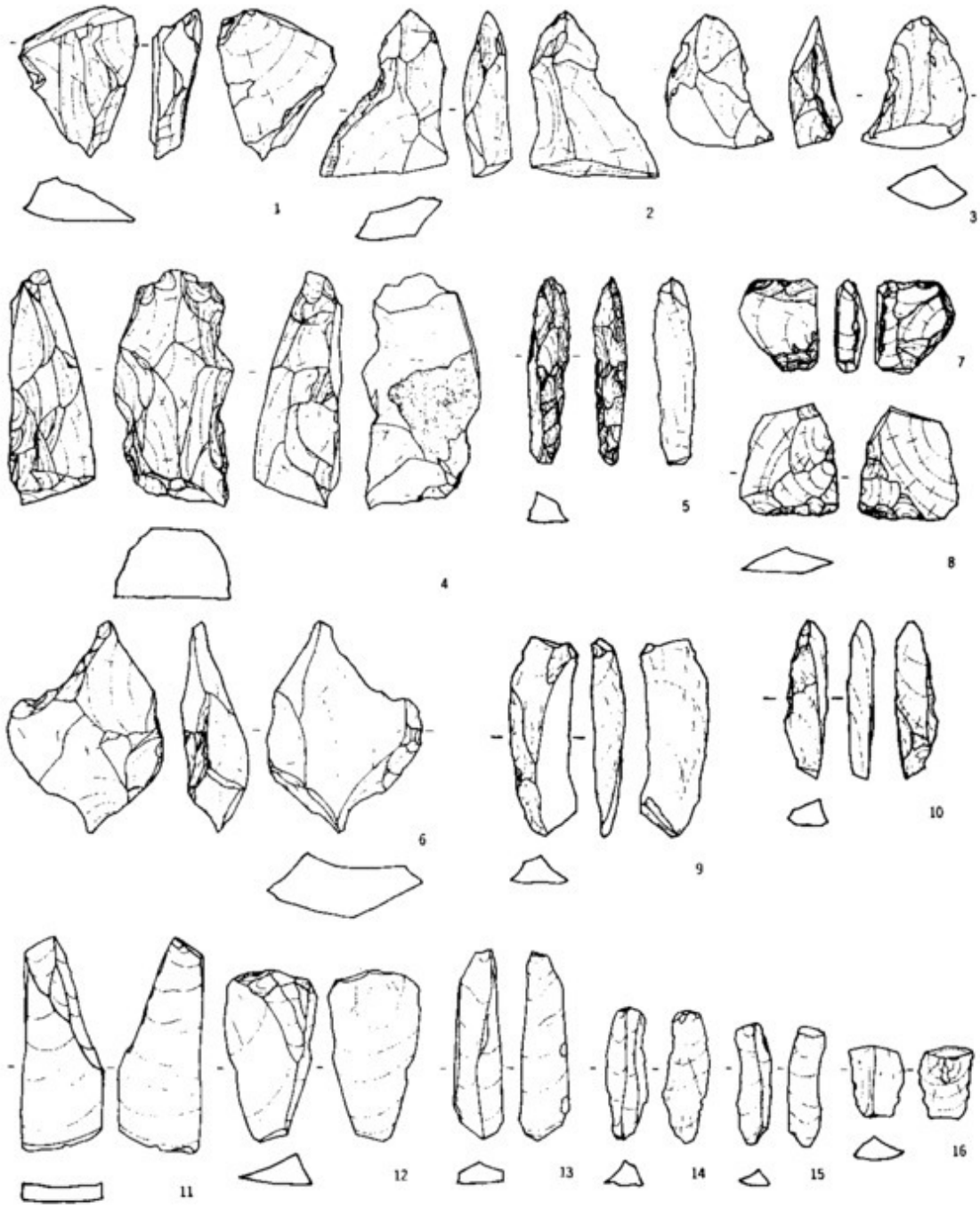
⑤ 舟底形石器　サヌカイトを石材としたものが2点出土しており，大形で断面が台形状を呈するものと小形の横長剥片を素材としたものである。

⑥ 細石刃・細石刃核　いずれも基部を尖らせるように調整したものであり，作業面の正面形は逆三角形もしくはそれに近い台形を呈している。打面は側面からの加撃によってネガティブな面で形成された例が一般的であるが，一部側面から細かい調整を加えたものもある。

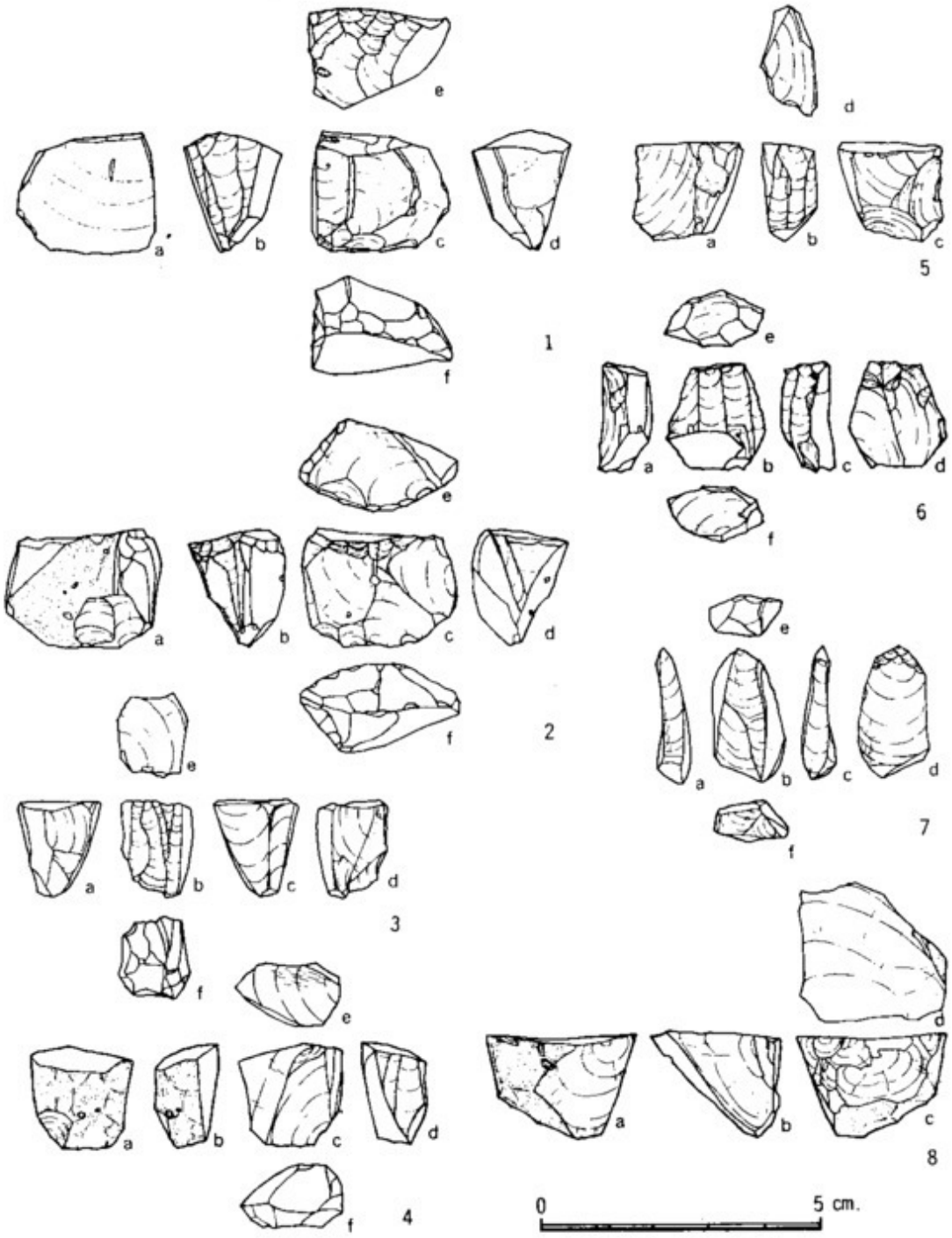
6．まとめ

岩黒島初田遺跡においては旧石器時代の遺物が希薄なことは予備調査の結果からある程度予測されていた。しかし予備調査以後，備讃瀬戸に属する与島・羽佐島・櫃石島において本調査が実施され，旧石器時代の遺跡の内容が判明してきた。調査の結果これらの島々の各遺跡からは非常に狭い範囲において，層位が分割されることなく限定された箇所から，異常な密集度で遺物が出土している。このことから，石器製作の際生じるユニットなどの同時期性を有した石

器群が異常に重複していると思われる。そこで初田遺跡の調査は石器群が重複しない単一時期の一つのまとまりを検出するという目的をもって実施された。初田遺跡は備讃瀬戸の他の島々の遺跡とは異なった様相を呈している。今後の研究に期待したい。詳しくは『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報IV』1983年を参照されたい。　　(中本)



第4図



第5図

青ノ山宇多津5号墳

1．調査の経過

宇多津町青ノ山山頂部の保存整備事業の一環として，本墳の発掘調査が行われた。調査は，宇多津町教育委員会が主体となり，香川県教育委員会文化行政課指導のもと，町内老人会有志や宇多津中学校生徒達の協力を得て実施された。保存のための事前調査という性格上，石室の精査が中心となった。

本墳は，かねてから盗掘の噂を耳にし，事実，玄室壁石の一部欠失がそれを裏付けていた。発掘によって石室内から検出された副葬遺物数も極少であった。

調査は酷暑8月3日より開始し，墳丘地形測量，石室の発掘，写真撮影，実測などを行った後，秋風の吹く10月5日に終了した。

第1図　青ノ山宇多津5号墳の位置（1：25,000）

現在，天井蓋石の架構，墳丘盛土の築成など，本墳の整備はほぼ終わりつつある。

2．遺跡の概要

土器川，金倉川によってはぐくまれてきた丸亀沖積平野は，古く弥生の昔から，人々の生活文化の舞台として栄えてきた。

丸亀平野の東はずれには，「讃岐富士」としてその秀麗な山容を田の面に映す標高421.9mの飯ノ山がある。

青ノ山は，飯ノ山の北方2km余り，目睫の間に聳える独立山塊である。標高224.5mを測り，東に大束川，西に土器川の両河川に挟まれ，山頂において丸亀市と宇多津町に2分される。

本墳は，境界線よりやや宇多津町側に位する標高188mの斜面上に築造された，横穴式石室を埋葬主体にもつ古墳である。

丸亀側・宇多津側併せて17基の古墳が確認されているが，丸亀側の吉岡神社古墳と墓地公園東古墳（ともに前期）を除いて，いずれも群集墳の盛行する後期に築造されたものである。中でも，本墳は最後尾に位する，いわゆる終末期の古墳と思われる。

3．遺　構

本墳は，急峻な斜面上に位置する。墳丘調査を実施していないので確かなことは言えないが，主体部下方に外護列石様弧状石列を検出したことから，本墳は円墳であろうと思われる。列石ラインを墳裾とすれば，径12mの円墳となる。

埋葬主体は，長軸を等高線とほぼ平行に，南に向かって開口する。平面ラインは，やや先開きの狭長な矩形を呈する無袖型横穴式石室である。形態から言って，古墳時代終末期に属するものと思われる。

石室の構築は大形の安山岩を用いてなされ，奥壁及び天井蓋石には巨石を配している。壁石は，内側に自然平坦面及び木口整形面を混淆使用し，間隙を小形安山岩割石で埋めている。

玄門部には小形安山岩を集石した閉塞施設が検出された。下方床面との間に土を挾み，石直下に硬化粘土層を見ることから，追葬後に閉塞が行われたものと思われる。

床面からは，部分的に敷石が検出された。小形安山岩を使用している。残存部は緻密に敷きつめられているが，盗掘により大半が消失しているのは惜しまれる。

天井蓋石は一部石室内に落下をみるほかは取り除かれ，石室周囲に散乱していた。安山岩巨石を使用している。

4．遺物の出土状況

本墳は盗掘の形跡顕著で，遺物の残存状況極めて悪い。中でも，玉類を始めとする装身具は，銀環1点を除いて皆無である。副葬品以外の遺物である鉄釘や人骨が比較的多く出土したのが目をひく程度である。

遺物は玄室，羨道の双方から出土した。玄室からは，須恵器杯蓋1・耳環1・鉄釘と人骨が十数片検出された。また，羨道部からは，須恵器杯蓋（完形の分離した状態）と小片が数点出土したのみである。

遺物の出土位置は，玄室床面上がほとんどであるが，そこここに存在し，配置に規則性がみられない。盗掘による攪乱を物語っている。

5．遺　物

ア．須恵器

杯蓋2点と小片数点のみである。杯蓋は，7世紀中葉と思われる宝珠様つまみを有する小型のものと，7世紀末と思われる扁平擬宝珠様つまみをもつ口径15.5cmの大型蓋である。器表には，ともに回転ナデ調整が施されている。時期差をもつことから，追葬が考慮される。

イ．耳環

中空の銅管の上に銀を鍍金している銀環である。外径2.1cmを計る。本品1個のみである。

ウ．鉄釘

多数検出された。断面四角形を特徴とする。銹化著しく，極めて脆い。木棺接合用に使用されていたものと思われる。

エ．人骨

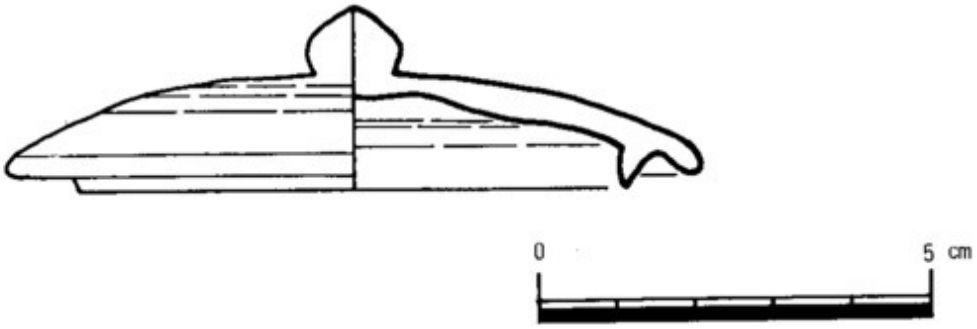
玄室中央部やや奥壁寄りに，各部分離した状態で数片検出された。部位は，脛骨2，上膊骨1，大腿骨1，頭蓋骨数片及び肋骨である。一遺体物の公算が大。（香川県警察本部鑑識課の鑑定による。）

以上，遺物は僅少であるが，貴重な考古資料を提供した。

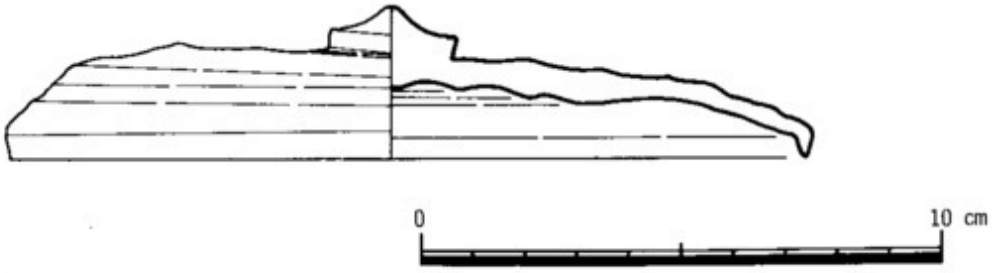
6．まとめ

本墳は，後期群集墳と目される青ノ山古墳群の中で，最新のものである。狭長な無袖型横穴式石室を埋葬主体とする。築造時期は，出土須恵器より推定して，7世紀中葉頃と思われる。以後，何回か追葬が行われ，石室は7世紀末まで使用されたようである。

ところで，被葬者に想いを馳せるとき，青ノ山の東西を流れる土器川・大東川両水系のうるおいに生活基盤を置く農耕集団の指導者層が浮かぶ。おそらく，彼らのうちの誰かが葬られたに相違ない。そして，埋葬後幾十年を経て，支配の流れをくむ同族後継者が追葬されたものと思われる。従って，家族墓的な色彩が匂う。（森本）



第2図　須恵器実測図(1)



第3図　須恵器実測図(2)

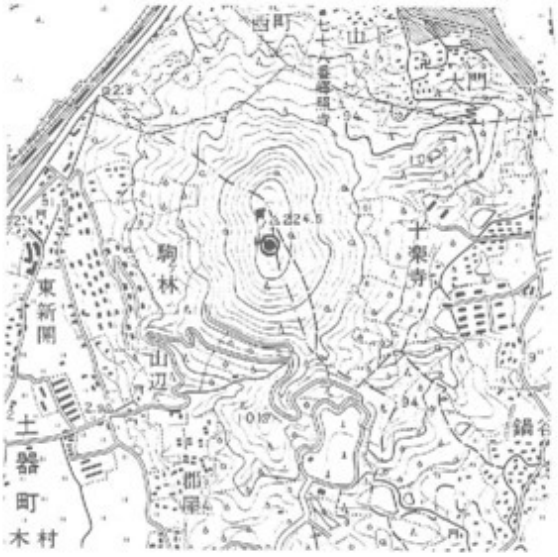
第4図　石室全景（南より）

第5図　玄門閉塞状況（玄室側より）

青ノ山８，９号墳

１．調査の経過

丸亀市は昭和56年から青ノ山山頂環境保全事業を推進し，昭和57年度には駐車場から山頂に至る遊歩道建設を計画している。その区域には，古墳２基が確認されていた。今回の調査は，将来，古墳公園の足がかりとなるように現地保存・整備を前提として実施された。当所は破壊の進行した９号墳を発掘調査し，８号墳は整備だけを，そして，多数の石が露出している９号墳の南ではトレンチ掘りで確認調査を実施するという計画をたてていた。しかし，諸理由により８号墳も発掘調査を実施することになった。調査は県教委の指導のもと，市教委が主体となり昭和57年５月10日から７月30日まで実施された。

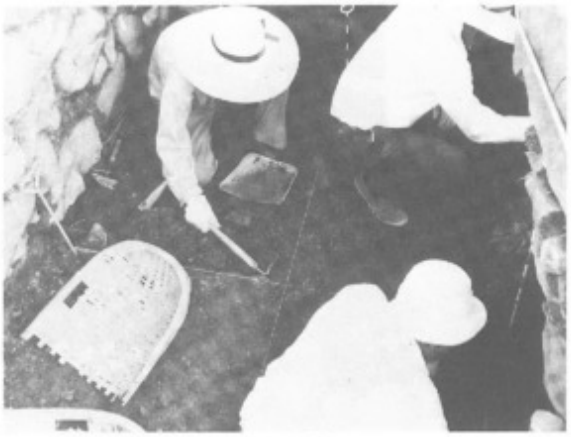


第１図

２．立地と環境

青ノ山は標高224.5mの独立峰で，丸亀平野の北東端に位置し，行政的には丸亀市と宇多津町にまたがっている。現在，青ノ山には約20基の古墳が確認され，古墳群を形成している。それらは１号墳以外ほとんど円墳で，横穴式石室を埋葬施設とする後期古墳により構成されている。また，山頂部（200～224.5m）と山裾部（20～50m）に立地区分でき，支群として把握することも可能であろう。山頂部には方墳の１号墳，今回発掘調査を実施した８・９号墳，終末期古墳と思われる宇多津４・５号墳が立地する。山裾北西部では，宝塚を中心として２基，山裾南部

第２図



第３図

では5号墳，巨石墳の7号墳(竜塚)，L字形石室を持つ6号墳がそれぞれ存在する。なお南裾部から派生した低丘陵には4世紀後半～末に築造されたと思われる前方後円墳の吉岡神社古墳が立地している。

3．8号墳について

8号墳は直径約15mの円墳で，西へ開口する片袖形（L字形）の横穴式石室を埋葬施設とする。石室規模は，玄室が奥行き2.1m，幅1.5m，高さ1.6m以上，羨道の長さ4m，幅1mを測る。すべて安山岩で構築され，羨道部では持ち送りがみられる。玄室床面では6石の棺台と敷石，及び須恵器を中心とする遺物を検出した。棺台は玄室の中央以東で3石2列に配したものである。埋葬に直接関わる木棺等の出土はなかったが，装身具の玉類金環などが南の方から出土したことから被葬者の埋葬状態を推察することができる。羨道と玄室の境には，長さ1.2m，高さ0.2mの仕切り石が存在する。遺物の多くがこの仕切り石を中心として出土している。即ち，仕切り石に接して玄室敷石上に提瓶，台付長頸壺，短頸壺，羨道部側に甕，小型壺が，少し離れた玄室敷石上に短頸壺，杯，直口壺，鉄鏃が出土している。それらの出土状況から仕切り石を中心とする玄室入口付近は被葬者へ何らかの儀式が挙行された場所であると推察できる。築造時期は遺物などから古墳時代後期（6世紀後半）と思われる。なお古墳調査の副産品として弥生土器（中期末）が数点出土した。青ノ山を高地性集落地と推定できる資料となろう。

第4図

第5図

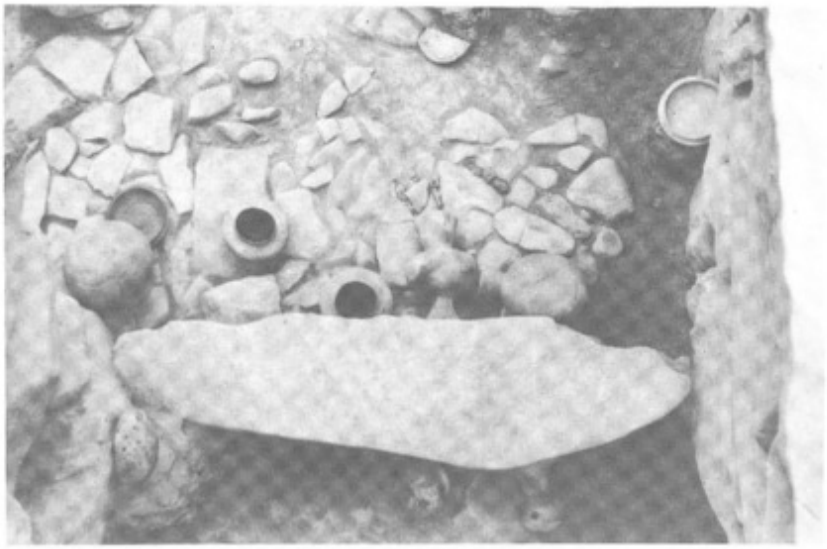
4．9号墳について

9号墳は緩斜面上に築造された直径12mの円墳で，横穴式石室を持つ古墳である。破壊が進み，奥壁と最下部の側壁（基底石）数個を残すだけであった。そのため石室の形態は不明である。玄室は奥行き2m，幅1mで，床面は削平した表面を叩きしめるだけのものであった。出土遺物が皆無であるため，築造時期は決定しかねるが，規模などから古墳時代後期～終末期と思われる。（東原）

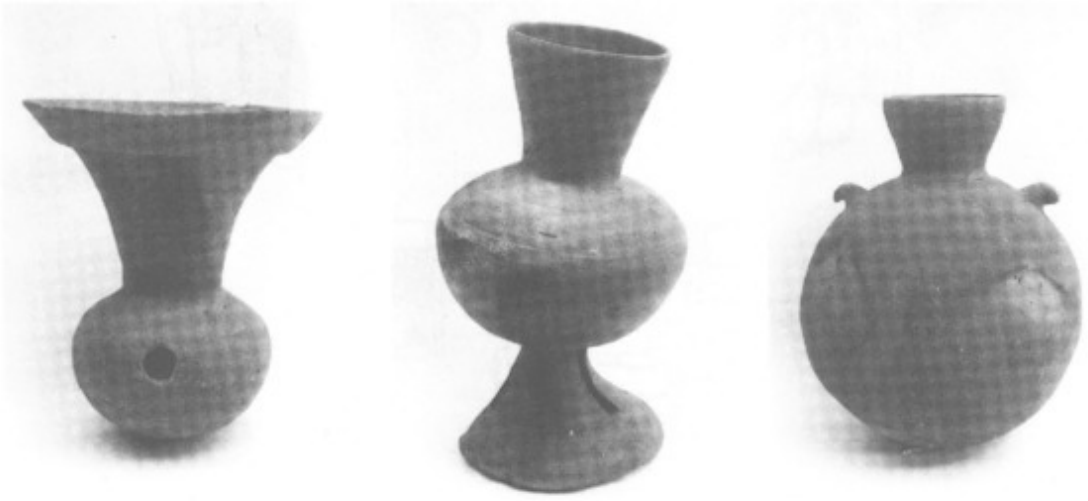
青ノ山8号墳
出土遺物一覧表

須恵器	
杯　蓋	7
杯　身	5
短頸壺	4
直口壺	1
台付長頸壺	1
提　瓶	1
甕	1
装身具	
金　環	1
管　玉	2
ガラス製臼玉	8
ガラス製小玉	5
鉄製品	
刀　子	2
鉄　鏃	数本
弥生土器	数片

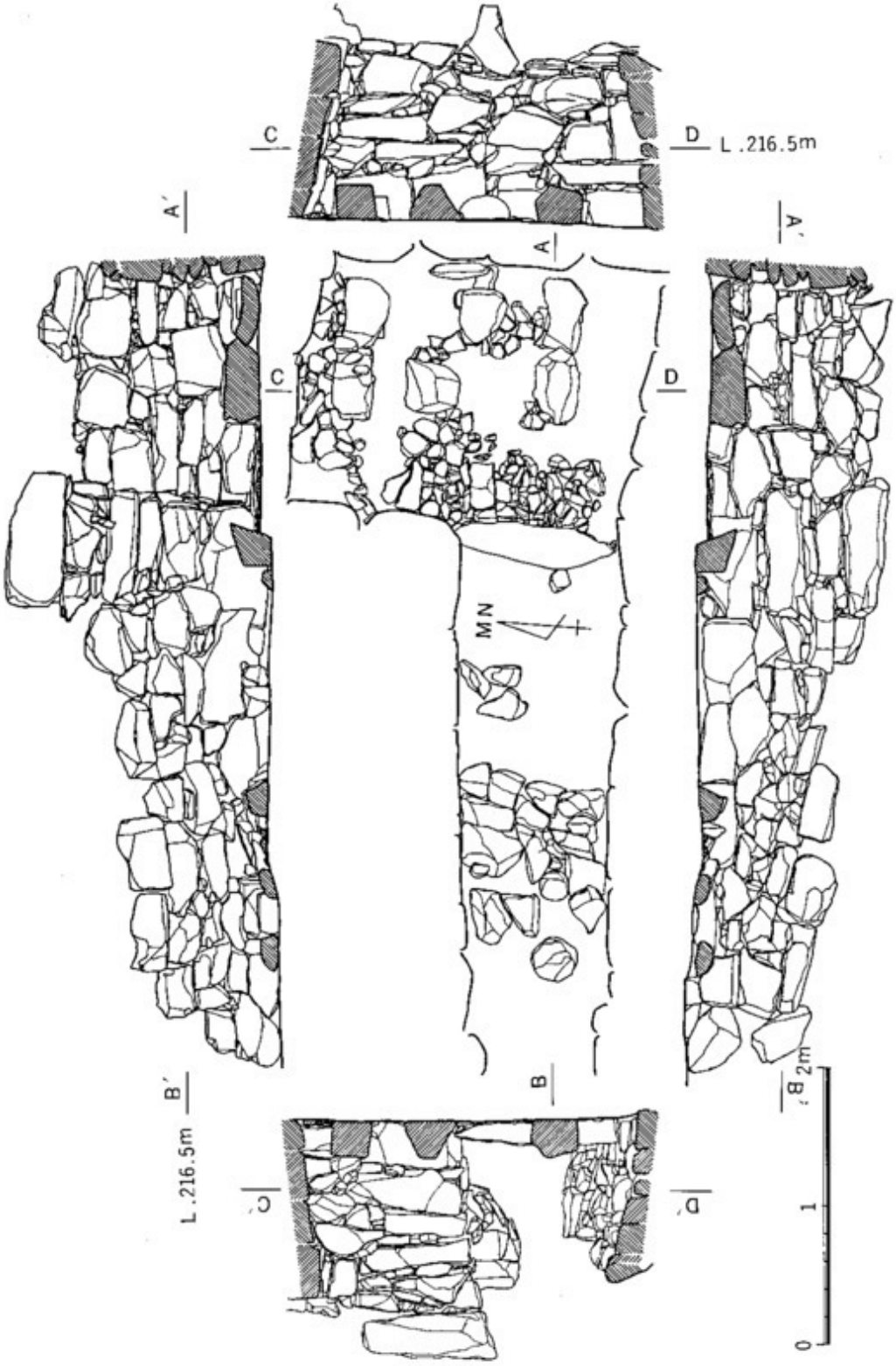
第6図



第7図



第8図



第9図　青ノ山8号墳石室実測図

多　度　郡　条　里

1．調査に至る経過

横断道建設に伴う埋蔵文化財の調査が開始されたのは，昭和46年の分布調査である。昭和48年には，その成果を公団に提示し，発掘調査が必要である旨を申し入れた。昭和51年に発掘届が出され，その後，調査の依頼，新発見の包蔵地の提示など種々の協議がなされた。そして，昭和58年1月1日から調査に入り，発掘調査は2月10日から3月30日まで行なわれた。

第1図

2．立地と調査の概要

調査対象地は，善通寺市金蔵寺町字下所に所在し，丸亀平野を北流する金倉川西岸にあり，西は国道319号を限りとする。地形は，南から北へ極めて緩く下っている。標高は，21m余から22m余の間に収まる。対象地内は，ほとんどが田で，種々の方向へ出水や水路が何本も走っている。東西方向は，必らずしも平坦とはいえず，出水や水路の周辺を低所として起伏している。1/10000の都市計画図をみると，下所の西方には旧多度郡の条里型地割が，東方には旧那珂郡の条里型地割がそれぞれ明瞭に残っているのがわかる。一方，下所を含む東西800mの幅の部分には，条里型地割のような規則性を見出すことは難かしい。

ところで，高重進氏は，那珂郡が6条まであることから，金倉川西岸にありながら那珂郡に含まれる主なところとして，務主より六条に至るところがあると指摘されている。下所は務主と六条のほぼ中間にある。『善通寺市史』は挿図において多度郡条里を延長して下所付近まで条里・坪界線を及ぼしている。

調査は，条里遺構の検出を目的として始められたが，予備調査を欠くため地形復元，遺跡の有無が確認できるように，対象地全体にわたってトレンチを設定した。トレンチは，現地形にみられる多度郡条里から延長してきた条里・坪界線に対して直角に設定した（N30W，N60E）。その結果，まず，対象地の南端においては金倉川まで130mを残して，北端で同じく160mを残して，それより西からはすべてのトレンチで砂礫層が検出された。一方，砂礫層を含まず幅150m前後をもって南北に帯状に広がる地域にはシルト層が存する。そして，この部分から，方向が条里方向と一致すると思われる溝や方形の掘り方を有する掘立柱建物跡が検出された。この段階で，昭和24年作図の地籍図を参照したところ，溝が検出された付近にN—30°—Wの方位で，

一辺約109mの条里坪が残存しているのを見出した。しかし，発掘調査はここで昭和57年度調査の期限を迎えた。

3．土層と旧地形

調査対象地のうち，金倉川西岸150m前後の部分（453番地と475番地を結ぶ線より以東）を除いて，砂礫層が現われる。砂礫層を含む地域の土層は，表土として灰色の耕作土が15cm前後，その下に褐色のすき床層があり，そして，この下に灰色の砂礫層が存している。但し，243—1・2番地設定トレンチでは，すき床層の下位に砂壌質の層が50cm前後存していた。砂礫層上面の標高は，21～22m余の範囲に収まり，全体的には南から北へ緩るく下っている。砂礫層は遺物をほとんど含まないが，243番地1・2設定トレンチからは，ローリングを受けた弥生式土器の小片が数点出土している。砂礫層の下位には，数層に分けられる砂質土が続いていた。このような砂礫や砂質土の存在は，かつて，この部分が洪水を被むったり，河道であったことを示しているものと判断できる。

4．遺構と遺物

金倉川沿いに150m前後の巾で南北に帯状に広がる部分から，溝と掘立柱建物跡，及び，散布する土師器が検出された。調査は継続中で，実測を行っていないため略報となる。

まず，514番地設定トレンチから，トレンチに直角方向の溝が6本，平行方向の溝が1本，斜方向の溝が1本検出された。このうち2本の溝から須恵器片が出土している。

515番地設定トレンチから，方形の掘り方をもつ掘立柱の抜き跡が2列になって6個検出された。掘り方の並びは，トレンチに対してほぼ直角方向に延びると思われる。遺物は出土していない。

575・577番地設定トレンチから，散布する土師器片を検出した。遺構に伴うものか，また，時期などは今後の調査に期待される。

5．おわりに

57年度の調査では次のことが明らかにされた。

① 国道319号の東，約400mの巾の中に，洪水や河道の痕跡が存すること。

② 金倉川西岸沿い150m前後の巾の部分に遺跡が存すること。

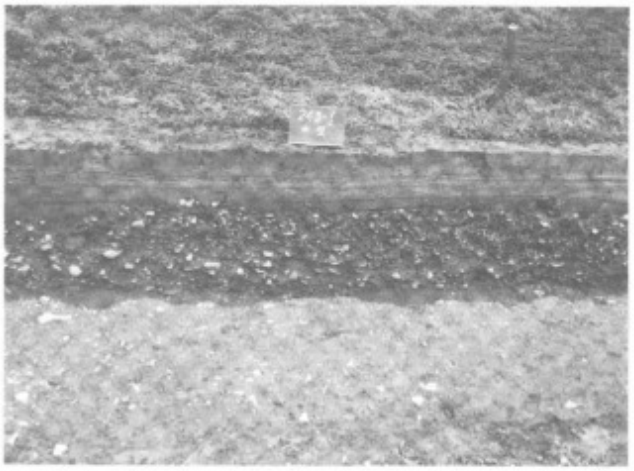
③ その遺跡は，条里遺跡と思われる遺構を含む複合遺跡であること。

今後の課題として，遺跡の範囲を確定し，新たな調査方法を検討する必要がある。（野中）

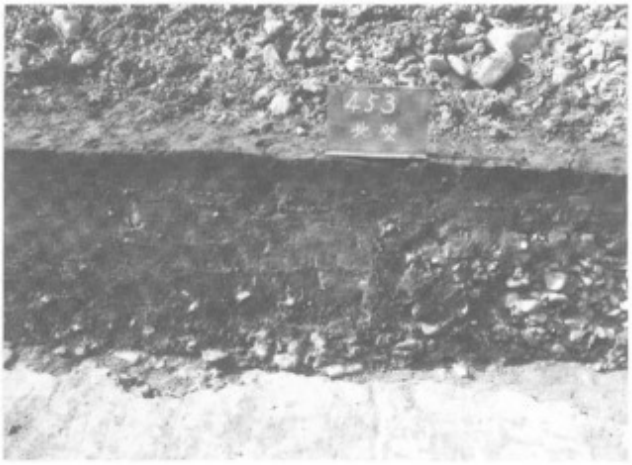
第2図　多度郡条里トレンチ配置図

0　50　100　200 m

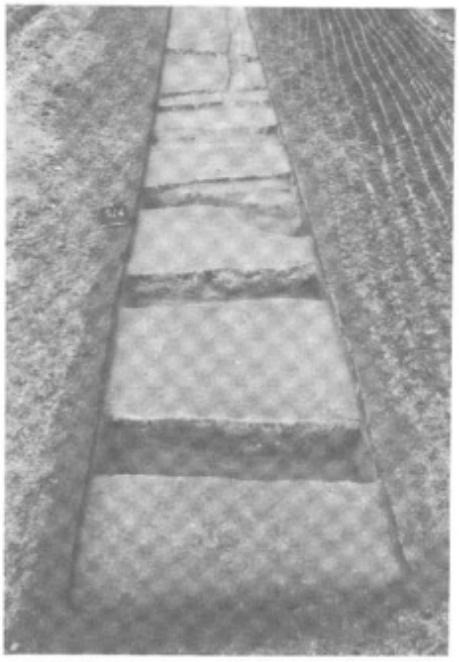
243番地１・２設定トレンチ全景（南より）



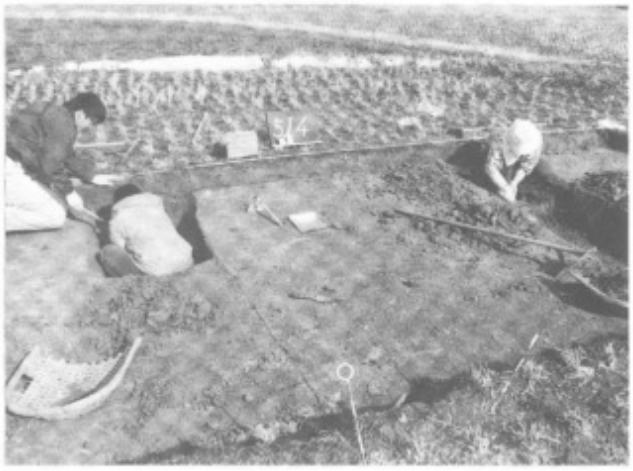
243番地１・２設定トレンチ西壁



435番地設定トレンチ北壁



514番地設定トレンチ溝状遺構（南より）



514番地設定トレンチ発掘風景

第３図

王　墓　山　古　墳

1．調査の経過

善通寺市の南部にひときわ高く聳える大麻山の北麓には，市街地から西に広がる田園地帯がある。その一角，大麻山の北方尾根支脈の先端と裾を接するように横たわる独立小丘陵が王墓山古墳である。

本墳において，最近，宅地造成計画が立てられ，遺跡保存を望む香川県及び善通寺市教育委員会は，計画変更を求めてしばしば関係者と協議を重ねた。その結果，事前調査の成果を持って再検討するとの合意を得た。そこで，善通寺市教育委員会が主体となり，香川県教育委員会の協力を得て緊急確認調査を実施することになった。

第1図　王墓山古墳の位置（1：25,000）

調査は，秋も深みゆく昭和57年11月15日に開始した。墳丘地形測量によって墳丘の形態を把握した後，斜面トレンチによる墳丘築造状況と墳裾の確認，石室の精査を行った。木々の間を縫っての墳丘測量，おびただしい落石を排除しながらの発掘という困難をきわめた調査は，約4か月を要して昭和58年3月末に完了した。なお，整理作業は調査と並行して実施した。

盗掘による破壊という当初の予想とは裏腹に特異な石室形態の検出，高質豪華な数多い副葬遺物の出土など一級史料が続出し，調査は実り多い成果をおさめた。あらためて保存措置が切望される。

2．遺跡の概要

善通寺市は，古代文化発祥の地として人口に膾炙する。大麻山一帯には，前期から後期に至るまで数多の古墳が散在している。中腹野田院前期積石塚や山麓にある宮ケ尾絵画古墳，後期岡古墳群などは日と鼻の先である。

ところで，大麻山の北麓には東西約1kmの間に7基の前方後円墳がほぼ直線上に並んでいる。東から磨臼山古墳，鶴ケ峰1・2号墳，北向古墳，王墓山古墳，菊塚古墳，北原古墳の順となる。いずれも古墳時代中期に属する。

王墓山古墳は，平地にわずかに隆起する自然丘陵地形を利用し，盛土築成によって壮厳な墳丘を造出した前方後円墳である。膨大な量の盛土を版築により固め，前方部が著しく肥厚する墳形的特徴をもつ。かつて，7基の陪塚を従えていたと言われ，現在でも数基の存在が確認されている。また，墳丘下方からは，箱式石棺の発見や円筒埴輪の出土が伝えられている。

過去において，本墳は盗掘を受けたとの噂があり，石室の検出や副葬遺物の残存はあまり期待できなかった。けれども，発掘の進展に従って予想を覆すような成果が続出した。横穴式石室の検出，内部施設の設置，金銅製品を始めとする遺物の多量出土など，県下の古墳史に価値ある資料と新たなページをつけ加えた。

3．遺　構

本墳は二段築成よりなる前方後円墳である。墳丘規模は，全長約45m，前方部巾20m余り，後円部径約25mを測る。また，後円部墳頂から墳裾までは，約5mの比高差をもつ。前方部は肥厚し，中期古墳としての墳形的特徴を示す。

ところで，後円墳丘中央部より，前方後円墳からは県下初の発掘例である横穴式石室が検出された。矩形の玄室に狭長な羨道をもつ両袖型である。壁石は扁平な小形安山岩割石を持ち送り気味に積み重ね，竪穴式石室の面影を残す。全長約7.5m，玄室長約3m，羨道長約4.5mを測る。玄門附近は，一枚の頑丈な板状扉石で閉塞されている。天井石は既になく，床面は全面砂利敷きである。

玄室内からは，内部施設として「石屋形」が検出された。これは県下では唯一，瀬戸内一帯でも数少ない貴重なものである。長側壁の一方を石室側と共有し，石室奥壁に接して1枚，それと平行して1枚の凝灰岩板石を短側壁としている。天井部には，1枚の巨岩が架構された形跡が見られた。「石屋形」は九州肥後地方に濃密な分布を示すが，本墳でも検出されたことから，何らかの伝播経路及び文化移入を考慮すべきであろう。

4．遺　物

本墳の特徴は，何と言っても良質で膨大な量の遺物出土である。金銅製冠帽や馬鈴を始めとして，装身具・馬具・須恵器などが，ある種のまとまりを見せながら石室全面を埋めていた。馬具や武具・武器は玄室奥壁附近に塊状となって集中し，須恵器は玄門閉塞扉石前に杯3セットと，他は玄室袖石附近に雑多な稠密をみる。また，「石屋形」からは，金銅製冠帽・馬具などの副葬納置をみる他，400個にものぼる各種装飾品が検出された。

これらの副葬遺物は，分布においてある種のまとまりを示すものの，雑然とした出土状態からして，二次的移動を考えざるを得ない。

以下，主だった遺物について少し触れておく。

ア．　金銅製冠帽

薄い4枚の三角形状の金銅板を頂部からの細い4本の板で押さえ，鋲留めしている。下縁部は，中央に密な連珠文風模様を配した帯をめぐらせている。一部に布様繊維の付着をみる。

イ．　鈴付大型雲珠

径20cmを計る大型の雲珠である。中央には径6cmの青銅製鈴を装着している。雲珠は鉄地金銅張りであり，鈴表面1/4には蕨手文が抽出されている。

ウ．　馬鈴